

明科の宝

Explore in Akashina



編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

Explore in Akashina

明科の宝

安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会



平成 31 年度 文化庁 地域の博物館を中核としたクラスター形成事業

カバー写真
明科地域を縦貫する犀川

明科の宝

編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会



扉絵について

元禄十一年塔原村絵図（大庄屋関氏文書・安曇野市文書館寄託）

雲龍寺、給然寺、法音寺のほか、右上には城山（塔原城址）、犀川の端には八面大王がまつられた祠がみえる。

はじめに

安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員長 原 明芳

「明科は、安曇野の入り口であった」

私はこう言って明科を紹介する。

今から一二〇〇年ほど前、官道である東山道は現在の松本市街地を抜け、小県郡を通過して多賀城へ向かっていた。また、松本市内で分かれた越後国へ向かう北路が四賀地区を抜けて麻績を通り、善光寺平へ抜けていた。また、四賀地区から分かれた道が会田川に沿って明科に抜ける。安曇野への文物の出入りをさせる、まさに安曇野への入り口であった。犀川とそれに沿った道も、上流、そして下流から多くの文物をもたらした。さらに明治時代、国策により篠ノ井線が開通、明科はやはり安曇野の物流の中心であった。素晴らしい自然景観がある、明科の山間地。そして土地に根付いた養蚕、麻、煙草、炭焼きなどさまざまな生業は、豊かな暮らしを生み出してきた。

他地域との活発な交流と、豊かな自然の中での暮らしは、今回紹介できなかったものを含めて多くの宝が生み出したのである。

これらの宝を探しているとき、目に見えない「宝」がたくさんあることに気づいた。それは、宝を生み出してきた人々の英知と力、そして伝えてきた人々の心である。

今後も、気づかなかった数多くの宝の発見、そして新たな宝が創りだされ目にできることをとても楽しみにしている。

令和二年三月



旧 東川手村役場

明科の宝

「目次」

はじめに

関連地図

第1章 明科をつくる自然

1	明科の大地の形	8
2	太古の明科とオオツノジカ	12
3	里山の豊かな生物多様性が息づく長峰山	14
4	特徴ある自然と景観 岩洲公園	20
5	犀川や御宝田周辺の生き物	22
6	廃線敷とけやきの森公園	24
7	潮神明宮や明科廃線敷の生き物	26
8	押野山の雑木林と堤（ため池）	28
9	南陸郷の地層から	30
10	松枯れの拡がり	32

第2章 掘り出された明科の歴史

1	旧石器時代～縄文時代	36
2	ほうろく屋敷遺跡	38
3	北村遺跡	42
4	弥生時代～古墳時代	46
5	潮古墳群と栄町遺跡	50
6	奈良・平安時代	54
7	明科廃寺	56
8	古殿屋敷遺跡の有力者の墓	60

第3章 明科の中世と近世を歩く

1	莊園の時代、中世	62
2	明科地域の二大勢力・海野氏と日岐氏	66
3	戦場となった明科と大小の山城群	70
4	近世の明科、残る村絵図	74
5	大足村を歩く 江戸時代にタイムスリップ	78
6	龍門淵公園 犀川の流れを鎮め、雨乞いを祈った祠	82
7	明科の寺院 多くの文化財を伝える	84
8	清水山光久寺 創建は鎌倉時代	86
9	泉福寺 武田信玄ゆかりの寺	92
10	長光寺 お薬師さまの崇敬厚い密教寺院	96

第4章 発展する明科―近現代

1	篠ノ井線と明科駅	98
2	明科と大逆事件	103
3	川手道、国道一九号 犀川筋を結ぶ主要交通路	106
4	邑 <small>むら</small> に不学の戸なく 三十校	110
5	倉科多策 農工商共栄の明科を目指した策士	114
6	中村善策と明科	116
7	青木祥二郎 明科を愛し、明科の隆盛を願い続けた能楽師	120

第5章 信仰と暮らし

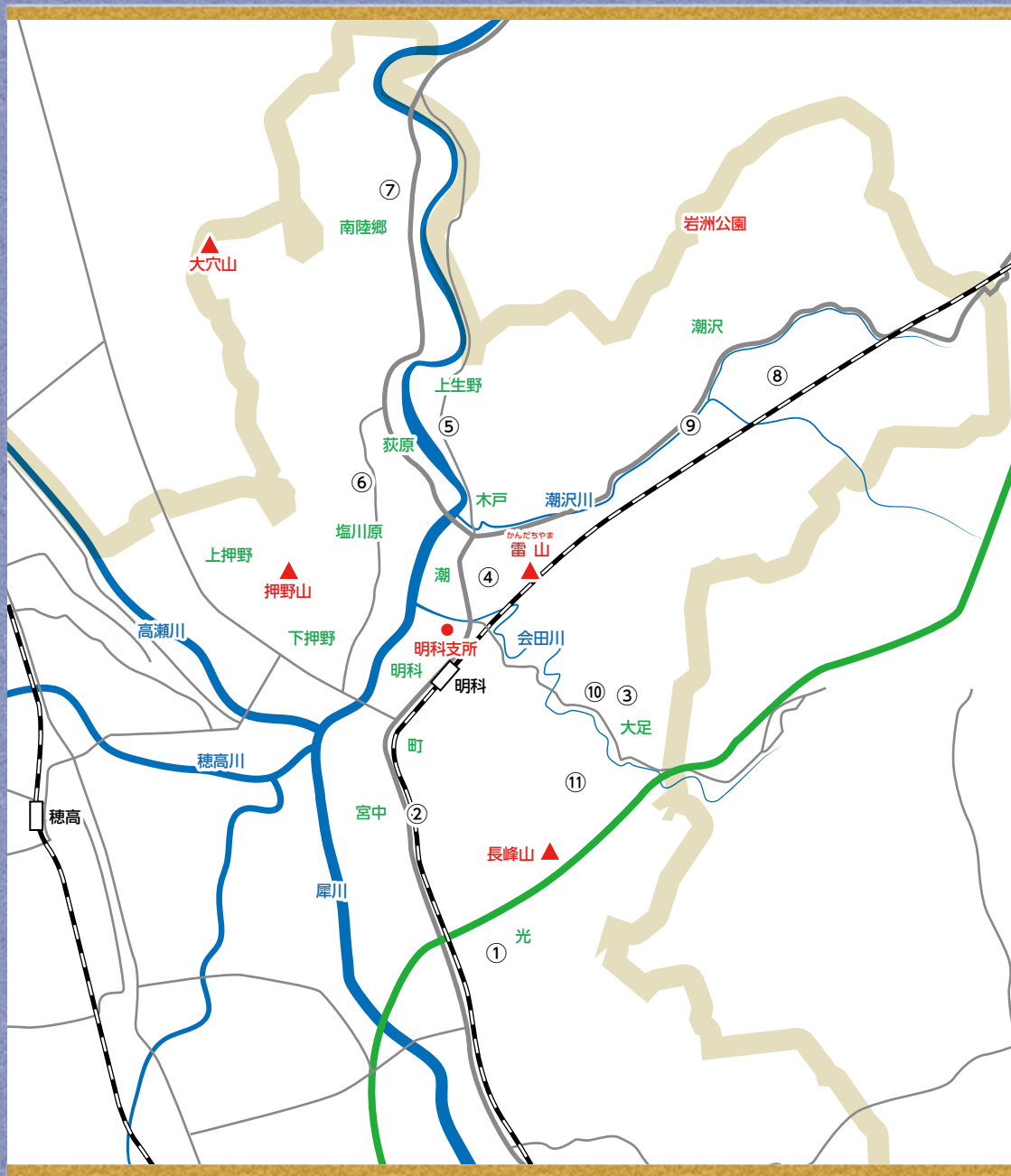
1	明科の人々の暮らしの変遷	124
2	山と川の恵み	130
3	自然とともにあった暮らし	140
4	暮らしの中にある祭り	150

第6章 明科町そして安曇野市へ

1	明科町そして安曇野市へ	174
2	町歌「わが町」	178

参考文献	179
------	-----

『明科の宝』 関連地図



本書で紹介する主な祭り

- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|------------|
| ①光・五社神社の舞台 | ②塔の原・犀宮社の柴舟 | ③大足・諏訪社の柴舟 | ④潮神明宮の柴舟 |
| ⑤上生野・正八幡宮の柴舟 | ⑥荻原神社のお船 | ⑦小泉・和泉神社の柴舟 | ⑧柏尾の風の神の祭り |
| ⑨花見の地藏堂の祭り | ⑩平の毘沙門堂のオコシ | ⑪清水の風の神の祭り | |

1 明科の大地の形

明科はどんな場所？

明科は、安曇野の北東側に位置する。塔ノ原と下押野をつなぐ犀川橋付近は、南から犀川、北西から高瀬川、西側から穂高川といった大きな川が集まる場所で、三川合流地点と呼ばれている。東山からは主に会田川、潮沢川が犀川に流入し、複数の川が集合した犀川は、大河となって生坂へ流れ下っていく。明科は、松本盆地全ての川が集まる場所であり、安曇野市の標高最低地点は明科南陸郷の北端で、四九七㍎である。

明科の山地は、標高七〇〇〜九〇〇㍎が主体的で、最高地点は池桜北側の萱野峰九四四㍎、長峰山の九三三㍎がそ

れに続く。平地との比高は約二〇〇㍎で、松本盆地西側の二〇〇〇㍎を超える北アルプスと対照的な低山の山地である。

姿を変える犀川

松本から流れる犀川は、明科に入ると全く違う姿になる。松本盆地の東側を、東山に沿うようにほぼ直線的に北上してくるが、三川合流地点を過ぎるとほどなく山地の間を蛇行しながら流れるようになる。

この蛇行は、かつて、犀川が平地を自由に蛇行していた古い姿を残すものである。山地が隆起することで、蛇行する水流が河床を削り込み、山地の間に深い谷を形成した。

その後、約八〇万年前ごろから、糸魚川・静岡構造線断層帯に属する断層が活動したことで、東の山地が隆起し、西側が沈降した。





蛇行する犀川と段丘（木戸橋上流から北を望む）

犀川は、盆地内部では、断層の西側の、沈降して低くなった直線的な地形に沿って流路をとるようになった。こうして、現在の犀川の姿が成立した。

段丘の町明科

河川の流域が段階的に隆起し、河床が下刻されることで、流域にゆるやかな階段状の平坦面、河岸段丘が形成される。豊科田沢から連続する犀川右岸、押野崎から北側の左岸は特に明瞭な段丘面を複数形成している。最も低い段丘面と、氾濫原との比高は、三〇メートルに及ぶところもある。会田川流域でも、両側に段丘地形が確認できる。こうした段丘の平坦面と、長峰山地、



別所層の泥岩（長峰山）

押野山周辺の中山山地を扇頂とする小規模な扇状地の上
が、明科に暮らす人々の主な生活圏となっている。

明科の地質

明科は、北部フォッサマグナの西縁に位置する。フォッサマグナは、約二〇〇〇万年前以降に、日本列島中央部に、列島を縦断するように形成された海洋の堆積物からなる地質帯である。フォッサマグナの西端は、糸魚川・静岡構造線であり、押野山の西麓を通り、三川合流地点から南では犀川に沿うように南へ連続すると推定されている。

明科には、フォッサマグナの地層のうち別所層、青木層、小川層、大峰層群が分布している。別所層、青木層、小川層は浅海～深海底で堆積した泥岩、砂岩、礫岩からなる。明科の大部分を占める別所層、青木層には化石が含まれており、魚類の骨や鱗などが得られるほか、豊科や松本市四賀では、同じ地層からアシカの仲間やクジラ類など、海生哺乳類の化石も発見されている。小川層は主に生坂から北に分布し、明科では、岩洲など市村境でわずかに露出する。岩洲では、小川層の砂岩、礫岩が独特の景観をつくっている。大峰層群は、中山山地の西側、押野崎から池田町に向かい広く分布する、浅い海から陸上の環境で堆積した地層である。明科では、五ノ一〇の円磨された礫岩が主体的

で、もろい地層となっている。

深海から浅海、陸上で堆積した多様な岩石が分布するの



大峰層群の露頭（押野山白崖）

が明科である。安曇野市内でこれほど多様な地質が見られる地域は外にない。
（横山幸子）



魚の鱗の化石（別所層、長峰山）

2 太古の明科とオオツノジカ

麦畑から絶滅種化石

オオツノジカの化石が中川手大足吐中^{とちゅうちゅう}で発見されたのは、昭和三十一年（一九五六）春のことである。麦畑の土を客土用に掘り下げていたところ、地下五メートル付近で偶然発見された。採取された化石は、松本市立博物館に鑑定のため持ち込まれ、信州大学の小林国夫氏の依頼を受けた早稲田大学の直良信夫^{なおら のぶ}氏によって、オオツノジカの仲間であると鑑定された。オオツノジカは、およそ一万年前までに絶滅した大型のシカの仲間である。このとき発見されたのは、左側の角一点とその破片一点、八本の肋骨^{ろっこつ}、頭蓋骨^{ずがいこつ}の破片一点だった。左側の角は、二股に分かれた根本の部分で、長さはおよそ四〇センチである。

昭和三十六年（一九六一）、学習院大学で、オオツノジカの化石と同じ地層で発見された樹木の放射性年代測定を行った。当時の測定値を、現在のプログラムに入力して、暦年較正という年代を導く操作を行うと、約二万年前という年代となる。つまり、オオツノジカの化石が含まれていた地層は、約二万年前の地層と推定できる。

オオツノジカの姿

明科で見つかったオオツノジカの化石は、いずれも断片的で、全体像は謎である。しかし、角の根本付近の分岐の形や、後方の角が長く伸びることから、信濃町野尻湖などで旧石器時代の地層から化石が発見されている、ヤベオオツノジカの仲間であると考えられている。ヤベオオツノジカは、ニホンジカよりずっと大きく、二股に分かれた角がそれぞれ掌（手のひら）のように広がっていることが特徴である。日本国内では、角の根本から掌状の部位だけで四〇センチを超えるものや、掌状の部分が長さ六〇センチ以上という化石の発見例もある。肩までの高さは一七〇センチを超えるともいわれており、大変に迫力のある姿が推測できる。

オオツノジカの生きた明科

オオツノジカが発見された同じ地層から、松ぼっくりや立木のままの樹木が発見されている。この中には、チョウセンゴヨウ、トウヒ、ヒメバラモミ、コメツガ、シラビソなどの針葉樹が含まれていた。これらの針葉樹林は、亜高



2万年前の植生のイメージ



復元されたオオツノジカ

山帯など冷涼な地域の植物で、現在明科地域には分布していない。北アルプスでは標高一五〇〇〜二五〇〇メートル付近に広がり、登山しなければ見ることのできない森である。化石が発見された場所は標高約五七〇メートル前後であるから、この地層が堆積したころは、現在の明科よりずっと涼しい環境だったと想像できる。

(横山幸子)



明科産ヤベオオツノジカの左角化石(松本市四賀化石館所蔵)
植物は左から、チョウセンゴヨウ、シラビソ(日本固有)、コメツガ(日本固有)

里山の豊かな生物多様性が息づく 長峰山

秋の七草の花たちが咲く草原

安曇野を見渡す眺望地として知られる長峰山は標高九三三[※]。山頂には見晴らしを保つために草原が維持されている。わずか〇・六[※]ほどの面積であるが、これほどのまとまった草原植生は市内でもほかにない。里に近い

一〇〇〇[※]以下の標高で一定の面積の草原植生が維持されている場所は、実は現代では大変貴重である。ここには、ほかでは少なくなってきた草原性の多様な動植物が生息している。

草原の植物が華やかになってくるのは、初夏のころから。明科ではお馴染みのアヤメは、明るい草地に自生する



アヤメ



エゾカワラナデシコ



ユウスゲ



9月の草原のようす

植物で、五月下旬頃から草原一帯でみることができる。ウツボグサ、ノアザミ、ニガナやシロバナニガナが咲き始め、草原は彩りを増していく。八、九月にかけて、草原の開花植物は盛りを迎える。ユウスゲはレモンイエローのやさしい色合いで、咲きそうと長峰山ならではの景観が楽しめる。ユウスゲはその名のとおりの夕方から夜間、翌朝にかけて開花する植物である。ユリ科らしいよい香りを放って昆虫たちを誘う。スキの穂が伸びてくる頃にはエゾカワラナデシコやオミナエシ、マルバハギ、ワレモコウなどが咲きそう。こうした植物は、万葉集で山上憶良やまのうえのおくらが詠んだ秋の七草とも重なる。花そのものだけではなく、その植生や風景、また深まりゆく秋の情景の中に、千年後に生きる私たちは身を置くことができる。

草原をすみかとする多様な生き物たち

長峰山の山頂草原には希少種に名を連ねる草原性の生き物たちが生息している。かつては日本産チョウ類の中でも最も絶滅が危惧されているヒヨウモンモドキも生息していたが、すでに安曇野市はおろか長野県内からも絶滅したといわれる。昭和三七年（一九六二）の標本と、食草のタムラソウだけが当時を偲ぶようになっている。山頂草原に生息する種の代表格としては、スズメガの仲間のヒメスズメ



「昭和 37 年 7 月 7 日長峰」のラベルが
残るヒョウモンモドキの標本

市民らの協働により行われた草刈りが奏功したのかもしれない。

長峰山頂は、キアゲハやツマグロヒョウモンなどのチョウの雄が「山頂占有」と呼ばれる縄張り行動を行う場所でもある。縄張りに入ってきた別の雄などを、緊急発進して激しく追い立てる。春から秋まで観察できる山頂の風物詩でもある。

手入れの行き届いた草原は、バッタやキリギリスたちの絶好のすみかでもある。夏になるとキリギリスが鳴き交わ

が挙げられる。幼虫はカワラマツバの葉を食べて育ち、さなぎで越冬、七月ころから夜の草原を飛び回る美しい蛾である。また、幼虫がワレモコウを食べるヒョウモンチョウは、令和元年七月に、安曇野市内で一五年ぶりに確認された。近年、行政と

す声があちらこちらから聞こえてくる。バッタやイナゴ類で注目されるのは、メスアカフキバッタとイナゴモドキであろうか。どちらも国・県・市のレッドリストに名を連ねる希少種であるが、この草原では比較的普通に見ることができる。

長峰山には「チョウの森」と呼ばれる、手入れの行き届いた森林があり、NPO 団体が長年手入れを行っている。ここで確認されたチョウ類は一〇〇種以上を数え、手入れを始めたところ確認できた種数を大きく超えた。生物の多様性を高めるために、人が自然に手を入れることの大切さを



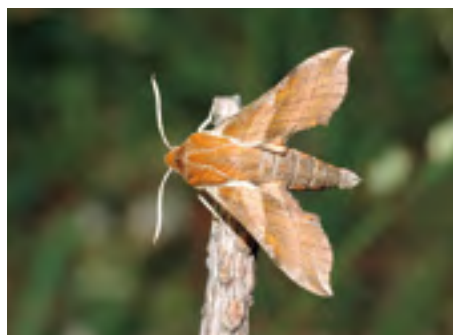
15 年ぶりに発見されたヒョウモンチョウ



山頂草原で活動するキアゲハ



アトリの大群



ヒメスズメ



林内を低く飛ぶオオヒカゲ



山頂には展望台や東屋が整備され、憩いの場となっている



地元住民や関係者が協力して草刈りを行い、山頂草原を維持している

長峰山の山頂も、地元の宮本の共有地であり、戦後に撮影された空中写真をみると、かなり広範囲に草原と灌木林が広がっていたようだ。多くの農家で牛や馬を飼っていた時代、夏になると家ごとに山頂へ登ってイネ科の植物を中心に草を刈り、干して、冬場の餌として確保したという。草原にはキキョウやオミナエシ、マツムシソウがたくさん自生しており、お盆には周辺の集落から子どもたちが盆花を採りに行った。しかし昭和四〇年代に耕運機が普及すると

示しているといえよう。ことにオオヒカゲは明科を代表する希少なチョウで、市内で確実に生息しているのは明科山系だけである。幾何学的に並んだ「蛇の目」紋が美しい。長峰山は北アルプスや安曇野を見渡す眺望のきく場所だけあって、秋には東南アジアなどに移動するワシ・タカ類の渡りをしばしば見ることができると。また、冬鳥の代表格であるアトリの大群も、長峰山頂で観察できる。

生き残った長峰山の草原

広い草原（あるいはそこに灌木^{かんぼく}も生育する）、という植生を見ることができるとは、今ではスキー場や牧草地くらいしかないが、昭和三〇年代くらいまでは集落の周辺に広く見られた。草地は緑肥、屋根材（茅）、農家の労働力である牛馬の餌を確保する場所として、なくてはならない重要な植生であった。



長峰山での自然観察

ともに牛馬は姿を消し、草原は急速に利用されなくなった。暮らしの燃料が化石燃料へと大きく変化していくこの時代、全国的に草原が激減していく。また山ではスギやカラマツの植林が盛んに行われ、森林化が進んだ。

長峰山も例外ではなかったが、幸いにも山頂だけは林道長峰線の開通とともに眺望地としての整備が進み、見晴らしを確保するために草原が維持されることとなったのである。川端康成、東山魁夷、井上靖の三氏は昭和四五年にこの地を訪れ、眼下に広がる安曇野の美しさを讃えた。山頂の石碑には、東山魁夷の言葉が刻まれている。

草原は人の手によって維持される

草原はそのまま放置すると、次第に樹林化が進む。人の手が入らなければ維持できない植生である。長峰山の草原では長らく地元の共同作業として年一回、夏・秋季の草刈りが行われてきた。パラグライダーの出発地としても利用があり、そこはさらに草刈りが頻繁に行われている。

『安曇野市版レッドデータブック』において、長峰山の草原は「重要な自然環境」として位置付けられている。絶滅危惧種も含めた多様な草原性の動植物が生息するエリアとして、以前より注目されており、自然観察会などもたびたび行われている。近年では、この山頂草原の自然環境を保全するために、改めて調査を行い、行政や市民や利用団体、自然保護団体など関係者が協力するかたちで新たに夏季の草刈りもスタートした。

草原の歴史は一万年前、縄文時代早期にまでさかのぼるという。草原は人間活動が作り上げてきた文化的景観なのである。そしてそこには草原環境に適応して生き抜いてきた生態系が息づいている。長峰山の草原はその景観や開花植物の美しさだけでなく、人間が自然とともに作り上げてきた豊かな歴史をも示してくれている。

（那須野雅好、松田貴子）

特徴ある自然と景観 岩洲公園

自然性のアカマツ林が成立しているわけ

岩洲公園は標高およそ八〇〇㍎で、明科地域の北東部の市境に位置する。明科は安曇野市内でも特にアカマツ林が多いが、その多くが人為的に育てられたアカマツである。しかし、岩洲ではほとんど人手が入っていない自然性のアカマツ林が分布する。ユニークな形の岩肌と厳しい環境にたくましく育つアカマツ林は独特の景観をつくっている。

アカマツという植物は先駆樹種^{せんくしゅしゅ}といって、乾燥に強く、強い光を必要とし、植生の遷移^{せんい}の初期段階で真つ先に育つ樹木のひとつ。周辺の山腹であれば、初期はアカマツであっても、土壌が形成されてくると次第にコナラやサクラ類といった落葉広葉樹が増えて森林の遷移が進む。しかし尾根地や岩場などでは時間が経過しても土壌が形成されず、乾燥してやせた土地のままなので、アカマツ林が更新されていくことになる。近年は松枯れの個体も増えており、今後の推移を見守っていかなければならない。



白洲岩周辺

このアカマツ林をつくっているのはどんな地質なのだろうか。岩洲の尾根沿いは、フォッサマグナの海に堆積した地層のうち、小川層という地層が分布している。小川層の分布は、生坂、本城、坂北、麻績と北に広がっており、安曇野市では岩洲と物見岩・二見岩山地に局所的に見られるだけである。砂岩や礫岩が主体となっており、硬質で侵食に強い。また砂岩では砂粒子による風化もみられる。こうした地質条件もアカマツ林の成立に大きく関与している。

礫岩と砂岩が露出する地質

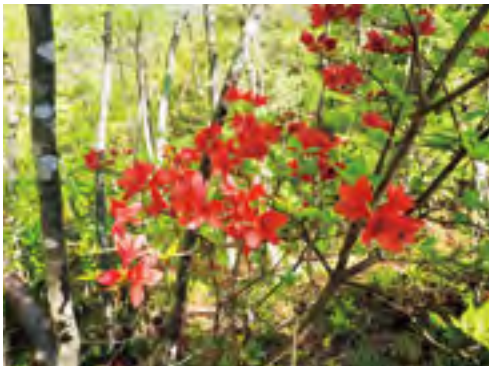


烏帽子岩

厳しい環境を生き抜く植物たち

このような特殊な環境で育つ植物として、アカマツ林の下層にはネジキ、ニシキギ、ヤマツツジ、カシワ、ネズミサシといった植物が自生している。また安曇野市内では限られた場所で見られるイヌブナやヒカゲツツジも生育する。ヤマツツジの開花期や、落葉樹の紅葉の時期には、それを楽しみながら歩く人の姿もみられる。高松薬師城といった山城跡を訪れる人もいる。アカマツ林とともにこの厳しく特殊な環境を生き抜いている植物たちを大事にした。〔岩洲公園周辺は『安曇野市版レッドデータブック』で「重要な自然環境」に選定〕

（松田貴子）



開花期のヤマツツジ



ネズミサシ（雌株）

犀川や御宝田周辺の生き物

明科地域は野鳥の宝庫である。地域内で確認された種数は一六〇を超える。ことに水鳥の仲間が多い。一二月から三月にかけての御宝田遊水池は、安曇野屈指のコハクチョウやガン・カモ類の飛来地として知られ、多くの観光客やバードウォッチャーで賑わう。このうち圧倒的に数が多いのがオナガガモで、餌を与える人の後をゾロゾロと付いて歩く姿がある。オナガガモには一羽の雌を複数の雄が取り囲んで泳いだり、旋回を繰り返しながら飛ぶ「囲み追い」という求愛行動が見られる。雌は自分を囲んだ雄の中から気に入った相手を選ぶため、雄は求愛ポーズなどで懸命に気を引こうとする。

犀川流域でよく見られる「害鳥」とされる鳥がカワウとカラスである。ことにカワウの漁業被害は深刻で、猟友会などが駆除にあたっているが個体数はなかなか減っていない。カワウの潜水能力は極めて高く、



オナガガモの「囲み追い」



コイを捕食するカワウ

一分以上潜り続けては魚を捕まえる。大型のコイも頭部をくちばしで挟んで弱らせた後、ひと呑みにしてしまう。

御宝田遊水池や犀川では、時おり珍しい野鳥を見かけることがある。



ミサゴ（県水産試験場近く）



コウノトリ



ジャコウアゲハ雄

ミサゴは魚専門のハンターとして知られる大型の猛禽で、水中に飛び込んで魚を捕食する。水しぶきを上げる豪快な狩りの様子は迫力満点である。令和元年にはコウノトリが水産試験場近くで目撃されたり、海ガモのコオリガモが確認されて話題になった。明科地域は、こうした珍客に巡り合える可能性が高い場所である。

河川敷では、その環境に適応した生き物を見ることができ。カワラバッタはその名のとおり、全体が砂礫のような体色で周囲に同化する。そして、飛ぶ瞬間だけ青く美しい後翅を垣間見せてくれる。

チョウ類では、クロツバメシジミ、ミヤマシジミ、ジャコウアゲハが挙げられる。このうちジャコウアゲハは、市

内でも発生地が限られるチョウで、幼虫はウマノスズクサを食べる。長野県水産試験場周辺には、河川管理でウマノスズクサが残されるため、毎年、ヒラヒラと舞う黒いアゲハチョウを見ることが出来る。雄は「麝香^{ジャコウ}」の名に由来する香りを放つが、有毒のチョウとしても知られている。

（那須野雅好）



カワラバッタ

6 廃線敷とけやきの森公園

廃線敷と地すべりの歴史

現在、トレッキングコースとして知られる廃線敷遊歩道は、明治三十五年（一九〇二）に開通した、旧国鉄篠ノ井線の西条〜松本間を走る路線であった。昭和六三年（一九八八）に新しい線路が開通したため、廃線となり、その後一部の路線が遊歩道に生まれ変わった。

地質の側面からみると、周辺は地すべり地帯と重なっており、山間部谷間では地すべり跡と思われる特徴的な地形が各所でみられる。地すべりの頭部に半円状の急斜面や崖があり、その直下に陥没地や平坦地という地形である。大正一三年（一九二四）頃の写真には地すべりによって蒸気機関車の客車が脱線したようすが残されている。

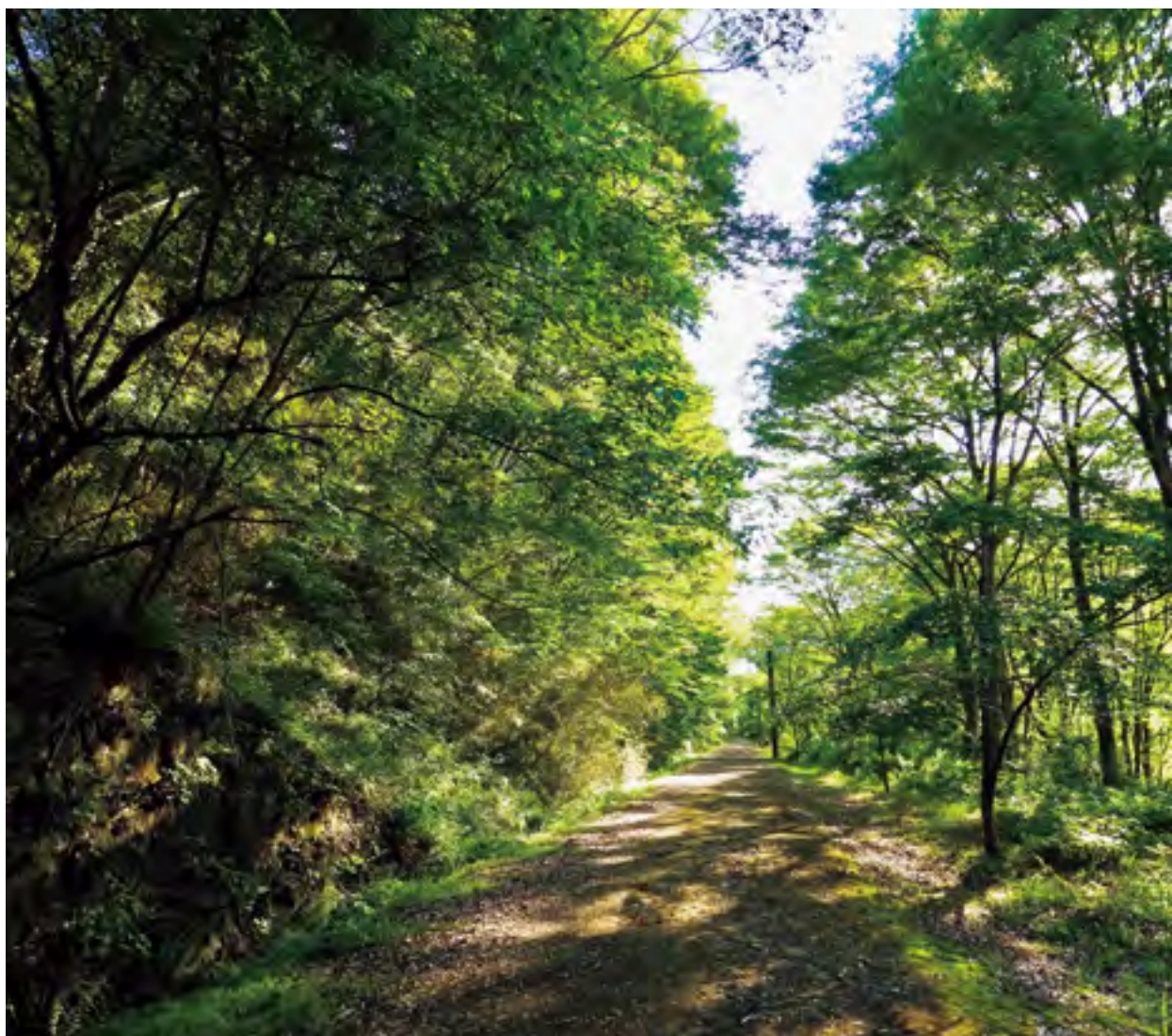
砂防としてのケヤキ林

廃線敷沿いに広がるけやきの森公園は、マレットゴルフ

フ場や自然観察用に整備した樹林である。『明科町史 自然編』によると、昭和三〇年代にニセアカシアの樹林を伐採してケヤキの苗木三万本を植栽し、面積は二〇鈔に及ぶという。周辺はかつて地すべりがあった地形であり、ケヤキは鉄道防備林として植栽された。廃線に伴い、線路とその上部の斜面を旧国鉄から明科町が払い下げを受けて、平



地すべりにより脱線した客車（大正13年頃）



廃線敷の遊歩道とケヤキ林

成五年（一九九三）に公園として整備された。

ニセアカシアは帰化植物で河原や荒地などに真っ先に生育する先駆植物でもある。地すべりによって新しく広がった土壌に入り込んで樹林を形成したのだろう。かつては砂防樹種としても利用されたが、ある程度成長すると根ごと倒れやすい傾向を持っており、現在は砂防には不適切とされる。

一方、ケヤキは公園や社寺によく植栽される樹木である。明科では沢沿いの急斜地に多く自生している樹木で、潮沢左岸の斜面にも多くみられる。ケヤキは太木になるが斜面でもしっかりと根を張るため、砂防の役割を果たす。公園やトレッキングコースを含めて、現在では緑豊かなケヤキの樹林が形成され、春は新緑、夏は緑陰、秋は紅葉と、四季折々の美しさを楽しむことができる。

（松田貴子）

7 潮神明宮や明科廃線敷の生き物

潮神明宮から明科廃線敷にかけてのケヤキ林は、この地域の特徴といえる。ことに潮神明宮のケヤキ林は、天然林と考えられ樹齢三〇〇年以上はあろう巨木が境内を囲む。ケヤキの古木には多かれ少なかれ「樹洞」が見られ、それを生き物たちが利用している。

その筆頭格がムササビである。「空飛ぶ座布団」とも呼ばれ、四肢をつなぐマンントで滑空するが、夜行性のためその様子を見るのは難しい。ただ、樹洞を丹念に観察していると、昼間でも巣穴からちょこんと出した顔を見かけることがある。また、大きな樹洞では毎年のようにフクロウが営巣し、五月になれば親子で並ぶ姿を目にする。雛はまだろくに飛べないうちに巣立ち、巣から離れた木立の中で親に餌をもらいながら育つ。最近、こうした樹洞をもつ老木が安

全面への配慮などから伐採されている。明科廃線敷の山手側には、かつて地滑り防止のために植



樹洞から顔をのぞかせたムササビ

えられたケヤキ林が続いている。その一角で平成二九年に興味深いできごとがあった。ナナフシモドキという昆虫が大発生したのである。何万匹というナナフシがケヤキを中



フクロウの親子



トラクターのライト部分に群れるナナフシモドキ

心とした草木の葉を食い尽くし、山の上にある集落に押し寄せた。どうやらこの虫は傾斜地を上る習性があるらしく、その後の生息地は山地上部へと移動しているという。ナナフシモドキは雌だけで子孫を残すことのできる昆虫である（単為生殖）。これまで安曇野市内における記録はな

く、それどころか長野県内の記録も極めて少ない。一匹の雌が自動車に付くなどして移動してきたのか、はたまた、雌を捕食した鳥の排泄物に卵が入っていたのか、ナナフシモドキの謎の発生は令和になっても続いている。

（那須野雅好）

押野山の雑木林と堤（ため池）

押野山は標高六九五メートルの緩やかな山である。南側の傾斜地には集落があり、里山の環境をよく残した山でもある。養蚕が盛んだった時代には広くクワが栽培されていたが、現在は利用されなくなった桑畑が放置され、あちらこちらで密生し高木化している。コナラやクヌギが広く自生していることから、かつては薪炭林としても利用された山だったことがうかがえる。



縄張りを張るオオムラサキ雄（押野山）

押野山を代表するチョウとしては、国蝶としても知られるオオムラサキが挙げられる。雄の翅表は光沢のある青紫色で、幼虫はニレ科のエノキを食べて育つ。七月に入ると梢で縄張りを張る雄をよく見かける。時には相手が小鳥であっても激しく追い立てる。



メスアカミドリシジミ雄の縄張り飛翔（押野山）



チョウトンボ



ウシガエル



冬鳥として姿を見せるルリビタキ

また、クヌギやコナラなどのブナ科の植物に、その多くが依存するミドリシジミの仲間も多い。雄はその名のとおり緑や青色の金属光沢の美しい翅を持つ。

押野山周辺にはいくつかの灌漑用の堤（ため池）がある。こうした場所ではトンボ類が豊富に見られる。チョウトンボはその名のとおりチョウのようにヒラヒラと飛ぶトンボで、平成一七年に「山の堤」で見つかった以来、徐々に分布を広げている。

ウチワヤンマやリスアカネは、市内では明科地域でしか

確認されていない。また、こうした堤ではカワセミをよく見かける。「翡翠」とも称される美しい鳥で、堤近くで営巣することもある。また、明治期に日本に入ってきたウシガエルもかなりの数が生息している。「ブォーブォー」とカエルらしからぬ鳴き声が響く。

野鳥では、初夏にはオオルリやキビタキ、秋には渡り途中のエゾビタキなどが見られる。また、冬にはルリビタキやベニマシコなどが見られ、年間を通じてエナガやヤマガラなどが暮らしている。押野山は野鳥観察にも適した場所なのである。

（那須野雅好）

南陸郷の地層から

犀川と段丘

南陸郷小泉の睦橋周辺では、段丘面と水面の高低差は約一〇メートルに及ぶ。西の中山山地から張り出すような段丘面上

は小泉の集落となっている。縄文時代早期末から近世にかけての遺跡であるほうろく屋敷遺跡もこの段丘面に立地する。段丘の形成時期は不明だが、少なくとも縄文時代早期末以前に形成され、数千年にわたって人々の生活の舞台となっている。

日野橋の別所層

安曇野市の標高最低地点は、南陸郷の北端、犀川にかかる日野橋の西側にある。日野橋の兩岸は生坂村であるが、池田町八代峠から流下する八代沢が生坂村、池田町、安曇野市の市町村境であり、安曇野市の標高最低地点は八代沢と犀川の合流地点である。この場所には、別所層の泥岩が露出している。黒色でバラバラと剥がれる性質で、タイ



段丘上の小泉集落（睦橋から）

やイワシの仲間の鱗や骨、炭化した植物の化石が含まれている。泥岩は名の通り、肉眼で確認しづらいほどの細粒な泥でできている。泥は流れのある場所では堆積せず、停滞水域に堆積する。流れのない静かな深海底の堆積環境をうかがわせる。

犀川左岸の青木層

泥岩の観察地点から西では、岩相が変化し、青木層が露出する。犀川を望む西の山地の高台には、美しい縞模様様の地層が露出する。中粒～細粒の白色や褐色の砂岩、黒色の泥岩が交互に重なり、縞模様を作っている。この地層は急角度で西に傾斜している。

明科の全域において、フォッサマグナの地層であ



葉理の発達した砂岩泥岩互層



傾斜した青木層

る別所層、青木層、小川層は、水平堆積後に地殻変動を受け、全体的に地層が折り曲げられ、しゅうまぐ褶曲という構造となっている。紙の束を水平に持ち、左右からぐっと押した時のたわみに例えることができる。この構造のため、明科の地層はほとんどが傾斜している。明科から北側一帯の地質を図にした地質図は、褶曲構造がとも分かりやすく、かつて高校の地学の教材として扱われたこともある。（横山幸子）

崩壊地に育ったくましいフジアザミ

明科には、キク科のアザミの仲間、世界最大級の頭花（キク科は小さな花が集まって、花のまわりをつくっているが、これを頭花という）をもつフジアザミが自生している。谷や林道に面した急斜面の崩壊地などでみられ、大きな根出葉を広げて晩夏から秋にかけて花をつける。

日本固有種でフォッサマグナと関連する分布をもつ。安曇野では限られたところにしか生育していないが、迫力ある株と大きな頭花は一度見たら忘れられない。また植物体に硬く鋭いとげをもっており、出たばかりの新葉でも触るととても痛い。このとげは動物の捕食から身を守るためと考えられている。



フジアザミ

10 松枯れの拡がり

虫が媒介する松枯れ

現在、安曇野市内各地では松が集団的に枯れる症状が広がっている。「松枯れ」や「松くい虫」などと呼ばれ、正式には「マツ材線虫病」という。「マツノザイセンチュウ」という目に見えない小さな線虫が松の樹体内中に入ること、松が萎れて枯れてしまう病気である。

このマツノザイセンチュウは、明治時代に日本に入ってきた外来種で、抵抗性のない日本の松、特にクロマツやアカマツは枯れやすいとされている。マツノザイセンチュウは、自らの次の松の木に移動することができない。このため、主に「マツノマダラカミキリ」というカミキリ虫がその手助けをする。



羽化脱出するマダラカミキリ

マツノマダラカミキリは、弱ったり枯れたりした松の樹皮に産卵する。マツノマダラカミキリが成虫となり羽化脱出する前に、材内にいるマツノザイセンチュウがその体内に入り込み、羽化脱出とともに、新しい松の木に運んでもらう。この協働作業によって松枯れが拡大していくのである。

明科地域での松枯れ

明科地域における松枯れは、合併前の平成一二年度に初



集団で枯れる松林（上押野）（平成26年）



伐倒くん蒸の状況（塩川原）（平成21年）

めて確認された。

発生当時は、被害も少なく徹底した伐倒くん蒸処理により、被害に抑えられていた。しかし、平成一八年度には被害が前年比の約四倍以上に拡がり、安曇野市内の約七割を明科地域が占めるに至った。

この年は明科地域だけではなく、その他の地域でも同様に被害が急増した。媒介昆虫であるマツノマダラカミキリの発生に適した高温少雨の気候に影響されたものと考えられる。

平成二五年度には、安曇野市全体で八八一七立方メートル、被害量は過去最大に達した。

新たな取組「更新伐」

松枯れに対する安曇野市の取り組みは枯れた松をビニールで処理する伐倒くん蒸処理だけではない。平成二五年からは枯れた松を含む、すべての松や広葉樹などを伐採し、自然に種から発芽する実生や切株からの萌芽により広葉樹林に天然更新させる「更新伐」という新たな事業を始めた。平成二九年度までに押野山を中心とした川西地区において約一一四畝の更新伐を行い、今では、緑豊かな里山に再生されている。

更新伐跡地の再生

更新伐は、明科川西の六地区（中村、下押野、小泉、塩川原、荻原、上押野）で行われている。更新伐した後も、自然のまま放置しているわけではない。生育が悪い場所では植林もしなければならぬし、伐採した切株から出る萌芽を間引く「萌芽除去」といった作業もしなければならぬ

い。更新伐を行う地区では、その後の里山を管理するため、実施委員会を設置し、更新伐跡地の再生にも取り組んでいる。そのなかでも荻原地区では、地域の方々が更新伐跡地を歩く「里山歩き」という興味深い取組を行っている。管理するだけではなく、歩いて学ぶことも、里山の再生につながるのである。



更新伐直後の状況（下押野）（平成26年5月）



更新伐後3ヶ月の状況



荻原地区の里山歩き（令和元年）

松枯れの学習

松枯れが明科地域で多く発生していることもあり、明北小学校では、松枯れの環境学習を実施している。あるクラスでは、四学年から六学年までの間、松枯れについて学んだ。松枯れのメカニズムから始まり、カミキリムシの観察や、松枯れ材を再活用したアカゲラ巣箱の製作・設置にも取り組んだ。六年生の時には、松枯れ材を利用して、地域の人と一緒に小学校前のバス停を木質化したり、学校の裏山の「カンダチ山」にウッドデッキを設置したりした。これらは今も利用されている。

里山への関心を高め、地域のまとまりを

松枯れは、私たちが木を使わなくなり、里山へ入ることが少なくなったこと、それにより、里山への関心が薄くなったことが深く関係している。今の時代に合った里山との関わりを考え、行動することが大切であろう。

地域の人々が、地域で起こっている松枯れという問題に向き合うことは非常に有意義である。そして数多くの取り組みを通じて地域のまとまりを強め、また地域を大切に思う気持ちを育てる動きこそが「明科の宝」なのではないかと感じるのである。

（佐藤明利）



バス停の壁板に思いを（明北小）（平成27年）

1 旧石器時代～縄文時代

旧石器時代の明科地域

人類が打製石器を主な利器としていた時代を、考古学では旧石器時代と呼ぶ。旧石器時代の環境は、現在よりも冷涼で乾燥していたと考えられており、日本列島も針葉樹林帯であった。人類の祖先は、遊動する生活の中で広大な距離を移動し、大陸から日本列島に到達したとされる。

現在、日本列島では約一万ヶ所もの旧石器時代の遺跡が確認されているが、安曇野市域では確実な旧石器時代の人類の痕跡は未だ見つからない。松本盆地では、塩尻市の和手遺跡や丘中学校遺跡で旧石器時代の遺跡が発掘されているほか、松本市、大町市でもこの時代の石器を採集した記録がある。中部高地の黒曜石が、安曇野を通じて日本海沿岸へもたらされたか否か、その答えは未だ安曇野の地下に眠っている。

縄文時代の明科地域

現在から約一万五千年前になると、それまで遊動を主としていた人々の生活に変化が起こった。新しい文化要素と

して、土器が出現し食物の煮炊きが可能となった。また、定住生活を送るようになったのもこの時代である。土器が出現してから、水田稲作を経済基盤とする直前までの約一万二千年間を、縄文時代と呼ぶ。

縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六期に区分できる。安曇野市で最も古い人類の痕跡は、縄文早期の遺物である。ほうろく屋敷遺跡（明科南陸郷）では、平成二八年（二〇一六）までに五次の発掘調査を実施した。このうち昭和六三年（一九八八）～平成元年（一九八九）の第一・二次調査で、絡条体圧痕文土器（うろこじょうたいあつせんもんど）という早期の土器が出土している。また、こや城（明科中川手）でも、昭和五二年（一九七七）に発掘調査で早期の土器破片がわずかに出土した。

縄文前期になると、ほうろく屋敷遺跡、上手屋敷遺跡（明科中川手）で集落が営まれた。平成一五年（二〇〇三）に発掘調査を実施した上手屋敷遺跡では、五棟の竪穴住居跡から胎土に繊維を含む前期前葉の土器が出土した。

中部高地で縄文時代の文化が最も成熟するのは、中期とされる。実態として、遺跡数の顕著な増加を確認でき、比例して竪穴住居跡などの遺構数、土器・石器を主体とした



荒井遺跡出土土器

遺物量が共に他の時期を圧倒する。明科地域では、前述のほろろく屋敷遺跡が縄文中期の大集落として著名であるが、この他にも宮前遺跡（明科七貴）、北村遺跡（明科光）、こや城（明科中川手）、塩田若宮遺跡（明科東川手）でこの時期に集落が形成された。

縄文中期に形成された集落のうち、北村遺跡、こや城、塩田若宮遺跡は縄文後期まで存続する。これらの遺跡は、

敷石住居跡や配石という特殊な遺構を有し、後期中葉に姿を消した。

縄文晩期には、東北地方で縄文時代の遺跡数が増加し、装飾的な土器や豊かな精神世界を反映した遺物が多量に出土するようになる。一方で、中部高地では遺跡数が減少し、集落を確認することができなくなる。荒井遺跡（明科七貴）では、この時期の浅鉢形土器一点が出土している。「工」字状のモチーフが重層して横位に展開する文様が特徴のこの土器は、東北地方に広がった^{かめが}亀ヶ岡文化の影響を受け中部高地で成立した浮線文土器の優品である。

遺跡の空白地帯

押野山一帯は、これまでに発掘調査を実施したことがない。中世の押野城をはじめ、平安時代のやしき遺跡など多くの遺跡が山麓に所在し、山中の露頭ではロームも確認できる。また、尾根筋は見晴らしがよく安曇野市の平野部を一望できる。かつて明科地域に暮らした人々が、この場所を手付かずのままにしておくとは考えにくい。

今後、押野山一帯から驚くような発見があるかもしれないし、反対に神聖な土地ゆえ人の手の加えられない聖域であったことが確認できるかもしれない。周辺遺跡の調査の進展と併せて、期待が膨らむ。

（土屋和章）

2 ほうろく屋敷遺跡

ほうろく屋敷遺跡は、犀川・穂高川・高瀬川の三川合流地点から約六㍔北に位置する、縄文時代～近世の複合遺跡である。その規模は、南北約二三〇㍔、東西約三〇〇㍔で、昭和六三年（一九八八）～平成元年（一九八九）の第一、二次調査をはじめとして、平成二八年（二〇一六）までに五次の発掘調査を実施した。これらの調査によって、縄文早期末～後期中葉、晩期末、弥生中期初頭～平安時代、中近世の集落であることが判明している。

また、平成三〇年（二〇一八）九月二七日に、長野県宝「信州の特色ある縄文土器」全一五八点のうち、ほうろく屋敷遺跡出土土器一点が「蛇体把手付ワイングラス形土器」として指定された。

縄文時代集落の発展

ほうろく屋敷遺跡は、安曇野市の北の玄関口ともいえる立地で、有史以来、人・物の交流の要所であったことが想像できる。第一・二次調査での縄文時代の竪穴住居跡をみると、前期一棟、中期六二棟、後期五棟と、中期に集落規模が拡大した。縄文中期の竪穴住居跡は、配石や集石と呼

ばれる縄文時代人が石を配した痕跡の内外で確認されており、集落の中に居住以外の要素が混在していたことがわかる。

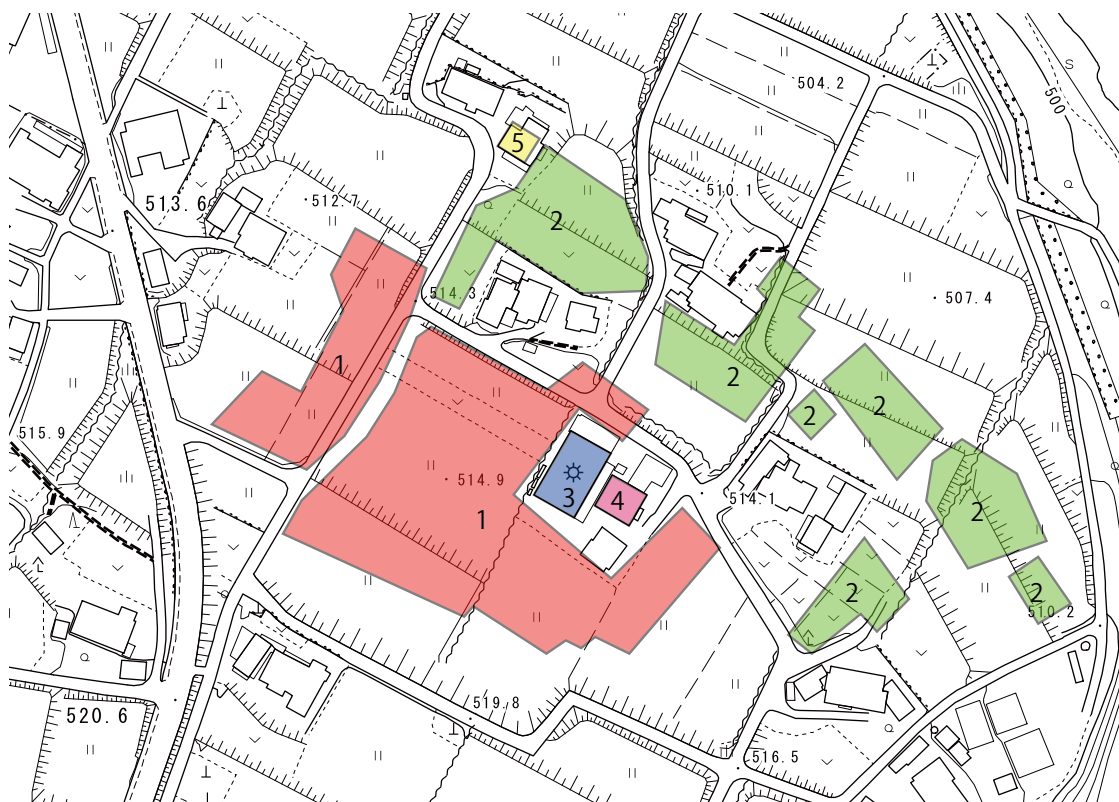
ほうろく屋敷遺跡の縄文時代集落には、他の遺跡には見られない特色がある。その一つは、地元産の縄文土器とともに、東北地方や北陸地方、東北信地域といった遠隔地の土器が出土していることである。縄文土器の模様や形は、時間的・地理的に特色を持って分布する。ほうろく屋敷遺



蛇体把手付ワイングラス形土器



ほうろく屋敷遺跡遠景（北から）



ほうろく屋敷遺跡発掘調査区（数字は調査回数）

跡は、遠隔地の土器を含む多様な土器が出土したことから、人々と物資が行き交うハブ的な機能を持った集落だったことが推測できる。

もう一つの特徴は、石器そのものと石器を作る際に出る割屑が多量に出土していることである。石の種類としては、チャート、黒曜石が多い。第一・二次調査では打製石斧約三〇〇〇点、凹石約二〇〇〇点、石鏃^{せきぞく}約一〇〇〇点、スクレイパー約六〇〇点、磨製石斧約一八〇点、石錐約一五〇点と多量の石器が出土した。発掘担当者は、この様子を「さながら石器の品評会のようにであった」と例えている。

これら二点の特色から、ほうろく屋敷遺跡の縄文時代集落の発展には、遠隔地との交流及び石器製作とその流通が大きく影響しているといえるだろう。

縄文人の精神性

縄文時代集落を発掘すると、日常生活に必要な道具以外に、縄文人の精神性を示す遺物も多く出土する。これらの多くは、私たち現代人の目を引く形をしているものの、何のために作られ、どのように使われたのかは、ほとんどわからない。

ほうろく屋敷遺跡からは、石製遺物として重さ約三〇^{三〇}グラム



大型石棒の出土状況

の石棒をはじめとした大小の石棒、垂飾などの玉類、土製遺物として土偶一二〇点以上（未報告資料含む）、ミニチュア土器、スプーン形土製品、土笛、三角壻形土製品などが出土した。

このうち大型石棒は、土坑に倒れこむように頭部を下にして埋まっていた。基部は土坑上に出て倒立した状態で、土坑の端に立てられていたものが土坑内へ倒れこんだものと推測できる。この石棒が出土した土坑付近には、竪穴住居跡などが存在しないため、この付近は居住空間とは異なった性格の場所だったのだろう。

ほうろく屋敷遺跡出土の土偶を製作年代別にみると、縄文中期一三点、縄文後期五二点（いずれも未報告資料含まず）と、縄文後期のものが多い。土偶は、粘土で形づくられた人形の土製品である。前述のとおり、ほうろく屋敷遺跡では、縄文中期に竪穴住居数が増加して集落規模が拡大する。縄文後期になると集落は縮小するが、墓や土偶などが増加する傾向がある。この傾向から、ほうろく屋敷遺跡の縄文後期土偶は、縄文人の精神性を顕すツールだといえそうである。

（土屋和章）

3 北村遺跡

昭和六二年（一九八七）に長野県埋蔵文化財センターが実施した北村遺跡の発掘調査は、それまでの縄文時代文化研究に一石を投じた。地下深くから、縄文中期後半～後期前半の住居跡五〇件、墓四六九基、そして縄文人の人骨三〇〇体が出土したためである。

敷石住居跡と縄文人の墓

北村遺跡の遺構で目を引くのは、敷石住居跡と墓墳、そして配石である。敷石住居は、縄文中期後半には構築され始め、後期中葉には全てが敷石住居となった。敷石住居とは、住居の床面に平坦面を上にして石を敷いた遺構である。通常の竪穴住居と異なるのは石敷きそのもの、及び石敷きによって主柱穴を欠くため上屋の支えを壁柱に頼らざるを得なくなった点とされる。安曇野市では、北村遺跡以外でも当該期の敷石住居跡を確認しているが、その数は北村遺跡が突出して多い。

北村遺跡で最も一般的な、成人一人を屈葬で埋葬する際の墓墳の平均的な規格は、長径約一〇六センチ、短径約五九センチ、深さ約三二センチである。調査結果からは、北村遺跡



北村遺跡敷石住居跡 (SB01) (長野県立歴史館提供)



北村遺跡出土土偶（長野県立歴史館提供）

では遺体を墓壇に埋葬することが一般的であったと推測でき、その際に個々の墓よりも埋葬するエリアに対して強い規制があったようである。そのために、古い遺体新しい墓壇構築によって損傷を受けた例もあった。やや考えが飛

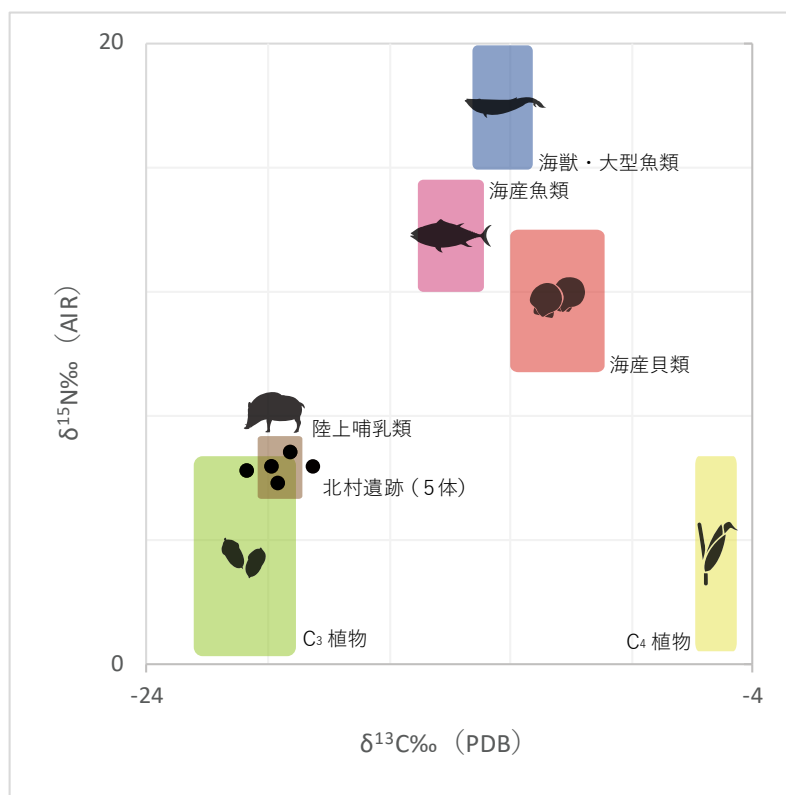
躍するが、北村遺跡の縄文人たちの葬送観念は、遺体に対する物質面での意識よりも、靈魂のような精神面での意識が強かったのかもしれない。

北村遺跡で見つかった縄文人たちの墓には、意外にも副葬品が少ない。墓壇から出土した装身具には、石製・土製玉類、土製耳飾り、牙製腕輪、牙製垂飾、骨製かんざしが見られた。このうち牙製装身具は、腕を伸ばす形で埋葬された男性のみが身に付けていたと報告されている。

出土人骨が語ること

北村遺跡の縄文人は、一体何を食べていたのだろうか。この疑問に迫る研究法の一つが、同位体食性分析という方法である。人体を構成するたんぱく質には、その人が摂取した食物の特徴が元素レベルで記録されている。なかでも骨は、組織の置換速度が緩やかなため死亡前一〇年間ほどの食生活を平均的に記録していることになる。この骨のたんぱく質（コラーゲン）に含まれる炭素（C）と窒素（N）に着目し、北村遺跡の縄文人の食生活の特徴が明らかになった。食物に含まれる¹³Cと¹⁵Nの比率は、その動植物の生息環境などによって違いがあることがわかっている。例えば、植物は光合成の違いによって二グループに大別できる。私たちの身近にある樹木や麦、米などはC₃植物と呼

ばれ、比較的 ^{13}C の含有量が少ない。ドングリなども C_3 植物である。これに対し、 ^{13}C を多く含む C_4 植物と呼ばれるグループがある。これらの植物は乾燥した日当たりのよい場所に適応しており、 C_3 植物とは光合成の代謝が異なる。トウモロコシ、アワ、ヒエ、キビなどが C_4 植物に該当する。



C・N 同位体比 (報告書を参考に作成)

また、海生生物は炭素と窒素の両方で重たい同位体が比較的多い特徴がある。

北村遺跡の縄文人骨では、五体から炭素・窒素同位体比の測定値を得ている。この結果、彼らの食性は C_3 植物の分布域に近い位置にまよって分布する。調査報告書では、この同位体比分布と C_3 植物、 C_4 植物、草食獣、海獣・大型魚類、海産魚類、海産貝類の六種類の食物群の分布の検討から、北村遺跡の縄文人にとって最も寄与率の高い食物は C_3 植物であって、たんばく質の約七〇パーセントをドングリなどの C_3 植物から摂取したというモデルが得られた。

遺跡に残った人骨や歯からは、彼らが生前に経験したケガや病気の痕跡が記録されることもある。例えば、歯の表面を覆うエナメル質には、成長期の栄養障害などにより溝が刻まれることがある。北村遺跡でも、このエナメル質減形成が見られる人骨がある。その他、歯からは虫歯や歯槽膿漏を患ったことも読み取れる。北村遺跡出土人骨で、六七人分九一七本の歯を調査したところ、一〇〇人当たりの虫歯を持つている人の割合は七・五人、一人当たりの虫歯本数は一〇・一本という結果が得られている。平成二八年歯科疾患実態調査で、現代人では、三六九六人のうち虫歯を持っている人は三一九二人、一〇〇人当たりの割合では八六・四人、一人当たりの虫歯本数は一〇・二本となっており、北村遺跡の縄文人に虫歯が少ないことよりも、現代人

に虫歯が多いことに驚かされる。

北村遺跡を考える

北村遺跡の遺構数の変遷を見ると、住居数は縄文前期一〇棟、中期二二棟、後期一四棟、不明一二棟と推移する。対照的に、墓は前期二七基、中期五二基、後期七〇基、不明三二〇基であり、住居数から推計する居住人口に比較して墓の数が多し。このことは、北村遺跡以外の集落の人々が北村遺跡に埋葬された可能性を示唆している。

犀川右岸における、敷石住居や配石が構築された同時期の遺跡には、ほうろく屋敷遺跡（明科南陸郷）、塩田若宮遺跡（明科東川手）、こや城遺跡（明科中川手）、井刈遺跡（松本市）がある。これらの遺跡間で土偶保有の多寡、石棒などの精神性を示す遺物の有無、配石遺構や敷石住居跡などの分布を比較することで、北村遺跡を軸としてつながる縄文文化のネットワークが見えてくるのではないだろうか。

（土屋和章）



北村遺跡遠景（西から）

弥生時代～古墳時代

弥生時代の明科地域

狩猟採集を主な生業とした縄文文化は、現在から約三〇〇〇年前に高度な水田稲作技術を基盤とした弥生文化へと移行する。安曇野市では、これまでに弥生時代の水田遺構は見つかっていないが、弥生時代当初から弥生文化の影響は強く受けている。弥生文化が、朝鮮半島からの影響で成立した日本独自の文化であることは現在の共通認識といえ、日本列島の各地で多様な弥生文化の諸相が見られることも近年明らかになってきた。弥生時代開始期には、中部高地では未だに縄文文化の伝統が息づいており、文化要素が複合的に関連しあう独自の弥生文化が成立した。

弥生前期には、ほうろく屋敷遺跡で再葬墓が作られた。この詳細は、後述する。縄文晩期には東日本的な亀ヶ岡文化の西辺であった明科地域も、弥生時代になると東海地方の条痕文土器文化の影響を強く受ける。しかし、現在までにこの時代の集落跡は見つかっていない。松本盆地で竪穴住居跡が構成する集落を確認できるのは、弥生中期前半になってからであり、縄文晩期～弥生前期の人々がどこに住んでいたのかは、大きな謎である。



ほうろく屋敷遺跡C群3号再葬墓



潮神明宮前遺跡出土ガラス小玉
(弥生時代後期)

みどりヶ丘遺跡(明科七貴)では、昭和四〇年(一九六五)に県営住宅建設に伴う造成工事に際し、豊科高校の教職員と生徒が主体となって緊急発掘調査を実施している。この調査では、弥生時代前半の土器・石器が数多く出土し、それまで不明だったこの時代の様子が明らかになった。中部高地では、弥生中期後半に栗林遺跡(中野市)を標式とする栗林式土器を持つ集団が一大文化圏を形成するが、その前段階の著名遺跡が明科地域に所在するのである。

平成二八年(二〇一六)に、安曇野市教育委員会が実施した潮神明宮前遺跡の第三次発掘調査では、潮地区で初の弥生時代集落跡を確認した。約二〇〇平方メートルの調査区で三棟の弥生後期の住居跡を確認したが、特筆すべきはそのう

ちの一棟からガラス小玉が二点出土したことである。中信地域で弥生時代のガラス製品は大変希少であり、これまで安曇野市では出土例がない。このため、科学的な成分分析を実施し、この二点のガラス小玉が弥生時代のものである可能性が極めて高いという結果を得た。透明な水色で直径五ミリ程度のこれらのビーズは、インドパシフィックビーズと呼ばれ、二〇〇〇年ほど前にインドまたはインドシナ半島で製作され、西日本を玄関口として北海道から沖縄まで広がったと考えられている。たった五ミリのガラス玉だが、弥生時代の明科地域が世界と結び付いていた大事な証拠なのである。

弥生再葬墓

ほうろく屋敷遺跡第一・二次では、弥生時代初頭の再葬墓と呼ばれる墓域を確認した。再葬墓は、いったん土葬や風葬を行った遺体から遺骨を取り出し再び埋葬する葬法で、弥生時代初頭の東日本では、大型の壺に人骨を集めて土壌に埋納する事例が多くみられる。

ほうろく屋敷遺跡の再葬墓では、四群一六基から二五個体の大型壺と四個体の小型土器が出土した。壺の文様を観察すると、東海地方の影響を受けた条痕文と呼ばれる筋状の痕跡が見られるものや、東北地方の影響を受けた太い沈

線と磨消縄文で文様を構成するものが混在している。C群3号墓を含むいくつかの再葬墓では、条痕文系土器、磨消縄文系土器など他地域の土器を一つの土壇にまとめて埋納している。被葬者が生前、どのような関係の人々だったのか想像すると、興味が尽きない。

再葬墓は、一般的に副葬品がほとんどない。しかし、A群3号墓では壺内に三片の黒曜石剥片が並べられていた。さらに、C群2号墓、C群9号墓からも土壇内から黒曜石剥片が出土した。再葬墓への副葬品は剥片が圧倒的に多く、他に玉類、石鏃があるが、いずれも少量であることが多い。

再葬墓を造営した集団の集落は見つかっておらず、縄文時代から弥生時代へと移行する時期に彼らが何を紐帯としてまとまり、何を生業としていたかは謎である。しかし、ほろろく屋敷で見つかった再葬墓が、安曇野の弥生時代の曙光であることは間違いない。

古墳時代前・中期の明科地域

長峰山の山頂へのぼる長峰林道登り口付近、能念寺山西側山腹には能念寺古墳があった。昭和三十六年（一九六二）に、直刀二振が出土したが、それ以外に遺構・遺物は認められなかったそうである。このため『明科町史』では、石

室などを持たず棺をそのまま埋葬した木棺直葬の可能性を考慮しており、能念寺古墳が明科地域を見渡す尾根上に所在することと併せて、六世紀前半頃の築造と考えている。この場所は現在、携帯電話基地局の敷地となっており、古墳が存在した手掛かりはない。

平成六年（一九九四）～七年（一九九五）の上生野遺跡発掘調査では、古墳前期の竪穴住居跡二棟と同時期の掘立柱建物跡二棟が見つかった。古墳前期の土器は、この時までに龍門淵遺跡から出土していたが、集落は未確認であった。上生野遺跡2号住居址からは、在地の土師器に伴って東海地方にルーツをもつ土師器が出土している。弘法山古墳（松本市）や出川西遺跡（松本市）など、東海地方の影響を強く受けた松本盆地の古墳時代初頭文化が、犀川沿いに明科地域にも波及していたことが確認できた例である。なお、古墳前期の集落跡は、平成一〇年（一九九八）の発掘調査で、潮神明宮前遺跡でも確認している。

古墳中期になると、明確な集落は確認できなくなる。現時点で、明科地域で最も可能性が高いのは栄町遺跡・古殿屋敷の一带であろう。後述のとおり、弥生時代から古墳時代にかけての土器や炭化材・炭化米が出土しており、今後の調査で集落跡の詳細が明らかになるだろう。

古殿屋敷出土の炭化米

栄町遺跡の北隣にある古殿屋敷では、これまでに二次の発掘調査を行っている。平成二十三年（二〇一一）の第一次調査では、平安時代の木棺墓と瑞花^{ずいか}双鳥^{そうちょう}八稜鏡^{はちりょうきやう}を含む副葬品が出土して話題になった。

平成二十六年（二〇一四）の第二次調査地は、第一次の西側敷地である。一辺三^{さい}の雨水浸透施設三箇所という小規模な調査のため、遺構は捉えにくかったが、敷地中央のC区から古墳時代の焼失住居跡が見つかり、炭化材及び炭化米が大量に出土した。樹種同定の結果、炭化材はコナラ属コナラ節の樹木で、コナラやカシワの可能性がある。垂木などの建築部材として、用いたのであろう。炭化米で放射性炭素年代測定を実施したところ、較正年代で西暦二五二―三八一年（九五・四^{ぱい}）の年代値を得た。また、炭化米の顕微鏡観察では、種実そのもの以外に、粃殻や粃の付け根にあたる小穂軸を多く確認でき、この炭化米が粃の状態で住居内に保管されていた可能性が高いこともわかった。

（土屋和章）



古殿屋敷出土炭化米

5 潮古墳群と栄町遺跡

明科地域における古墳後期という時代は、潮古墳群（明科東川手）の築造と明科廃寺（明科中川手）の創建という二つの大事業を理解するうえで重要な意味を持つ。潮古墳群は、現在の潮神明宮付近に所在し、現在までに八基の古墳を確認している。また、この時代の集落として潮古墳群から会田川をはさんで南西約五〇〇㍎の栄町遺跡（明科中川手）で発掘調査を実施している。

安曇野市唯一の方墳

潮古墳群を含む潮神明宮前遺跡では、これまでに三次にわたる発掘調査を実施した。このうち平成一〇年（二九九八）の第一次調査では、潮古墳群6・7号墳の二基を発掘している。これら二基が所在したのは、安曇野市明科総合福祉センター「あいきりす」の建物の場所である。このうち6号墳は、墳丘の残存状況はあまり良くなかったものの、南北一五㍎、東西一二㍎の隅丸方形を呈する安曇野市唯一の方墳で、幅二〇四㍎の周溝（しゅうこう）を確認した。この方墳は横穴式石室を持ち、石室床面には礫（れき）を敷き詰めており、玄室幅一・六㍎、玄室長五・五㍎、羨道幅二・五㍎、羨道長



潮古墳群遠景（南東から）



潮古墳群6号墳（上が東）



潮古墳群6号墳周溝出土鏡

四畝という規模である。石室内からの出土遺物はわずかであったが、周溝からは七世紀中頃及び七世紀末～八世紀初頭の二時期にわたる遺物が出土した。特筆すべきは、この周溝から銅鏡が出土したことである。残念ながら保存状態はそれほど良好ではなく、口縁部付近が四分の三周ほど残っているだけであった。全体の形状は判然としないが、



潮古墳群 8 号墳出土須恵器

口径約一五釐と推計できる。銅鏡は仏具として捉えられるため、明科廃寺との関係で重要なだけでなく、下賜品としての性格もあることから被葬者と当時の政権との関係も示す遺物であるといえる。

安曇野市における古墳後期の古墳群が円墳のみで構成される中、潮古墳群 6 号墳が方墳である意義は大きい。七世紀後半は明科廃寺が創建された時期であり、明科地域では従来の古墳祭祀と最新の仏教祭祀が併存していたことがわかる。

潮古墳群 8 号墳の発掘

平成一七年（二〇〇五）には、町道拡幅に際して潮古墳群 8 号墳が地中から発見され、発掘調査を実施した。道路拡幅部分の狭小な調査のため古墳の全容は未確認であるが、石室床面に礫が敷き詰められ、幅一・三メートルの玄室及び幅一・一メートルの羨道を確認した。また、石室内からはメノウ製勾玉二点、金環一点、水晶製切子玉一点、鉄製品のほか、石室内土壌からいずれも濃紺の丸玉二点、白玉六点、ガラス小玉一〇四点が出土している。周溝からは、七世紀末の須恵器が出土しており、潮古墳群 6 号墳と同時期の古墳であることがわかる。



栄町遺跡（現在の明科支所）遺構検出状況（南から）

栄町遺跡の古墳時代集落

栄町遺跡では、これまでに四次にわたる発掘調査を実施しており、古墳後期の集落跡を確認している。安曇野市明科支所建設などに際して実施した平成二三年（二〇一一）の第三次調査、翌年の第四次調査では、合計九二〇平方メートルの調査面積から一七棟の竪穴住居跡を確認した。栄町遺跡の竪穴住居跡は、土中での保存状態が良好であったのに加え、奈良時代以降の遺構が存在しないため後世に破壊されることがなかった。明治・大正時代の構造物が、古墳時代集落跡に若干の影響を与えていたものの、古墳時代の竪穴住居跡がほとんどお互いに重なり合っていないことは、大きな驚きである。発掘調査で遺構を検出すると、たいてい複数の時代の遺構が重複して見つかる。この場合、新しい時代の遺構が古い遺構の一部または全部を壊して構築される。しかし、栄町遺跡ではこの重複が見られなかったのである。上の写真では、黄褐色の土壌の中に暗い褐色の四角形がいくつも見える。これが竪穴住居跡である。調査で採取した炭化物九点で放射性炭素年代測定を実施したところ、竪穴住居跡の継続期間が六世紀後半～七世紀前半であることもわかってきた。この時代は、明科廃寺創建の直前にあたる。栄町遺跡を明科廃寺創建にかかわる古墳時代最終末の集落と捉えるのは、早計だろうか。（土屋和章）

6 奈良・平安時代

律令国家の時代

古墳時代から続いてきた栄町遺跡の村は、奈良時代にはいってなくなってしまう。代わって七世紀末にできあがっ

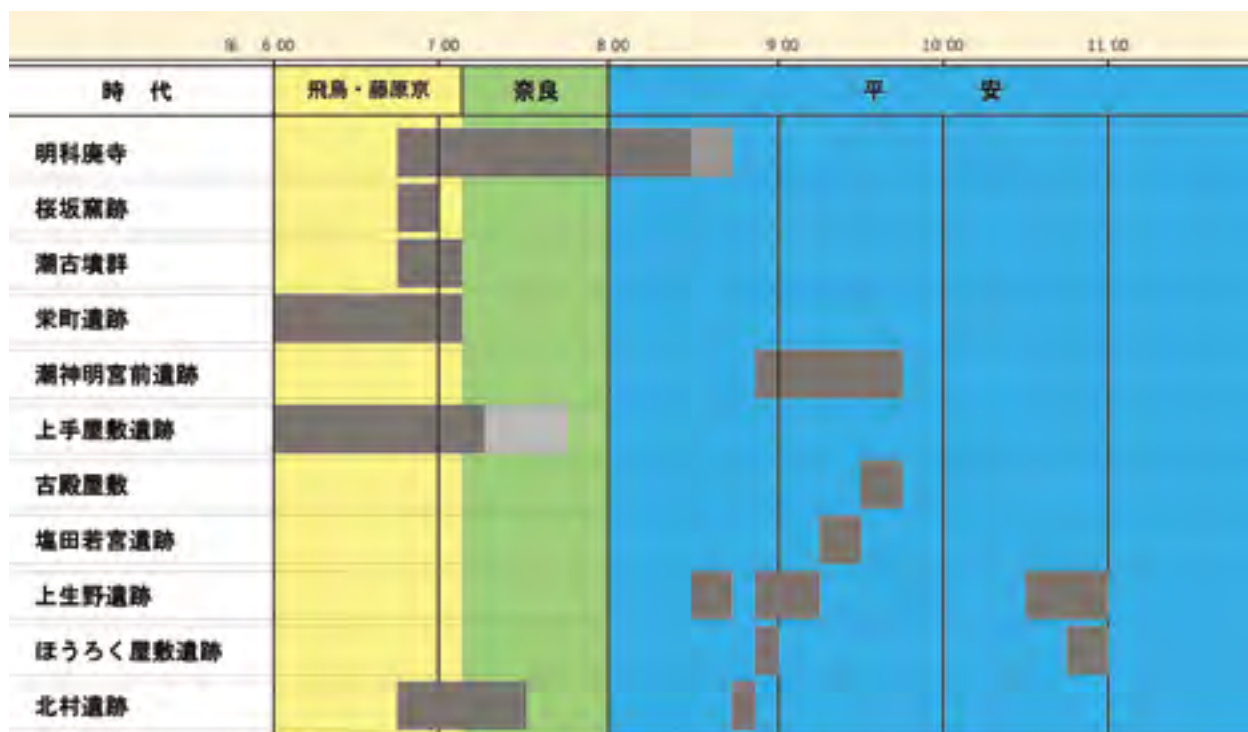
た北村遺跡の村には、二棟の倉庫を持つ塀に囲まれた庇持（ひもち）ちの掘立柱建物を中心とした館がつくられる。このほか、規模の大きな上手屋敷遺跡にも掘立柱建物が建てられる。律令国家の行政の末端、郡の役所の機能を持っていた可能性がある。しかし、これらの村は継続せずになくなってしまう。

新たな時代

平安時代中頃、九世紀後半から一〇世紀代になって、村がなかった場所に新たに村がつくられるようになる。比較的山に近い塩田若宮遺跡、上生野遺跡、ほうろく屋敷遺跡などである。さらに村が一度なくなった北村遺跡や、古墳がつくられていた潮神明宮前遺跡にも村がつくられる。これらの開発を進めたのは、律令国家の体制に組み込まれた人々でなかったのだ



発掘調査が行われた遺跡



潮神明宮前遺跡のカマドの土器

中世へ

あろう。古殿屋敷遺跡木棺墓の被葬者をみると、都と結びついた、あるいは都からやってきた有力者と考えられる。しかし、これらの開発も、継続する力がなかったか、自然環境の変化からか、長続きしない。

再び一一世紀後半からいくつかの場所に再び村がつくられるようになる。ただ、それらが中世には続かない。中世の村がどのように成立していくか明らかにするのは、これからの課題である。

(原明芳)

7 明科廃寺

出土した素弁八葉蓮華文瓦から七世紀後半代の創建とされ、信濃国でも最も古い寺院の一つある。昭和二八年（一九五三年）に住宅建設に伴って軒丸瓦や多量の布目瓦、翌年の調査による礫敷や瓦・瓦塔などの発見により、寺院跡と推定され「明科廃寺」と呼ばれることになった。その際に地籍図や小字から寺域が推定され、その後の調査で瓦が発見された。特に平成三〇年（二〇一八）の調査では整



明科廃寺の位置



調査範囲

出土した瓦

多量の瓦は、創建時のものではない。傷んだ屋根の瓦を何回か補修するため、さまざまな種類の瓦がみられる。屋根全体を平瓦と丸瓦で葺き、軒を軒丸瓦と軒平瓦で飾る。

理箱二五〇箱以上になったが建物跡は発見されていない。

軒丸瓦は、型で押し
た文様がつけられ、明
科廃寺は、子葉が表現
されない花卉（素弁）
を用いた蓮華文で、花
弁が八枚の素弁八葉
蓮華文と、一二枚の素
弁十二葉蓮華文に大
きく分けられる。八枚
の軒丸瓦は岐阜県の
寿楽寺廃寺と同じ型
で作られ、山梨県天狗
沢窯からも同じ型で



2018年度調査

作られた瓦が出土した。工人の移動を含めその歴史的背景についていくつかの仮説が出されている。

どんな伽藍？

大量の瓦が発見された場合、最も出土量の多い瓦が屋根

全体を葺くため、創建時に使われた瓦とされる。二種類の軒丸瓦のほぼ同数の出土は、金堂や講堂、塔、鐘楼などの瓦葺き建物が一度に整備されたのではないことを示している。建物は、隅平瓦の存在から寄棟、入母屋、宝形造のいずれかで、少なくともその一つに鴟尾しびがのついていた。軒平瓦は数が少なく、すべての建物に葺かれなかった可能性もある。発見された掘立柱建物

は瓦葺きの主要建物の周辺にあった僧侶の住まいだったのか。素敵な瓦から、塔が聳え立つ壮大な伽藍の姿を想像するのも楽しいものである。

瓦はどこから

犀川をはさんだ塩川原の桜坂窯跡から、窯は発見されなかったが、二ヶ所の灰原が調査された。製品は運び出され、焼成が悪かったり変形した不良品や破損品が残り、出土した。丸瓦・平瓦が圧倒的に多く瓦を中心に生産する窯と考えられるが、須

恵器のさまざまな製品も焼かれている。瓦の中に、明科廃寺と同じ素弁八葉蓮華文、素弁十二葉蓮華文の軒丸瓦が存在する。桜坂の窯から明科廃寺に瓦が供給されたことはまちがいない。

一緒に生産された須恵器の食器は七世紀第4四半期で、さらに役所で使う円面硯えんめんけんも生産されている。

寺を支えた村

明科廃寺から北へ二〇〇メートル離れた明科支所一帯に、同じ時代の柴町遺跡が広がり、寺院建立に大きな役割を果たした豪族が住んでいたと考えられる。かれらの墓域は会田川を挟んだ北側、潮神明宮の西側に造られ（潮古墳群）、上手屋敷遺跡（明南小学校）や北村遺跡では、館跡？が発見された。周辺に寺院を建立したり、経営を維持する、かなりの有力な豪族が出現したことを示している。

明科廃寺の時代

六八六年、壬申の乱で勝利した天武天皇は、律令制を導入し中央主権国家体制の確立を目指し、仏教に国家の災いを鎮める思想的な役割を与え、全国に寺院造営を奨励する。信濃国でも各地に寺院が建立された。華麗な伽藍、瓦



2018年度調査



2018年度調査



素弁八葉蓮華文軒丸瓦



素弁十二葉蓮華文軒丸瓦

葺きの建物、そこに置かれた荘厳な仏像や仏具は、人々を驚かせたにちがいない。まさに新しい時代の象徴でもあった。しかし寺の造営と経営は莫大な費用のほか、新しい建築技術、さらに寺院を運営するソフトが必要である。豪族は、寺院建立の詔を契機に、あるいはそれ以前から都と結びつきを持っていた。明科廃寺は新しい時代を安曇郡の人々に視覚的に示す象徴だったのであろう。

(原明芳)

8 古殿屋敷遺跡の有力者の墓

発見された木棺墓

明科支所の東側の水路工事に先だった発掘調査で、平安時代、一〇世紀の木棺墓が発見された。ほぼ南北方向を軸に幅一・六メートル、長さ二・三メートルの平面長方形が掘り込まれる。中の三ヶ所に枕木状に木を置き、その上に東に寄せて木棺が据えられ、遺体が納められ、八稜鏡が置かれている。木棺の外には、葬送の儀式に使われた食器が入れられている。

このように遺体を木棺に収める埋葬法は、都の貴族と同じである。さらに、八稜鏡を納め、食器の中に緑釉陶器があることは、都と結びついた、あるいは都からやってきた有力者の墓である可能性を示す。

墓に埋められた有力者

それでは、有力者はどこに住んでいたのでしょうか。同じ時代の生活の跡は、周辺では発見されていない。律令国家の象徴であった明科廃寺はすでに寺ではなくなってしまっている。ただ会田川を挟んで北側に、潮古墳群が



発掘された墓



一緒に納められた食器

あつたが、墓が造られる二〇〇年ほど前に古墳は造られなくなってしまふ。木棺墓と同じ時代は、堅穴住居跡が数多く発見され、豪族の墓地と関係なく集落がつくられていた。そこを経営した有力者こそが木棺墓に葬られた人物であつた。きっと、新たな中世の世界をつくっていく人物だったのでらう。

(原明芳)



八稜鏡 (瑞花双鳥八稜鏡)

1 莊園の時代、中世

中央の貴族や有力な神社の莊園に

深い山林に囲まれた泉福寺。平安時代、この辺りに「大穴庄」という莊園が置かれていた。莊園とは中央の貴族や有力な神社などが各地に持っていた広大な私有地のことである。鎌倉時代の書物『吾妻鏡』には、「大穴庄」とともに「前見庄」も見られ、平安末期には京の朝廷に仕えていた貴族の莊園として成立していたことが知られる。ともに正確な範圍はわからないものの、泉福寺を中心とする大穴山の東西、現在の明科南陸郷と、七貴の一部から池田町域までの範圍に大穴庄、池田町中鵜や明科七貴押野など押野山周辺に前見庄が広がっていたと考えられる。

また犀川右岸の明科東川手は、麻績御厨の一部であったといわれている。御厨は伊勢神宮の莊園のことで、現在の麻績村一帯にあった。鎌倉時代、麻績御厨から神宮には鮭と筋子が献上されている。このことから犀川東岸の東川手地域まで麻績御厨の範圍が及んでいたと考えられている。戦国時代に、麻績神明宮の神主である宮下氏が「牛尾之宮」（潮神明宮）を管理していたことから、潮の地に麻績御厨の勢力が及んでいた足跡を垣間見ることができる。



麻績神明宮(麻績村)



潮神明宮

莊園の衰退と戦国時代の明科

鎌倉幕府を開いた源頼朝は、地方で台頭してきた武士たちを各地の地頭に任じ、莊園や、国府の領地である国衙領の年貢徴収を請負わせた。これ以降、地元にいる彼らは次第に莊園に対する権限を強めていく一方で、本来の領主であった貴族や寺社の力が次第に弱まっていった。

地域の武士たちが力をつけてきた戦国時代、莊園はほとんど実体をなさなくなっていた。そこで伊勢神宮は、かつての御厨やその周辺に住む人々を檀那（檀家）として組み入れ、個別に金品や土地を寄進してもらうことで収益を得るようになった。

戦国時代の天正九年（一五八一）、伊勢内宮の御師（神官）であった宇治七郎右衛門尉久家は信州各地の檀那を廻り、御祓大麻という御符と、茶や熨斗あわびなどの土産物を配った。久家が記した檀那の手控え『しなのゝ国道者之御祓くはり日記』によれば、会田を出発して光や明科、生野をまわり、麻績方面から善光寺へ、さらに仁科地方を南下して堀金まで行き、最後は押野そして塩川原に至るコースをたどっているようだ。檀那には会田氏や麻績の青柳氏、仁科氏の一族などの有力武士も多いが、神職や商工業者など様々な身分の人々が見られる。

明科地域では、塔原城主の海野三河守やその家臣の塔

原氏が登場する。また会田川を挟んで所領を持っていた
関氏と考えられる「久保しま」や、「田沢神助」「うしほ
神主」などの神職もみえる。さらに「しほ川原三郎左衛
門」「おし（押野）の、新左衛門」「たけ（竹）そうの内ぬいさへもん」

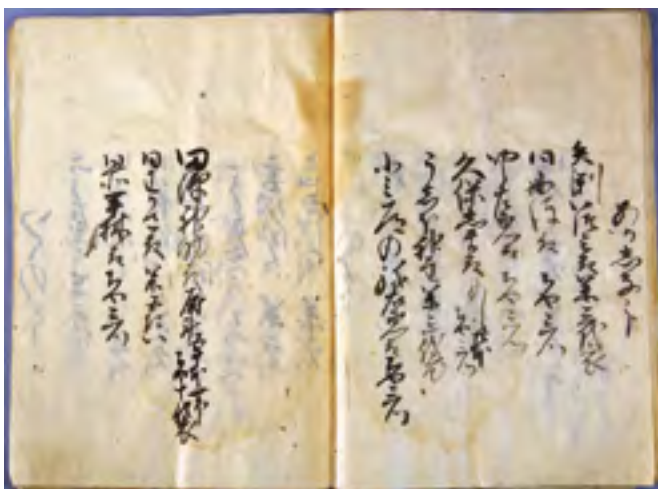
「たけ（竹）はなの忠衛門」「けみ（花見）の宮内助」「はな（山）れやま勘左衛
門」「くろつほ（黒坪）の神右衛門」「大くほの二郎さへもん」など
集落の有力者やその一族もみられ、特に潮沢川周辺に住ん
でいたと思われる人名が多い。もとより山がちで水田の少



『しなのゝ国道者の御祓くばり日記』
(松本城管理事務所蔵)



右から二行目に「海野三河守」の名がみえる。



右端に「あかしな分」とあり、明科の人々の名前が書かれている。



『三宮穂高社御造宮定日記』
「大穴所役 萩原」の文字がみえる。



「前見保」の文字がみえる。

ない地域だが、何らかの山の恵みを得て、神社に貢献できるほどの経済力をつけていた人々の姿がうかがえる。

当時、大穴庄や前見庄も実体は失われていた。莊園という広域でのまとまりの中にあったそれぞれの集落は郷村として自立性を強め、やがて江戸時代の村へとつながっていく。

ただ、室町時代後期の文明一五年（一四七八）に書かれた穂高神社の古文書には、「大穴所役 萩原」あるいは「前見保」など、莊園のころの名残と思われる地名もみえる。かつて莊園であったという記憶が、当時の人々の意識の中に残っているようで興味深い。

（逸見大悟）

2 明科地域の二大勢力・海野氏と日岐氏

東信からやって来た海野氏一族

戦国時代に塔原城主となる塔原氏の先祖は、東信からやって来たと伝えられる。平安時代に小県郡を領していた滋野氏しげのからは祢津・望月・海野氏の三氏が分かれた。鎌倉時代に起こった承久の乱のち、海野氏には幕府から犀川東岸地域が領地として与えられたという。海野小太郎は惣領として本領の小県に残り、兄弟たちに新たな領地を治めさせた。彼ら五人は支配した地名を名字に冠し、「会田の次郎」「塔原三郎」「田沢の四郎」「借屋原（別名）五郎」「光の六郎」と名乗ったという。

大塔合戦と海野氏

室町時代の応永七年（一四〇〇）、大塔合戦おおとうかつせんが起こった。信濃守護として着任した小笠原長秀と、国衆と呼ばれる信州各地の在地領主たちとの争いである。国衆たちは「国一揆」と称して横に連携し、現在の長野市篠ノ井付近で小笠原勢と戦い、大塔の古要害に追い詰めて攻め破った。

この戦いには海野氏一族も一揆勢として参加した。『大



塔原城遠景（吐中集落から）



海野三河守の居館跡と伝わる上手屋敷遺跡

塔物語』によれば、惣領の「海野宮内少輔幸義」とともに「会田岩下・大葦・飛賀留・田沢・塔原」などの諸氏が出陣している。

岩下氏も海野氏から分かれた氏族だが、先の会田の次郎の子孫と思われる一族に代わって会田を領し、このころには会田氏を名乗っていた。大葦は、明科の大足に住した武士、「飛賀留」は光氏のことと考えられる。明科地方に進出した海野氏の一族も、小県の惣領家とのつながりを保っていたことがうかがえる。

武田氏の侵攻と海野氏

戦国時代に入ると、松本平は甲州の戦国大名・武田晴信（のちの信玄）の侵攻を受けた。

天文二〇年（一五五一）には現在の松本市島内にあった平瀬城が攻め落とされた。さらに翌年には小岩嶽城が落城し、五〇〇人も首が討ち取られたと語り継がれている。

天文二二年（一五五三）には、武田勢によって苅屋原城が攻め落とされ、城主が捕らえられた。さらに会田が放火されるに及んで、塔原城は「自落」し、城主の塔原氏は逃亡した。安曇平の諸城が落とされても動じなかった塔原城も、会田や苅屋原の城が攻撃されたのを見て動揺したようだ。旧四賀村域や海野氏一族の武士たちとのつながりが深

かったことがうかがえる。

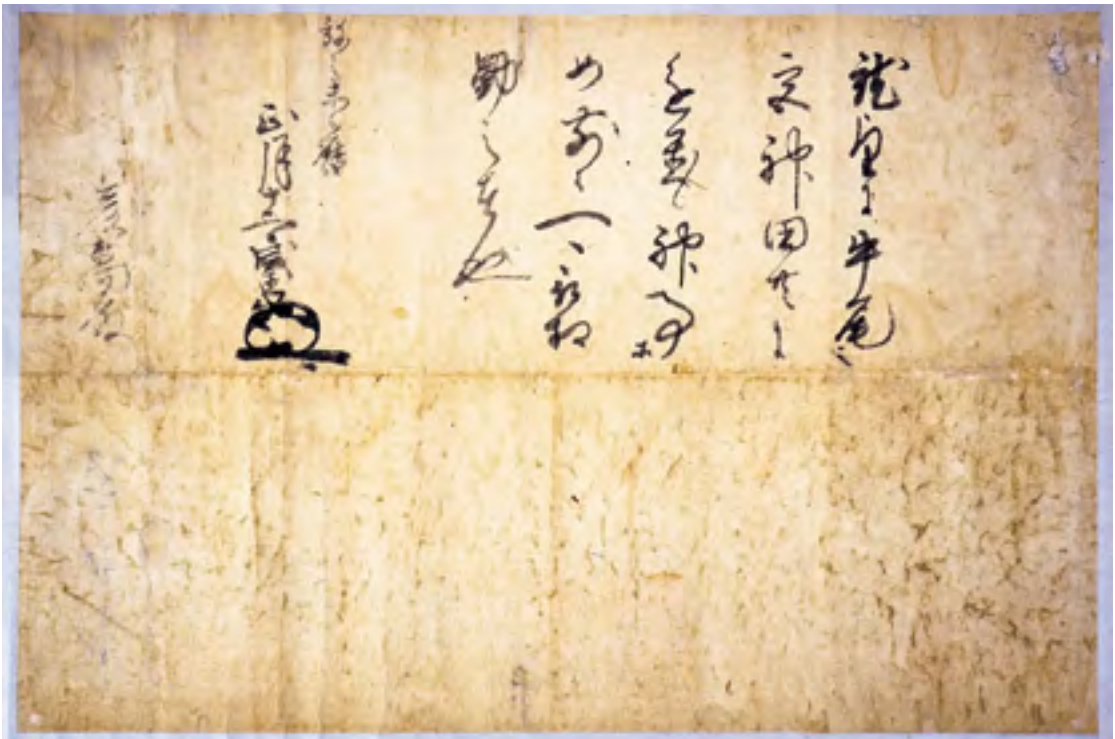
のちに武田氏は小県から海野三河守幸貞という人物を迎えて塔原城主とした。その配下には、かつて塔原城主であった塔原氏の一族もいた。

「日岐六郷」を治めた仁科一族・日岐氏

海野氏の一族が光・中川手一帯を治めていた戦国時代、明科地域の北部は日岐氏の勢力下にあった。その出自は仁科氏であったが、現在の生坂村に土着していた豪族・丸山氏との婚姻関係を結んで移り住み、領地である日岐を名字として名乗ったという。

やがて日岐氏は犀川沿岸部で勢力を拡張、「日岐六郷」という広範囲を支配するようになった。日岐六郷は日岐・上生坂・下生坂・小立野・下生野そして明科の上生野を指す。戦国時代末期の天正十一年（一五八三）には、当主の日岐織部佐盛直が「牛尾之宮」（現在の潮神明宮）とその神田を麻績神明宮の神主の宮下氏に寄進していることから、潮付近にまで支配が及んでいたことが読み取れる。また犀川西岸の陸郷、七貴の一部までその勢力下にあったとも考えられている。

武田氏の時代の古文書には、日岐盛次という人物がみえる。堀金平太夫盛広、渋田見源介政長、古厩平三盛隆、穂



日岐盛直神田寄進状（潮神明宮蔵）



日岐盛直の山城とされる日岐大城（生坂村）

高左京亮盛棟たかさきやうのすけもりむねらとともに仁科氏の親類として惣領の仁科盛政を支えていた。その後、仁科惣領家は信玄の五男が跡を継ぎ、仁科五郎盛信と名乗ったが、仁科一族としての彼らのつながりは変わらなかったものと思われる。

（逸見大悟）

3 戦場となった明科と大小の山城群

「天正壬午の乱」と戦場になった明科

天正一〇年（一五八二）、信州の戦国時代も終盤を迎える。この年三月、織田信長の軍勢が信州に侵攻し、武田勝頼が滅ぼされると、安曇・筑摩両郡は織田氏に属した木曾氏の支配下に置かれた。ところが六月には本能寺の変が起こり、わずか三ヶ月で織田氏の支配は瓦解する。信州は再び近隣の大名たちからの侵略を受けることになった。越後の上杉景勝、関東の北条氏直、三河の徳川家康、彼らによる三つ巴の争いは、天正一〇年壬午の年に因^{ちな}んで「天正壬午の乱」と呼ばれている。この乱は同年一〇月の徳川・北条両氏の和解によって終結するも、各地の領主たちの間では依然として戦乱が続くのである。

松本平では、武田氏に領地を追われていた信濃守護・小笠原長時の三男の貞慶が深志城に戻り、松本城と改称した。ここから安曇筑摩両郡を平定する戦いが始まる。南は木曾谷へ軍勢を差し向け、北は筑北地方へ兵を進めて上杉氏に味方する諸氏を攻撃した。

特に潮沢は周辺の領主たちの勢力が接する境目となっている。東には会田の岩下氏、北には日岐氏がいて上杉氏に



塔原城の主郭



塔原城背後の堀切

属し、貞慶の前に立ちはだかった。

特に日岐氏は、塔原方面に攻め入って小笠原方の海野氏らを悩ませ、日岐城や日岐大城に立て籠って抵抗した。小笠原氏の家臣・犬甘半左衛門久知らの働きにより、日岐城は天正一〇年九月に落城した。城主の日岐丹波守盛武は一旦上杉氏のもとに逃れるも、翌年八月に小笠原氏に服属す

る。日岐大城では盛武の兄の織部佐盛直が籠城したが、天正一〇年か翌一年の九月に落城したと考えられている。

一方、小笠原方として日岐氏と戦った塔原城主・海野氏にも、上杉氏から誘降の手が伸びたようだ。天正一一年二月一三日夜、小岩嶽城主・古厩因幡守盛勝が松本城に呼び出されて殺害された。海野三河守も古厩氏とともに上杉

氏へ内通したとされ、塔原城に討手が差し向けられて攻め滅ぼされてしまった。小笠原氏のもとに入った報告によれば、塔原城には兵糧が一粒も残されていなかったが、古厩氏の城には際限なく積み重ねられていたという。

小笠原貞慶は外敵に対して果敢に戦いを挑む一方で、家臣や身内の裏切りも容赦しなかった。小笠原氏は近世の松本藩へと続く基礎固めを行ったが、その黎明期には多くの血が流されたことを、わずかなばかりの史料が今に伝えている。

大きな山城と小さな山城

信州の戦国の争乱は、天正壬午の乱のころが最も苛烈であつたと考えられている。各地に点在する山城もこのころに大きな改修が加えられたと思われる。

当時、山城は戦時に逃げ込んだり、籠城戦を展開したりするため、城主は麓の館に住んでいた。このうち、塔原氏や海野氏の拠点であつた塔原城は、明科地域では最大の山城である。長峰山の支峰には南北約六五[㊦]東西約二〇[㊦]に及ぶ広い主郭が築かれている。ここから大手の登り口と思われる麓の吐中集落までの間に、多くの平場が階段状に築かれている。戦時にはここに兵を配して備えたものだろう。また主郭の背後には深さ一〇[㊦]以上もある堀が切られている。安曇平には背後に大きな堀切を掘り、尾根道を寸断した山城が多くみられる。主郭より高い位置から逆落としに遭う危険を回避したものだろう。

塔原城のひとつ西の峰は、能念寺山と呼ばれる。山の上は広い三角形の平場となっており、かつて雲龍寺の前身となる能念寺があつたと伝えられている。塔原城のある峰は、西の犀川方面から見ると、能念寺山に隠れて見渡すことができない。さらに寺という宗教施設によつて精神的にも守ってもらえるという利点もあつたのではないだろうか。塔原城はこの能念寺山も防御施設のひとつに含んでい



潮沢川北方、岩洲公園の入口付近にある高松薬師城（横谷城）。
巨大な岩壁がそびえている。



潮沢川南方にある佐々野城。写真は、
厩があったと伝わる「まやくぼ」と呼ばれる広い窪地

たと思われる。

一方、犀川西岸の七貴や南陸郷にも小規模な山城があった。これらは村々の有力者、あるいは村全体で持っていた城であろうか。

特異なのは潮沢地域である。潮沢川を挟んで南北の山の尾根に、伝承地も含めて多数の小さな山城が点在している。『明科町史』では、潮沢川北岸を日岐氏の物見とし、

東方にある城は
筑北の青柳氏の
城かと推定して
いる。当時は、北
は日岐へ、東は青
柳、会田へ抜けら
れる道があった。
小笠原氏が日岐
城を攻める際も、
潮沢南岸の赤岩
山付近を通過して
軍勢を派遣して
おり、潮沢は軍事
上の要衝であつ
たと考えられる。

（逸見大悟）



小笠原勢が日岐城攻めの際に通った赤岩山
（松本市五常・五輪平から撮影）

4 近世の明科、残る村絵図

地図と絵図

現在、地図は生活に欠かすことのできない必需品となっている。携帯電話の普及により、簡単に自分の位置情報を確認することができるようになった。しかし、こうした測量を伴う地図が普及したのは、明治時代に入ってからである。それ以前は、測量を伴わない絵図が一般的であった。絵図は目的に応じて作成された。隣地との境を表した地引絵図、用水や入会地に関する争いを解決するために作成された論所絵図などの局所的なものから、城下町全体を把握した城下町絵図、街道沿いの様子を書き記した分間延絵図など、広範囲を確認できるものもある。その中で、江戸時代には日本全体の様子を把握するために作成されたのが国絵図である。江戸幕府は慶長・寛永・正保・元禄・天保の五度、国絵図の作成を行っている。国絵図は、幕府が各藩に命じて国ごとの下図を提出させて作成した。藩は割り振られた下図を作成するために、領内の村ごと村絵図の作成を命じた。明科地域では、元禄国絵図のために作成された村絵図が、麻績組の組手代を務めていた関家の文書群に残っている。

村絵図の作成

組手代関家の文書には、村絵図のほかにこの時作成された組内全体を一枚の絵図に納めた『麻績会田彦枚御絵図』や、村内の状況を記した「神社仏閣道法書上帳」も残っている。また、絵図作成の様子は、『元禄十一年 万覚書帳』に書かれている。絵図の作成は、元禄十一年（一六九八）正月から五月にかけて行われた。正月一三日、松本藩から絵図などの作成を命じられた組手代は、組中の村役人を集めて、調査内容の説明を行った。その後、村役人衆が協力し、村々の一里塚や道法の確認を行っている。絵図の書き手は、組中に描ける者がいなかったため、松本城下の絵師源兵衛に依頼している。源兵衛は正月二八日から村々を回り村ごとの下絵図を描いている。村絵図には、道・川（水路含む）・家屋（寺社含む）・山林・原野の図像が描かれ、耕地の様子や字名・施設名・方角が記入されている。図像は色分けされており、道を赤、川を青、家屋を黄色、樹木を緑で彩色している。村絵図の完成後、組中全体の絵図の作成が行われた。二月から四月のうちに藩役人による絵図の確認が行われ、描画された図像の修正が行われた。五月

には再び源兵衛によって組中の絵図が三枚作成され、一枚を郡奉行へ、一枚を代官へ、一枚を組手代が保管した。

明科村・潮村絵図

筑摩郡明科村と潮村は一枚の絵図に描かれている。絵図には両村の村役人が連印している。絵図には南北に通行する「大道」が描かれている。これは現在の国道一九号線とは異なり、より犀川に近い西側を通っていた。道沿いには龍門寺や観音堂、高札場（御札場）があったことがわかる。現在の龍門湖公園には龍宮渚が描かれ、堂舎があったことが分かる。潮村の御札場は大道よりも東側にあったことがわかる。大道と集落の間には水田のほか、土手が描かれており、犀川の河岸段丘上に集落があることが表現されている。絵図の東端には佐々野城が描かれており、そこが会田組北山村との境であったことがわかる。



元禄十一年 明科村・潮村絵図
(大庄屋関氏文書・安曇野市文書館寄託)

塔ノ原村絵図

筑摩郡塔ノ原村絵図には、城山として塔ノ原城や、古城として塔原氏の屋敷跡が描かれている。村中には中世以来の小字が多く書かれている。村中には南北を縦断する道添いに、現在にも残る雲龍寺・法音寺・給然寺・犀宮神社などの寺社をはじめ、多くの家屋が描かれ、中心地となる「町」には御札場があった。犀川添いには八面大王を祀る御堂が描かれており、八面大王が元禄年間（一六八八―一七〇四）には信仰の対象として認知されていたことがわかる。絵図の東側には山林が大きく描かれ、塔ノ原村が集落地のほかにも山林を管理していたことがわかる。



元禄十一年 塔ノ原村絵図
(大庄屋関氏文書・安曇野市文書館寄託)

大足村絵図

筑摩郡大足村は慶安元年（一六四八）に塔ノ原村から分村して成立した。村内には平・吐中・清水の三集落がある。本村（平）には、高札場である御札場や、毘沙門堂・子安明神などの寺社があり、家屋周辺の土地が畑地や水田に開発されている様子がわかる。吐中には権現堂があり、会田川から登る道も描かれている。清水には白山権現や光久寺のほか、御竹藪があったことがわかる。隣村との村境も描かれており、北西を明科村・潮村と、南東を井苅村と接していたことがわかる。

（青木弥保）



元禄十一年 大足村絵図
（大庄屋関氏文書・安曇野市文書館寄託）

5 大足村を歩く

江戸時代にタイムスリップ

絵図から往古を探る

江戸時代の村絵図から当時の様子を探ることはできないのだろうか。国絵図の作成時には、報告書として「神社仏閣道法書上帳」も作成された。組手代関家の文書には『麻績組大足村神社仏閣道法色々書上帳』（以下『書上帳』）のほか一〇ヶ村の文書がある。また、もう一つの手がかりとして明治初年に作成された田畑の面積・位置等、土地利用の様子や区画・所有者等を記した『大足村地引絵図』（以下『地引図』、安曇野市文書館所蔵旧明科町公文書）も残っている。

安曇野市豊科郷土博物館友の会では、絵図を片手に村の中央、絵図に本村と記される現在の平地区に、江戸時代の大足村を探しに出かけた。

昔の道は？

道は、絵図に中央にクランク状に太く朱書きされる。描き方から、これがこの村を通る主要道路で、安曇方面から明科を通り会田川に沿って東へ進み、会田町で善光寺道と



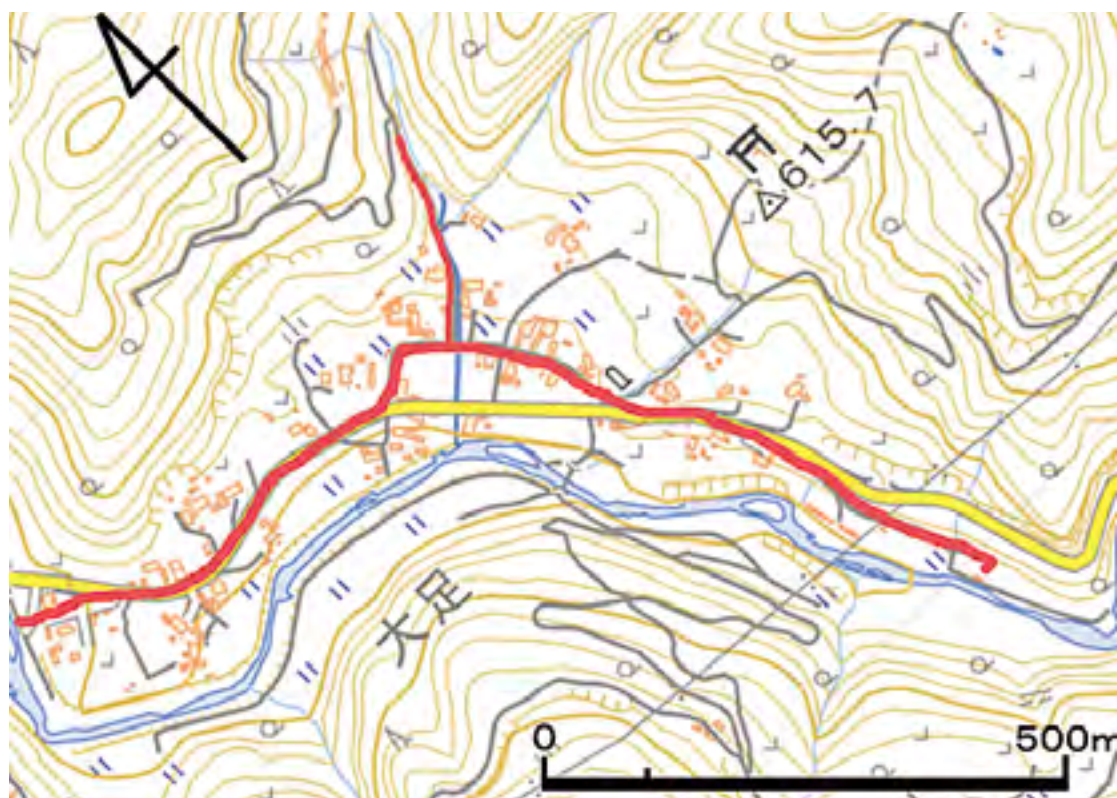
大足村絵地図（部分）



大足村地引図（部分 明治初期）

合流する。安曇野から長野や松本、そして上田方面に向かう重要な道であった。この朱書きの道は、歩くと狭い。バイパスができたおかげか、そのまま残っている。道沿いに立てられた馬の供養のための馬頭観世音石像は、江戸時代を彷彿させる。

絵図には、本村の中央を流れる中沢に架かる橋が描かれ、朱書きの道が通っている。橋の規模は『書上帳』に、長さ三間、幅一間（二尺弱）とある。道幅もそのくらいだったのか。橋の西側には高札場が描かれる。「捨馬高札」、飼い主が病気にかかった馬を遺棄することを禁止する高札が



大足村（朱書きは村絵図の道と一致部分）（国土地理院地形図に加筆）

立っていた。『地引図』の同じ位置に、高札場の略図が書かれている。

移動した毘沙門堂

高札場の斜め向かい、毘沙門堂が描かれている。『書上帳』には建物規模は四間四面とある。現在は畑になっていて建物は無い。中沢沿いに道を上っていくと、『地引図』に描かれている場所に毘沙門堂を発見。すでに江戸時代の終わりには移転していたようである。地元の方に頼んで内部を見学させていただく。堂の奥に段を設け、鎌倉時代作といわれる毘沙門立像が安置されている。江戸時代には、本村地区の信仰の拠点であったのであろう。

神様がいっぱいいた江戸時代

絵地図に神様が数多く描かれている。それを探して歩く。『書上帳』の大明神は、本村の祠の中で一番大きく横三尺一寸、長さ四尺三寸と記される。その位置は、現在の諏訪神社である。大明神は大足村全体の祭典を営んだ諏訪大明神の略のようである。急な坂を上るが、ここをお船が上ると聞いて驚く。神社に着いて、鳥居越しに北アルプスを眺めると、長峰丘陵の背後に常念岳、有明山が眺められ



毘沙門立像
(毘沙門堂本尊 市指定文化財)

る絶景である。

大明神のほか、山の神、子安明神、しゃぐじ（社宮司）など横一尺一寸、長さ一尺五寸程度の祠が三カ所に描かれ、『書上帳』にも記されている。子安明神は矢のとうへの上り口に描かれるが、見つけることはできない。山の神も見つからないが、後で毘沙門堂の東に移されていることがわかる。しゃぐ神だけは、絵図の場所に、現在も大切にお祀りされていた。

地区の外れで、元禄一五壬午六月四日銘お釈迦様（小さな石の堂）を確認する。村絵図の四年後に建てられたことがわかり驚く。三〇〇年前を数多く発見できた、大足村の一日であった。

（原明芳）



しゃぐ神



お釈迦様（元禄15年銘）



諏訪神社から北アルプスを眺む

龍門淵公園

犀川の流れを鎮め、雨乞いを祈った祠

描かれた「龍宮渚」

元禄一一年（一六九八）に描かれた明科村・潮村絵図の、川手道から犀川に向かって下っていった場所に、L字状の池と大きな岩が描かれ、「龍宮渚」と注記されている。その表現は、寺や神社などと比較して一回り大きく描かれ、明科村の中で重要な場所であったことがわかる。元禄の書上帳には横二尺に長さ三尺の南向きの社殿をもつ龍宮神が祀られ、慶安検地では「龍宮神免」として社領をもっていた。

「龍宮神」は、古くから犀川の流れを鎮め、日照りの際の雨乞いをする神様であった。雨乞いの際は、長光寺、雲龍寺、光久寺、法音寺、龍門寺の僧を頼んで二夜三日の祈祷が行われている。松本藩主水野氏の崇



明科村絵図に描かれた龍宮渚



カヌーゴールと龍宮渚

敬も篤く、殿様が巡回の折には必ず参拝した。
天保三年（一八三二）に犀川通船が始まると、船頭たちは無事を祈願したという。

龍門淵公園

犀川の分流前川は、大きな岩に勢いよくぶつかりL字状に流れを変える、その大きな岩の上に、東を向いた龍神宮の社殿がある。まさにその大きな岩こそ、絵地図に描かれた岩である。水が勢いよく龍が通り抜けた龍が潜んでいるような神秘的な形状で、龍門渚とも呼ばれる。

前川をはさんで西側に、あやめ公園と龍門淵公園が整備されている。初夏恒例のあやめ祭りのころは、長野県下随一という七〇種五万株の多種多様なハナシヨウブが咲きそろい、背景の残雪の北アルプスとの美しいコントラストを見せ、県内外から多くの観光客が訪れます。現在、前川は有名なカヌーコースとなっており、全国から多くの愛好者が集っている。かつては、岩が犀川の本流をさえぎり、大渦を巻く難所であった「龍宮渚」は、カヌーコースのゴールとなっている。

（原明芳）

7 明科の寺院

多くの文化財を伝える

元禄十一年（一六九八）の国絵図作成時の調査で、明科地区内に合計一〇の寺院があった。七つの寺院は、江戸時代以前から続いていた。宗派は、真言宗が五寺、浄土宗が二寺、禅宗が三寺だが、宗派が途中で変わったり、場所も移

動した寺院もある。松本藩領であった犀川以西（安曇郡）は、明治初年の廃仏毀釈により、ほとんどのお寺がなくなった。犀川以东（筑摩郡）は幕府領であったため寺院がそのまま残っている。



宗林寺 山門（市指定文化財）



給然寺 紙本観経曼陀羅（市指定文化財）



雲竜寺 山門（市指定文化財）



明科地区の寺院と寺院跡

江戸時代の寺院は、住職をはじめとして僧侶によって葬式や法事、祈祷などの仏事が行われていた。それに加え現在の市役所の戸籍係の仕事もしていた。幕府は、キリシタンでないことを証明するため、人々を檀家として寺に登録

させ、寺院は家ごとの家族構成を記した宗門人別改帳するのも重要な仕事であった。

寺院がない小さな集落には、観音堂、阿弥陀堂、薬師堂、地藏堂などの堂があった。江戸時代のその数は六〇を

超え、特に潮沢村と山中村には多い。堂には、常に僧侶がいないことが多く、地域の人々が信仰の集まりをもったり、寄り合いをする場所であった。

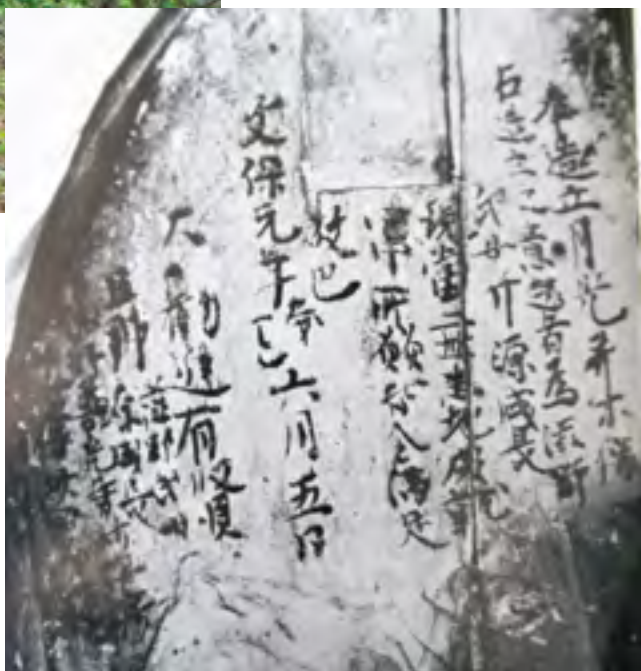
お寺やお堂は、信仰の拠点である立派な建物が建てられ、その中心に安置された仏像も古い時代の優れた文化財が多く伝えられている。ここでは、光久寺、泉福寺、長久寺を紹介する。
(原明芳)

清水山光久寺

創建は鎌倉時代

仏像の体内に書かれた墨書

光久寺は、長峰丘陵の北端、犀川に注ぐ会田川の西岸の清水地区にある。本堂に安置されていた木造日光・月光両菩薩立像の文保元年（一三二七）の胎内墨書銘により、創建は鎌倉時代以前であることがわかる。寺伝によると、光久寺は大同二年（八〇二）に高野山遍照光院の末寺として創建されたといわれる。ただ地滑り等で現在地に移ったと



胎内墨書銘

もいわれている。現在は、真言宗高野山金剛峰寺の末寺で、住職がいらないため、地域の人々によって守られている。

元禄一一年の「神社仏閣道



薬師堂（県宝）

法書上帳」には、薬師如来座像を本尊とする本堂と庫裡と、別に「薬師」を本尊とする薬師堂があることがわかる。同年の「大足村絵図」には、光久寺と薬師堂が別々に描かれている。本来は、別々の信仰空間であった可能性もある。

本堂の位置は現在の駐車場部分に描かれる。

薬師堂（県宝）

棟札から、元禄三年（一六九〇）に、松本藩主水野忠直を大檀那とし、大足村の滝沢九郎兵衛尉が発願主となつて、大町村の大工棟梁曾根原安右衛門によって、造立される。内陣に置かれた厨子の扉には「再興」「慶安三年」（一六五〇年）の墨書があり、それ以前にも薬師堂があった。



大足村絵図 (1698) に描かれた光久寺と薬師堂



外部に描かれた百人一首



内部に描かれた天女

東向きで、梁行三間、桁行五間、寄棟造妻入りで、現在は瓦葺であるが、村絵図にあるように以前は茅葺であった。縁先に柱を立て軒先を支える外観は、室町時代後期に建立された盛蓮寺観音堂（大町市、重要文化財）・松尾寺薬師堂（安曇野市、重要文化財）と共通する。大町村の大工が見慣れた堂を模範とした可能性が指摘されている。

極彩色の空間

堂の構造は簡素で、建築彫刻が少なく、絵画の題材が様々である点は、他の仏堂にみられない特徴である。色は落ちていたが、内部・外部には彩色・彩画があり、銘によって堂の建設時のものであることが明らかである。外部は、全面に百人一首と歌人が描かれる。内部は、全面に百人一首と歌人が描かれる。内部の外陣には、天女や黒駒が描かれるほか、平家物語の「源頼政の鶴退治」などを主題とした題材が描かれる。内陣には桐、鳳凰、蓮などが描かれる。現在、私たちが目にしているのは落ち着いた建物だが、建立当時は極彩色の落ち着かない建物であったようだ。



日光菩薩像（県宝）



月光菩薩像（県宝）

善光寺妙海作 日光・月光両菩薩像

像は、ヒノキ材で、高さは八八センチほどである。本来は本来薬師如来の脇侍として、薬師三尊の形で安置される。中央の薬師如来像は理由はわからないが、後世



光久寺

の作に代わっている。『明科町史』の編纂に際し、肩を外したところ墨書が発見された。その内容から、この像は、住職有賢が計画し、滋野氏の女性と夫源盛長が費用を負担して、三四才の仏師善光寺妙海房が、文保元年（一一三七）、鎌倉時代の終わりに制作されたのがわかる。安曇野市内で制作年代がわかる仏像の中で、最古である。

善光寺妙海の銘がある仏像は、辰野町に十一面観音像一体あるほかは、旧筑摩郡に日光・月光菩薩三組、金剛力士像一組が残っている。この像は制作年がわかる中でも、最も若いときの制作である。

（原明芳）

9 泉福寺

武田信玄ゆかりの寺

長い歴史

山号は大穴山、高野山真言宗金剛峯寺末である。犀川と安曇野の間に南北に続く丘陵の一つのピークが大穴山（八五五^{メートル}）、寺は、標高七〇〇^{メートル}のその山中に存在する。江戸時代の『信府統記』には、「高野山偏照光院の末寺で池田組寺村にあり、開基の年代は不明」とある。寺伝では、寿永二年（一一八三）に木曾義仲の持仏の薬師如来を本尊

に開山されたともいわれる。このあたり一帯に存在した中世大穴庄と関連が深い寺院と考えられる。泉福寺には元龜元年（一五七〇）の武田信玄の禁制が伝わっている。武田家の家中の者が寺域内で殺生をすることや竹木を伐採すること、門徒中の寺家に狼藉をすること、徳役や普請役を賦課することを禁じている。江戸時代は、専光寺（中村）、高松寺（小泉）、法洞寺（池田町）、林泉寺（池田町）、照明寺（生坂村）を末寺とする、大きなお寺であった。



山崩れと火災 そして復興

かつての泉福寺は、本堂、金堂、山門など多くの建物が山中に林立した七堂伽藍を備えていた。しかし、宝暦七年（一七五七）の山崩れと天明四年（一七八四）の火災によって、伽藍は



泉福寺本堂（市指定文化財）

焼失してしまい、その後復興が行われた。文化五年（一八〇八）に再建の薬師堂の正面上のひさしには立川和四郎による優れた彫刻が施されている。寄棟造の方七間の本堂は文化七年（一八一〇）に再建された。しかし明治維新の廃仏毀釈によって、照明寺を除く末寺とともに一時廃寺となってしまう。明治一三年（一八八〇）に檀家の力によって復興した。

仁王像（長野県宝）

仁王門には、二層に近い長野県宝の運慶様式の阿形・吽形の仁王像がある。両像ともに、ヒノキ材の寄木造で、欠損部分も多い。墨書銘から永正一〇年（一五二三）に修理がなされており、それ以前の造立だとわかる。山崩れ、火災の災害をくぐり抜けた、真言宗の大寺であったことを示す仏像である。

（原明芳）



仁王像（木像金剛力士像 県宝）



薬師堂（市指定文化財）



武田信玄禁制札（市指定文化財）

10 長光寺

お薬師さまの崇敬厚い密教寺院

山頂から移って

『信府統記』には、「医王山長光寺、高野山龍光院の末寺なり。麻績与（組）光村にあり、当時の開基年代知れず」とある。伝承によると、最初は背後の長光寺山の頂上に建立され、薬師堂門寺であったという。その後、兵火にあつて荒廃した寺を、現在地に天正一〇年（一五八二）に再興したと伝えられる。『元禄一年神社仏閣道法書上帳』には、建物は不動明王像を本尊とする本堂と庫裡、薬師如来座像を安置する薬師堂と山門があったと記されている。現在本堂は解体され、薬師堂のみが残っている。

薬師如来座像は、室町時代作といわれる。檀家を持たない寺であったが、「長光寺のお薬師さま」として、ご開帳は六〇年に一度であったが、霊験あらたかな仏様として近隣の人々の信仰を集めていた。

薬師堂及び宮殿（長野県宝）

薬師如来座像（像高四二寸、一木造り、檜材）を納める宮殿の墨書から次のような経緯がわかる。古い薬師堂が壊



薬師堂（県宝）



薬師如来座像

れてしまったため、承応二年（一六五三）に新たに薬師堂を建立した。貞享元年（一六八四）に薬師如来座像を修理しその際に安置する宮殿を造り堂内に置いた。元禄一六年（一七〇三）に現薬師堂が建立され、正徳三年（一七二三）に宮殿の組物が三手先に改められた。

現薬師堂は、梁間三間、桁行三間寄棟造、茅葺で妻入の

仏堂である。全くの新築ではなく、向拝新設や小屋組改築をともなう大規模改修であったと推定され、内部に中世にさかのぼる部材も残している。

安曇地方の江戸中期の大作の作風や技術・技量を知る上で、貴重な建物である。

（原明芳）

1 篠ノ井線と明科駅

篠ノ井線開通

明治政府は、東京から直江津まで、首都と日本海を結ぶ信越本線を多くの難工事の末、明治二六年（一八九三）に開通させる。続いて三年後には東海地方と結ぶため、塩尻を目標して篠ノ井線が着工し、明治三三年（一九〇〇）には西条駅（筑北村）まで開通した。西条―明科間は、岩を削って深い谷を埋めたり、大小五つのトンネルを掘削する難工事のほか、山中のため資材の運搬にも軽便鉄道を敷くなど苦勞も多く、多くの犠牲者も出した。西条―塩尻間は明治三五年（一九〇二）六月に開通した。

明科駅開業

明科駅（当時の明科停車場）は、川手道の東側、当時水田が広がる中に開業し、現在までその場所は動かない。駅ができると、商売のために多くの人々が移転してきた。そのなかでも運送業者が駅前に目立った。貨物は、魚、塩、米などが下ろされ、煙草、まゆ、薪炭などが積まれていった。降ろされた物資は、犀川筋へは通船や荷車で運ばれ、



篠ノ井線西条―明科間淀ヶ沢地区の工事



鉄道建設に携わって亡くなった作業員の慰霊碑（龍門寺境内）

その中継点となる木戸は交通と政治の要衝として栄えた。安曇方面へは新たにできあがった犀川橋を渡って運ばれた。発送貨物は『長野県統計書』（一九一〇年）によると、米や雑穀が県内第三位、石炭及びコークスや木材が第二位。長野県の中でも有数の取扱量の駅であった。



第二白坂トンネル開通の記念写真



篠ノ井線鉄道路線略図（「篠の井線鉄道旅行案内」明治35年（1902））

明科駅前の発展

明科駅前が旅客貨物の集積地として賑わうようになると、駅を中心に計画的に新道があげられ新しい町づくりが始まった。それまでの水田だったところがあつという間に開け、川手道沿いの本町方面に代わって、駅前（栄町、県町）が大きく発展した。駅前が旅客貨物の集積地として賑わうようになると、郵便局や銀行の支店などの金融機関も進出してくる。明治四三年（一九一〇）には料理屋一二軒、芸妓屋七軒が置かれる。明科駅前は犀川筋・筑北地方の地域経済の中心的な役割を果たすことになる。ただ、明治三九年（一九〇六）五月一二日の夕方四時ころ、本町で火災が発生し、折からの強



明科駅前に運び込まれた藁（大正11年（1922））

風と茅葺き屋根のため、四八棟を焼失してしまう。このような火災を克服して発展を続ける。

明科国営製材所

明科製材所は国有林の材木を製材するために、明治四二年（一九〇九）に農商務省長野大林区署直轄官営工場として事業を開始した。工場は現在の明科支所付近にあり、職工八〇人、工場外の作業員二〇〇人ほどの規模であった。波田や小倉、さらに高瀬川上流の国有林で伐採した原木を筏に組んで流し、現在の水産試験場の南端あたりにあった貯木場で犀川から揚げ、そこからトロッコで製材所まで運び、用材にして明科駅から送り出した。しかし、大正二年（一九一三）五月二四日の火事によって建物のほか、「構内に山のごとく積んだ三万尺ほどの木材」も焼失してしまう。その後国営製材所は廃止となり民間の製材所が引き継いだ。大正一〇年（一九二一）に、ここに女工が三〇〇人を超す組合製糸三栄社が創業をした。

現在の明科駅

乗降者数は、昭和四〇年頃（一日平均五〇〇〇人を超える）をピークに減り続け、平成三〇年には二〇〇〇人をわ



現在の明科駅

ずかに超える数に留まっている。平成二八年（二〇一六）から無人化した、明科地域の人口減少や、自動車の利用の増加が原因と考えられる。現在も特急の一部が停車し、近年は新幹線長野駅を経由した安曇野観光の拠点駅となっている。

篠ノ井線廃線敷

昭和六三年（一九八八）、西条―明科間に、第一、第二、第三白坂トンネルがあり、ほぼ直線に結ぶ新線が完成し

た。明治三十三年（一九〇二）の開通から輸送を担ってきた路線は廃線となる。現在は、第二白坂トンネル南口から明科駅までが遊歩道として開放され、レンガ造りのトンネルやスイッチバック式の潮信号所跡が残っており、篠ノ井線の歴史を感じることができる。廃線敷きの斜面の鉄道林としての役割をはたした「けやき」の林は、地元が「けやきの森公園・マレットゴルフ場」として整備し、夏は森林浴を、秋には紅葉を楽しむことができる。また、廃線敷きから遠く眺める常念岳はひと味違い、安曇野の隠れた散策スポットになっている。

（原明芳）



鉄道の廃線跡



三五山トンネル



案内板

2 明科と大逆事件

事件のはじまり

明治四十二年（一九〇九）六月一三日の昼下がり、一人の男が国鉄明科駅に降り立った。男の名は「宮下太吉」。秋の開業を目指し建設中の国営明科製材所の機械据付のために、愛知県亀崎鉄工所から赴任したのである。近代の日本ばかりか世界を震撼させた事件の始まりである。

明科で発覚した大逆事件

宮下太吉は明治八年（一八七五）九月三〇日、山梨県甲府市で生まれ、一六歳で故郷を出て、機械工の見習いとして東京・大阪・神戸・

名古屋の大工場を渡り歩くうちに、腕の良い機械工となっていた。

亀崎鉄工所に入っ
たのは明治三五年
（一九〇二）頃で、そ
こで『平民新聞』など



宮下太吉



国営明科製材所

を読んで、社会主義に目覚め、社会主義の活動を行っていた。明科赴任の旅の途中、太吉は平民社に幸徳秋水と菅野スガを訪ね、爆裂弾による天皇暗殺の決意をスガとの間で固めている。この時に、新村忠雄、古河力作ふるかわりきさくも同志となったことから、大逆事件の発端となった明科事件のメンバーが固まった。新村はこの後頻繁に往来し連絡を取り合うことになるが、古河とはついに一度も顔を合わせることはなかった。

明科へ着いた太吉は一日から臨時工として働き始めるが、既に警察からは社会主義者として監視対象となっており、明科駐在所の小野寺藤彦巡査が張り付き、常に行動や郵便物の往來をチェックしている。太吉は一月までの五ヶ月間に三回の転居をしているが、特に一〇月初めから一月上旬までの一ヶ月は、二階に太吉が、一階に小野寺巡査が住むという極めて異常な暮らしをしている。その時に本人はもとより、太吉と同居していた姉を使って社会主義を



なつな沢



宮下太吉が寄宿していた建物（昭和50年代撮影）

やめるよう工作したり、スパイまがいのことをさせたりしている。だがこの時期に巡査に気づかれることなく爆裂弾を製造、会田川べりの崖で（「なつな沢」崖やもつと明科寄りの「継子落し」説もあり、場所は特定されていないし、実況見分もされていない。また実験の日も一月三日天長節の松本の花火に合わせたという説と一月二〇日の明科の恵比寿講の花火に合わせたなどの言い伝えもありはつき

りしない)で実験をしたのである。

宮下の周囲には幾重にもスパイ網が張り巡らされており、これらスパイの情報で爆裂弾製造を察知した警察は、明治四三年(一九一〇)五月二五日、宮下太吉を逮捕、同志である新村忠雄、管野スガ、古川力作も同時に逮捕された。当初はこの四人だけの事件であったが、六月には幸徳秋水も逮捕し、日露戦争反対を機に高揚した社会主義運動の撲滅をねらって全国の主義者数百名を検挙した。これが大逆事件で、この事件により、「明科」の名は一躍全国に知れわたった。

謎につつまれた裁判

主な検挙者は皆大逆罪に問われたため、大審院(現在の最高裁に当たる)で非公開裁判となり、一人の証人調べもなく、一二月一〇日に始まった裁判は暮れの二九日には結審し、翌年一月一八日に判決という異例なものであった。

起訴された二六名は全員有罪で、幸徳秋水など二四名が死刑と決まった。翌日一二名は刑一等を減じられて無期懲役となった。判決から一週間を待たず一月二四日に幸徳ら一名が、翌二五日に管野スガの処刑が行われた。

この異常な裁判は、元老山縣有朋の命を受けた大審院検事平沼騏一郎があらかじめこの裁判のストーリーを描きす

すめたことが、後日平沼の回顧録であきらかになっている。

この裁判に対しては、国内の文学者森鷗外、徳富蘆花、石川啄木、永井荷風らが作品講演などを通して、またイギリス、フランス、アメリカ、オランダなど諸外国から抗議が殺到した。日本はこの事件を契機に言論の自由が狭められ、ファシショ化への道を急速に歩むことになった。

検証されるべき大逆事件

明科に端を発し、やがては日本の運命を左右する事件にまで発展した大逆事件は、事件から一一〇年が経過し、事件の舞台となった建物や風景も姿を大きく変え、ともすれば忘れ去られようとしている。しかし、この事件は、日本近代史を語る上で、歴史の大きな転換点となった事件である。にも係らず、事件の核心である爆裂弾事件に関する実況見分も行われず、実験の場所、日時さえ特定されていない。この事件を契機に社会主義や労働組合の運動は『冬の時代』を迎え、やがて物言えぬ時代となり、あの戦争への道をまっしぐらに歩むこととなった。

事件発覚の地である明科で、この地でいったい何が起きたのかを明らかにし、この事件を風化させないためにありのままの歴史をふりかえり、同じ悲劇を繰り返さないために後世に伝えていきたいものである。

(大澤慶哲)



かれなくなり、その重要性が低下する。続く天保国絵図でははつきりしなくなる。日本海から太平洋への物流が糸魚川道に比重が移るとともに、天保三年（一八三二）の犀川通船の開始も大きい。

明治以降の川手道
犀川線

江戸時代の道幅は、当初六尺（一・八^丈）であったが、明治時代のはじめには明科村では二間（三・六^丈）をもっている。田沢川や会田川には橋も架かっている。明治に入ると改修工事が進められ、県道に編入されることもあったが、改良工事はなかなか進まない。

大正年間になると自動車等の交通機関が発達し、長野―松本間を最短距離で結ぶ犀川線として県道に認定された。昭和十三年（一九三八）に開通したのが現在の一九号線のルートで、多くの橋が架けられ道路整備が進められた。

国道一九号線

昭和二十七年（一九五二）に国道認定になり、一級国道一九号となる。明科町内の総延長は一〇・五㌔である。その後、二九年からの道路整備五カ年計画が、一九六〇年代後半には第四次、第五次計画と次々実行に移され、道路の整備は次第に進んでいった。昭和三十九年（一九六四）に長野―松本間の全線の舗装が完了する。犀川に架かる橋も、明科・生坂間の睦橋が昭和三十九年、木戸と荻原を結ぶ木戸橋が昭和四八年（一九七三）に竣工する。モーターゼーションが急速に進展し、ともに長野県をほぼ南北に縦貫する道として、さらに長野市と名古屋市を結ぶ交通の大動脈として重要な交通路となる。その沿線である明科も経済的に潤うことになる。

長野自動車道の開通

昭和五十七年（一九八二）に全線開通した中央自動車道西

宮線から分岐した長野自動車道が、昭和六三年（一九八八）に豊科インターチェンジまで開通し、平成五年（一九九三）に更埴ジャンクションで上信越自動車道に接続して全線開通する。物流は大きく流れが変わり、それまで国道一九号線が担っていた長野と中京圏を結ぶ大動脈としての役割は、長野自動車道に取って代わる。再び川手道と同じように、国道一九号線は松本と明科、そして犀川筋を結ぶ道となった。

（原明芳）



現在の川手道



川手道沿いに残る石造文化財



国道19号

邑に不学の戸なく 二十校

明治五年（一八七二）、明治政府は「邑に不学の戸なく、家に不学の徒なからしむ」の趣旨のもと学制をしく。以降、明科の各村にも学校が営まれた。その学校の数は三〇を数える。明科町教育委員会は昭和五〇年（一九七五）一〇月から昭和五一年一月まで調査し、その学校の歴史を後世に残すという目的で、明科町内三〇箇所に標柱を建立した。それぞれの学校の詳細は『明科町史』に詳しい。

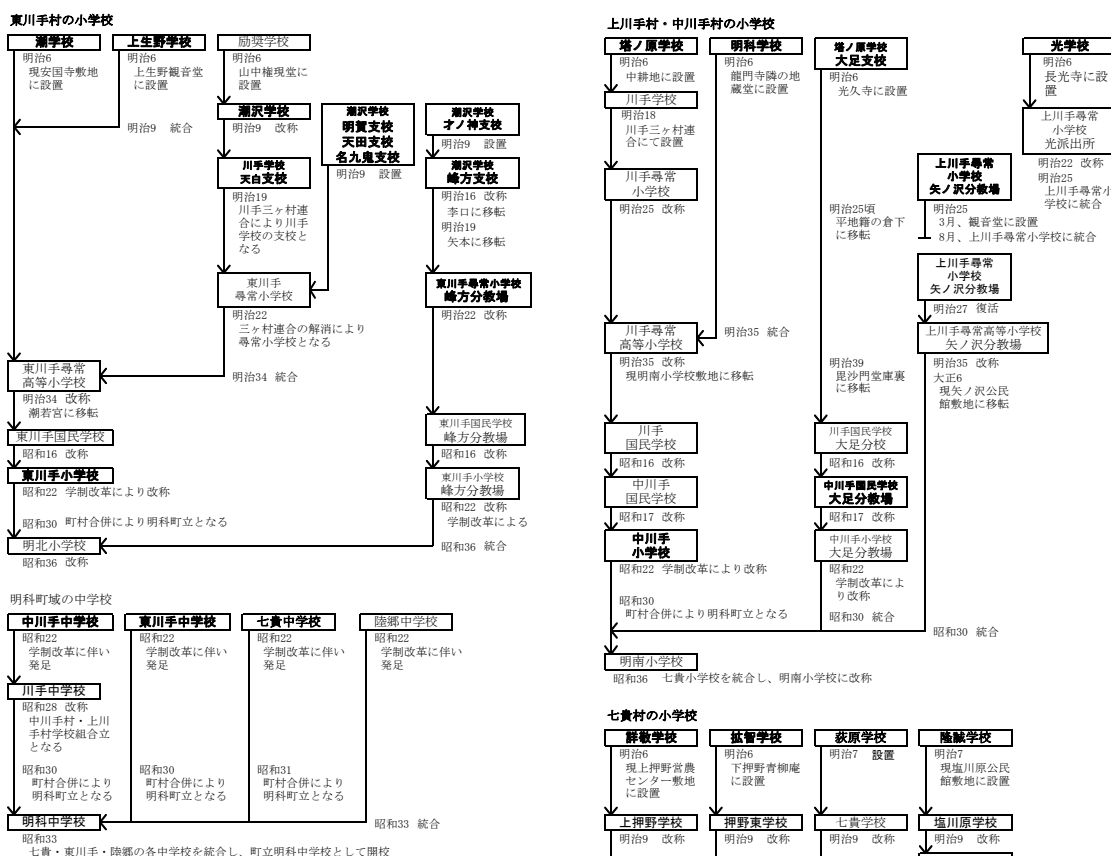
昭和の大合併を記録した「町村合併史資料」によると合併後の取組について次のように記している。「先ず第一に手をつけた事は適正規模による学校教育の振興であり、之がため学校の統合を行った。小学校については三小学校と一分校を統合して二小学校とし、中学校については三中学校を一中学校に統合した。このため小学校については普通教室、特別教室のほとんど全部を改築し、中学校については普通教室、体育館を新築し、又教材の整備を合わせて行った。」第二に支所の廃止、第三が児童福祉、第四環境整備、第五水道の敷設である。地域が学校教育をどれだけ大切にしているのかを知ることができる。

更に昭和二九年（一九五四）一二月に林虎雄長野県知事に提出した中川手村と上川手村の「合併申請書」の理由書

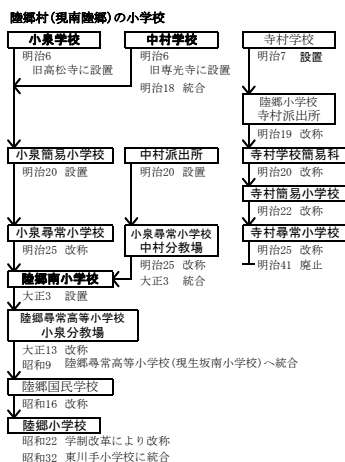
に「昨年四月には中川手村並に上川手村字光区の中、北村、中條、白牧、矢の沢四部落とは上川手村の了解のもと組合立川手中学校を建設し、現在に至って居る實情である：」とあるように学校の立地そのものが合併の後盾となっていることがわかる。

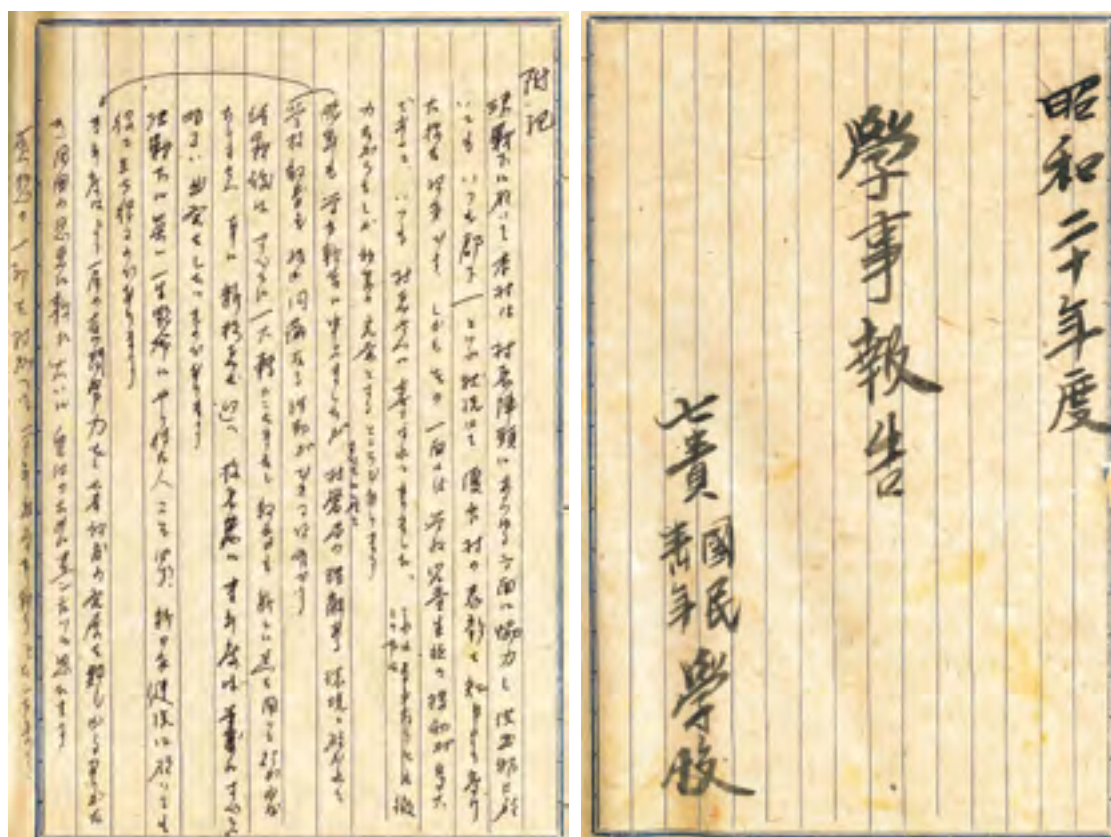
学事報告は、年度末に校長（教頭）がその年度の児童生徒数や行事、教育課程などを記録するものであるが、当時の世相を知る資料でもある。昭和二〇年度七貴国民・青年学校学事報告の附記である。「決戦下に於いて本村は村長陣頭にあらゆる方面に協力し供出物に於いてもいつも郡下一という状況にて優良村の表彰を知事より受けた様な次第です。しかもその一面には学校児童生徒の援助が多々であるといつも村長さんに喜ばれて来ました。これはこの事は微力ながらも我等の光栄とするところであります。終戦後はすべてに一大轉坎を来たし教育も新しい道を開いて行かねばなりません。幸に新校長を迎え来年度はすべてに明るい出発をしたいものであります。決戦下に眞に一生懸命にやり得た人こそ必ず新日本建設に於いても役に立ち得るのであります。（略）感想の一部を付加して二十年度の学事報告といたします。」

明治5年(1872)の学制発布以後に置かれた学校(太字は分布図に示した学校)



明治5年（1872）の学制発布以後の学校分布





昭和二十年度学事報告
七貴国民・青年学校



旧東川手小学校・中学校の標柱

学校史の中で長野県明科高等学校設立を欠くことはできない。それは長野県の公立高等学校としては、おそらく最後となるであろう新設校の設立であり、地域からの熱い要望と期待によって設立した経緯からである。昭和四九年度明科町九月議会において、普通高校誘致の筑北一町六ヶ村の状況について、小林一富町長は、「普通高校誘致に向けて、町村会で全員の賛成を得て、議長、教育委員会で強力に陳情してある。来月関係町村の議長、教育長に集まっていただき期成同盟会のような組織を作り進めたい。実現には年数がかかる見通しである。」と答弁。昭和五一年一月、筑北地区高校誘致促進期成同盟会発足。昭和五二年一月、東筑摩郡民総決起大会開催。昭和五四年六月長野県会文教委員会で第一通学区について、一校目は昭和五八年四月開校、二校目は昭和六一年四月開校と決定。昭和五四年九月二日、松本市長、塩尻市長、明科町長の連名で申し合せ書に合意。そして昭和六一年四月に長野県明科高等学校が開校した。地域に根ざした教育課程を編成し、平成二六年一月二五日、内閣府社会貢献青少年表彰を受賞する。



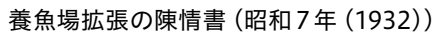
明科高校の開校を記念して山車を引く生徒たち
(昭和61年(1986))

明科養鱒場について『長野県水産史』から詳細を記す。

明科の豊富な湧水に着目し、養魚場を設け、鱒族の人工ふ化・養殖を行い、県内放流の種苗基地をつくりたいと考えた長野県初代の水産技師太田知度が、大正一五年に倉科多策に相談する。倉科は同志である竹田信平と共に太田と次の約束及び契約を交わす。



・一万三〇〇円の工事を投じて一切の設備をなした上、運営資金年額三〇〇〇円を添えて、無償で県に貸与する。



② 契約

・養魚場で飼育した食用魚を無償で倉科に提供する。

昭和二年（一九二七）、長野県土木技師門司武久の設計で一切の工事が完了し、長野県魚類増殖場は発足する。長野県は倉科の寄付金だけでなく、国庫補助や発電会社からの寄付をこれに充てる。昭和元年から七年にわたり全国ほとんどの鱒族が明科増殖場で試養される。更に明科町「町村合併史資料」によると明科町の特産物として次のように紹介している。

「町の特産物としては、県の水産指導所においての虹鱒の養殖があり、この地に開所以来二五年現今では四千万粒の種卵を数え、日本各地にこれを供給しており、その規模は正に東洋一を誉っている。近時指導所長谷崎正生氏のもとに黄色い虹鱒が生まれ、之



現在の水産試験場

が大量養殖に成功し虹鱒の生態分布の試験に、又最近において伊勢神宮五十鈴川に大量の虹鱒を奉納し、その名声は全国に知られている。同所内はいつでも視察ができ、各種池に放流されている黒黄さまざまな虹鱒の流泳は壮観を呈している。又虹鱒釣りは年中いつでも行われ、家族づれの行楽の憩いの場として毎日賑わっている。」（平沢重人）

倉科多策 略歴

元治 二（一八六五） 一月三十一日 明科中川手竹田家に生まれる
 （年未詳） 明科中川手倉科家に養子
 （年未詳） 明科駅前明科館を開業
 明治二七（一八九四） 九月 中川手村塔原区会議員（明治三四（一九〇二）六月）
 明治三五（一九〇二） 開業の明科駅を招致
 明治四三（一九一〇） 開業の国営明科製材所を招致
 大正 八（一九一九） 一〇月 東筑摩郡会議員、郡会議長（大正一二（一九二三）
 大正一二（一九二三） 開業の明科水力発電所を招致
 大正一四（一九二五） 明科木戸間の簡易水道敷設に尽力
 大正一五（一九二六） 明科養鱒場（現長野県水産試験場）建設
 昭和 二（一九二七） 白馬自動車による明科会田中川線開通に尽力
 昭和 六（一九三一） 八月一五日 全国湖沼河川養殖研究会より感謝状
 昭和 一四（一九三九） 十一月二日 七五歳で亡くなる

6 中村善策と明科

「其晩明科に電話して、私のここに居ること、明朝訪ねる豫定であることを、其米屋に泊つて居る中村善策に告げた。然るに翌くる朝私が主人に頼まれて紙本の横物を一枚畫き終つた頃善策は逆に訪ねて來た。善策は此村に馴染みが多く、かねて此主人とも知つて居るのであった。しばらく話したあと善策は私に伴れ立つて此家を辭した。彼は明科から借りて來た自轉車に私の荷物をつけて平坦な安曇野をのどやかに行くのであつた。」（石井柏亭「山河あり」）

画家石井柏亭の隨筆「山河あり」の一文である。石井柏亭は昭和初期に活躍した画家で、当代屈指の芸術家として画壇に君臨しており、戦火を逃れ東京から松本の浅間温泉に疎開していた。中信地区の画家たちは、大芸術家の知己を求め石井のもとを訪れ、石井もまた、長野県の芸術振興に協力を惜しまなかつた。

この時、柏亭がいたのは穂高北穂高の高橋太一宅である。

柏亭は北穂高の村長であつた高橋太一を訪ね一泊していた。高橋は若い日に銀行員として勤務の傍ら芸術を愛好し、自身も絵画を嗜む日曜画家であつた。高橋は近衛兵を務めた際に知己を得た日本画家で、東京美術学校教授の結城素明をたびたび穂高に招き親交を重ねていた。高橋は結城の伝手により、東京の柏亭を訪ね、自作の水彩画の批評を乞うたことがあつた。柏亭が北穂高の高橋家を訪ねた際、そ

こには高橋の三男の漆絵の衝立が置いてあった。もちろん、これは後に文化勲章を受章する高橋節郎の作品である。高橋太一は水彩画の個展をたびたび開催するほど熱心に絵画を描いており、自身の技術向上のために、松本平の美術の勉強会にも出席し、当然、中村善策とも面識があった。

中村善策は二科会や一水会に所属する画家で、当時は明科の丸力旅館（米屋）に疎開していた。二科会や一水会は、石井柏亭らが中心となり結成したものであった。自身の所属する団体の主導者が隣村に来ているのだから、中村が慌てて柏亭を迎えに参上するのも不思議なことではあるまい。



中村善策 (1901~1983)
(写真は市立小樽美術館蔵)

「明科驛に近い小さな旅館米屋の會場に肩の撫でた細そりとした中村の妻君に會ひ、間もなく午食を招ばれた。中村の落合の家も十二日の晩に焼けたのだが、其時細君はもうこつちに来て居た。畫の材料等は精々運んだが、二科会、一水会の出品畫の多くを焼いたし、世帯用具もだいぶ失くしたと云ふ。」（石井柏亭「山河あり」）

中村善策もまた、戦火を逃れて明科に疎開していたのだが、昭和二〇年（一九四五）四月一三日の東京大空襲により自宅に残っていた作品の多くを焼失している。

「矢張り此宿の客となって居る歌人岡麓に會つて昔話などをした。（中略）雨が止んだから善策の案内で龍門と云ふあたりをあちこちし、堤の内側の細川沿ひから丘に並ぶピットレスクな家並などを入れた構圖を即寫して置いた。中村が私を松本まで送って来て私の畫を見て歸った。」（石井柏亭「山河あり」）



当時、明科の丸力旅館には岡麓も疎開しており、石井を交えて芸術談義を重ね、明科に著名文化人が集まるサロンのような一時があったのだ。

現在、明科公民館のロビーには中村善策が描いた「信濃



《信濃は初雪》(昭和52年(1977))

は初雪」という作品が飾られている。北海道立近代美術館の「明科の里」、東京国立近代美術館の「信濃」、長野県信濃美術館の「丘の春」、これらは明科の風景を描いた風景画である。いずれも遠方に爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、五竜岳の後立山連峰を配する構図である。中村善策の作品は、市立小樽美術館に収蔵されており、明科の風景のほかにも北海道の風景を多く題材としている。絶壁と海岸線を組み合わせた北海道の風景作品は、明科の風景を描いた作品と似た構図をとっている。山岳と河川、傾斜地を配することができる明科は、風景画家として生きた中村善策にとって、その美意識を叶える理想の地であったのであろう。

(三澤新弥)

7 青木祥二郎

明科を愛し、明科の隆盛を願い続けた能楽師

昭和三年（一九二八）、一四歳の少年であった青木祥二郎は、日本画家の今尾景祥のもとで奉公をしながら絵の勉強を重ねた。今尾より「嗜みとして能を習いなさい」と言われ、

能を習い始めたのが一四歳八ヶ月であった。そして昭和八年（一九三三）、一九歳の時、今尾の紹介で観世流片山博通の内弟子として入門する。太平洋戦争を経て、昭和五三年

（一九七八）五月二十八日、青



青木祥二郎（平成3年（1991）夏）

木は能楽師として国の無形文化財（総合指定）の認定を受ける。明科町はその功績を認め、平成元年（一九八九）三月一七日の町議会において明科町名誉町民第一号に選定される。青木が発起人となった「水郷明科薪能」は、現在「信州安曇野能楽鑑賞会」と名前を変え、安曇野の夏を彩る風物詩として定着している。経歴は略歴に示すが、日本の伝統芸能である能楽の振興と創造に務めた八五年に及ぶ足跡を青木自身と関係した人々の言葉を通して記す。

○昭和五三年（一九七八）七月一九日明南小学校を訪問する。

私は中川手尋常高等小学校卒業後、能楽の道に入り、今日まで四十有余年微力を尽くして参りましたところ、このたび無形文化財に指定の榮譽を受けることができました。これも私をはぐくみ育ててくださった小学校および地域の皆様方の温かい支援のたまものと感謝しています。そこで、この受賞を記念して母校生徒の健全な成長を願い、何かお返しをしたい。

○昭和六一年（一九八六）七月七日夫婦で来町し、明北小学校へ五〇万円を寄付

同じ町に二つの小学校があり、片方だけに青木文庫があったのではない。今後は明北小学校にも青木文庫を創設していただき、少しでも子どもたちの成長のお役に立っていききたい。

○昭和六二年（一九八七）六月三〇日明南小学校を訪問する。（学校日誌より）

一時頃から五分間ほど職員室で全職員に、ご挨拶をいただく。おだやかな人格者である。

○平成二年（一九九〇）明科町名誉町民称号授与式にて、参列した三五〇人を前に

明科町名誉町民 顕彰式典



平成二年一月四日
明科町

明科町名誉町民顕彰式典のパンフレット
(平成2年(1990))

能楽の道に入る心を培って下さったのもふるさとのおかげ。私はふるさとが大好きです。少しでも恩返しができるばと思っています。この春には狂言の舞台を開催したい。

○平成三年（一九九一）十一月一三日明南小学校三十周年記念式典にて

能楽は学べば学ぶほど奥深く、実に素晴らしい芸術であり、特に木彫美術の最たる能面の美しさは、詞（ことば）に言い表せないものがあり、日本人の心の美の最高の現れである。

○平成一一年（一九九九）第九回明科薪能を終えて（長男 青木道喜氏）

千百人の観客を得て、薪能が盛況であったことを告げると、病床にあり、口がきけなくなった父は黙って私に手を合わせた。

○平成二八年（二〇一六）十一月校長講話「能楽師青木祥二郎先生と明南小学校」感想（児童作文六年）

能楽師の青木祥二郎さん。能を広めるのに決断したのがまだ十代だったことにおどろき！青木さんはこの明南小学校の卒業生。そして常にふるさとのことを考えてくださっていたと聞いてうれしくなった。竜神の絵はその温かい気持ちでおくってくださいましたものと知り、今まで何気なく見ていた絵をゆつくりと見たくなった。違うところに行けば、ふるさとより自分のことを考えてしまうのに、ふるさとのためにできることを考えていた青木さんを自分も見習いたいと思った。

（平沢重人）



現在も続けられている能楽教室（豊科東小学校・令和元年（2019））



明南小学校に寄贈された竜神の図

青木祥二郎 略歴

大正 三（一九一四）八月一〇日

本名匡（ただし）、父青木榮一郎、

母きよの七男として明科中川手上町に生まれる

昭和 三（一九二八）三月

中川手村立川手尋常高等小学校一年修了

昭和 三（一九二八）四月一〇日

京都市日本画家今尾景祥氏の書生となる

昭和 八（一九三三）七月

観世流片山家入門

昭和 一七（一九四二）一月

観世流師範免許取得し、独立

昭和 五〇（一九七五）五月二八日

無形文化財（総合指定）に認定

昭和 五〇（一九七五）

明南小学校へ楽器及び図書購入費として二三〇万円寄贈

昭和 六〇（一九八五）一月一日

明科町町政施行三〇周年記念能楽会

昭和 六一（一九八六）

明北小学校へ楽器及び図書購入費として一八〇万円寄贈

昭和 六二（一九八七）一〇月

能楽師の最高位、観世流「職分」に昇格

昭和 六三（一九八八）一〇月

能楽最高の秘曲「姨捨」を開曲

平成 二（一九九〇）一月四日

明科町名誉町民顕彰式

平成 二（一九九〇）

明科中学校へ図書購入費として一四〇万円寄贈

平成 三（一九九一）八月二二日

第一回水郷明科薪能（現安曇野薪能）開催

平成 五（一九九三）八月

第三回水郷明科薪能「鉢木」の能を最後に引退

平成 七（一九九五）一月

明科町文化祭で「青木祥二郎日本画展」開催

平成 一一（一九九九）五月

水墨画「竜神の図」を明科町と明南小学校へ寄贈

平成 一一（一九九九）七月

水墨画「竜神の図」を明北小学校へ寄贈

九月一〇日

病氣により八五歳で亡くなる

1 明科の人々の暮らしの変遷

犀川通船

現在、明科は明科駅を中心にして国道一九号線沿いに市街地が形成されているが、かつては明科の中央を流れる犀川通船が盛んで、木戸橋あたりが物資の集積地としてにぎわっていた。犀川通船は信州新町や長野方面に物資を運ぶために重要な役割を果たしていたのである。川は西と東の交流をしにくくもしていたが、各所に渡し場があり、東西の人の行き来は渡し場を利用していたものであった。

川はまた氾濫して被害をもたらすこともあったが、鮭や鱒などが上ってきて、川漁も盛んに行われていた。犀川流域に住む釣りの好きな方は、赤魚・鯉・フナなどをよく獲ったといい、その方法として、ふて針・ケイサンドウ・地獄などの方法を使って獲ったという。また、今では幻の魚といわれているカジカも、川岸から二〜三間沖へ杭を打って筵で滝をつくっておくと、カジカが滝にぶつかって岸の緩やかな流れに向かってきてウケに入り、よく獲れたものだった。ウナギも生計の一つにできるぐらい獲れた時期があった。下流にダムができたことなどによって、鮭や鱒などは上ってこなくなってしまうたし、漁をする人も高齢化



川漁



明治35年（1902）に架けられた木橋の犀川橋

して、次第に行う人が少なくなってきた。

自然の漁と並行して昭和十五年（一九四〇）、長野県水産指導所がニジマスの養殖をはじめ、中川手地区の八戸の家が飼育に参加した。しかし、戦争が激しくなって餌の蚕蛹は人の食料になり、一時期休業状態になった。戦後、昭和二五、六年ごろ復活し、今に至っている。こうした事業は、安曇野全体の特色としてみられる、きれいな湧水の存在などが大きい。

渡船から陸上交通へ

川は恵みをもたらす存在であると同時に、人の行き来を阻んだり、時には氾濫して人々に災害をもたらしたりもする。犀川も、東西南北に行き来するには渡し舟を使わなくてはならず、沿岸にはいくつかの渡し場があった。明治一〇年（一八七七）ごろの渡し場は、熊倉・田沢・光・塔の原・荻原・小泉・小立野・下生野・日岐・上生野・草尾・大日向・下生坂・古坂などにあったといわれている。大船は長さ八間、幅五尺で犀川通船の船より大きかったというが、これは馬を乗せるための大きさになっていたという。明科方面から信州新町方面に運ばれたものは、タバコ・楮・桑皮・桑苗・繭・板材・筵などが主なもので、上りの荷物は塩・石油・魚類などが主だった。



昭和11年(1936)に架け替えられた犀川橋
(昭和13年(1938))



木戸橋が架かる前の犀川兩岸の風景(昭和初年)

こうして渡船に頼って川を渡っていた方法も明治三五年(一九〇二)には犀川橋が、昭和五年(一九三〇)には木戸橋が、昭和六年(一九三一)には睦橋ができたので、渡船は順次廃止されていった。睦橋と木戸橋の間にあった小泉・小立野間の渡し場だけは昭和二十一年(一九四六)まで営業していたという。

また、天保三年(一八三二)に許可されて以来の犀川通船も明治三五年の篠ノ井線開通によって、次第に衰退していき、物資の集積地としてにぎわっていた木戸の賑わいは



木戸橋の渡り初めの後の記念写真(昭和5年(1930))



大正13年（1924）明科駅周辺



明科駅前の賑わい 旅館明科館も見える

明科駅周辺へと移動していった。鉄道の開通によって設置された明科駅は、人々が盛んに利用し、駅周辺には繭の仲買人をはじめとする商人などが宿泊する旅館が四軒もあり、料理屋も大正六年（一九一七）には一五軒を数えたという。料理屋に女性はずきもので、最盛期には三〇人も芸者がいたという。物資の集積地としておおいに賑わっていたことがわかる。

大丁商店前 家構えなどからも
当時の盛況ぶりがわかる
(明治末ごろ)



明治末ごろの明科駅前と昭和末ごろの明科駅

明科の生業の変遷

明科も他地区に劣らず養蚕が盛んだったので、明科駅周辺には生繭取引場などもでき、農家から出された繭の競りが製糸家の買人によって行われたし、組合製糸の三栄社も大正一〇年（一九二一）に操業をはじめ、一時は三〇〇人も女子工員がいたという。明科駅で降ろされた物資は、荷馬車などに積まれて山清路など各方面へ運ばれて行った。橋ができたことによって、陸上の交通の便が格段に良くなった。

また、通船で運ばれていたタバコや桑苗や繭などの生産物も太平洋戦争を挟んで、次第に緬羊を中心とした畜産産業へと変化し、さらに果樹や花卉栽培・養蜂へとスライドしていった。

特に緬羊は東川手地区で昭和三〇年（一九五五）ごろまで盛んに飼われ、緬羊の競り市なども開かれたものだという。昭和三〇年代まで盛んだった木炭生産なども、家の構造や生活形態が変化にしたがって需要がなくなり、煮炊きの燃料も石油・ガス・電気へと変化した。燃料の変化は里山の木々の需要にも影響を与え、心がけて手入れをしなければ山は荒れてしまうような状況になっている。現在、地元住民やNPO団体によって、かつてのような里山を再生し、活用しようという活動が行われ、生物多様性や



上押野の養蚕業の様子を視察される貞明皇太后
明科地域の養蚕の盛んだったことを物語る写真である（昭和25年（1950））



東川手の緬羊市



たばこの植え付け風景（名九鬼）
かつて「生坂たばこ」として盛んに生産された

希少動植物などの復活・保存にも目が向けられるようになって
いる。
（倉石あつ子）

2 山と川の恵み

家の薪は里山から（里山利用の原点）

明科の多くの家々では、共有林や自分の山をもっていた。山の木材は自分の家を建てる時のためを考えて建材になるような檜・杉・松などをそれぞれ植林し、陽当たりなども考慮して植え分けた。木は植えっぱなしにすれば山が荒れてしまうので、持山であれ共有林であれ、定期的な手入れをしなければならない。下草刈りなどはその代表的なもので、刈った下草は田んぼの肥料である刈藪として利用された。

化学肥料などが貴重だった時代、刈藪は田んぼの肥料としたり、あるいは畑に入れるものとして重要だったから、どこの家でも少しでもたくさん刈って運び下ろしてきた

い。共有林など、それぞれの家が勝手に入って行って刈ってしまうと、遅く行ったものはわずかの刈藪しか手に入れることができない。そこで、ムラではみんなが公平に下草を手に入れられるように、刈藪を刈りに行く日を決めていた。それを「山の口」といい、矢ノ沢では五月一七日ごろに山の口があった。山に入る期間も七日から一〇日ぐらいの間と決められ、その間に運んで来られるだけのものを運んできた。山を長く継続的に利用するためには、採りすぎることがないよう工夫がされていたのである。

また、囲炉裏や竈を使って煮炊きをしていたころは、焚きつけの松葉や薪・炭なども近くの山から採ってきたものを利用した。枝打ちした木を一定の長さに伐って家まで運び下ろしたり、ある程度の長い木を家に運んできてから

薪にしたりした。囲炉裏や風呂の薪は一年中使うものだったから、かなりの量を農閑期の間に準備しておいたものであった。火を焚いてできた燠おきはこたつに入れて、家族で暖を取る。できた灰は畑などに持って行って作





山から樋で引いてきた水のおいしさは格別である（清水）

る野菜に応じて撒いて、肥料としたり、篩ふるいでこしてわらびの灰汁取りなどに使用した。捨てるものがほとんどないほどに無駄なく使ったものであった。

さらに山はわらび・こごみ・ふき・竹の子・きのこ・あけび・栗など、四季折々に恵みをもたらしてくれる。たくさん採れば塩漬けにしておいて、冬、野菜が不足しがちになると塩抜きをして食卓に載せることもできる。現在でも折にふれて山に入り、山菜類を収穫して楽しむ人は多い。売ることが目的ではなく、季節の恵みを楽しむことが目的なので、地域の人々は採りつくしてしまうような取り方はしない。きのこの「しろ」などを自分だけの秘密の場所として確保しているのも、翌年につなげていく知恵でもあろう。

犀川をさかのぼってきた鮭

「槍で別れた梓と高瀬 めぐり逢うのが押野崎」

安曇節で歌われるように、北アルプス槍ヶ岳を水源とする犀川と高瀬川が合流するのが、明科押野。梓川はその手前で塩尻方面から流れてきた奈良井川と合流する。梓川は犀川と名前を変え、長野市で千曲川と合流し、最終的には信濃川となって日本海へと流れていく。

鮭はその流れをさかのぼって安曇野に来ていた。しかし、昭和十三年（一九三八）、千曲川や犀川にダムができたことで、鮭は遡上しなくなった。それでも、『明科町誌下巻』によれば、昭和十五年（一九四〇）ごろまでは鮭の遡上が確認されている。

鮭の歴史は古く、平安時代末には麻績御厨から伊勢神宮へ納められている。麻績川も犀川の支流の一つである。その後、江戸時代になると、松本藩では鮭を小物成として納めさせた。明科でも光村・塔原村・押野村でそれぞれ納めていた記録がみられる。白鳥の越冬地として知られる御宝田の一角には「鮭宮」という地名が残っている。



投網



中央の長い柄のものが鮭を獲ったヤス。その手前の長い網がほっぱ漁用の網。下は釜さまざま

① 鮭の捕獲

鮭は浅瀬に上がってくる。海からの長い旅を終えて遡上した鮭は、流れの緩やかな浅瀬を産卵場所を選ぶからだ。浅瀬に上がると鮭の背中が見えるので、そこへ網を掛ける。網は爪楊枝ほどの太さの麻糸を使う。鮭が産卵するために作った場所を茎と呼び、その茎を見つけることが肝心だった。長年の経験で茎を作りそうな場所にあたりをつける。茎を見つけるとその正面にあたる川辺に杭を立てて柳の木の枝を切って縛り付けるなどして印をつけた。これは、夜になってもわかるようにという印であると同時に、他人に対して「自分が見つけた茎である」と主張するものでもあった。やがて、鮭があらわれて網を打つ。産卵場所に打つので、上手に打てばメスだけでなくオスの鮭まで獲れるのだから、漁をする人にとってその醍醐味は忘れられないことになる。

鮭をヤスで獲る方法もあった。長い柄のついたヤスで、柄はネズミサシなどの堅い木を使ったもので二〜三尺はある。このヤスをさかのぼってきた鮭めがけて投げて仕留めるのである。もう一つの捕獲方法として、ほっぱという網を仕掛けておくこともあった。

② 鮭漁の思い出

昭和初期生まれの男性は、昭和十三年（一九三八）まで祖父と一緒に鮭漁をした。その後は西大滝にダムができて、鮭が上ってこなくなってしまった。

鮭が獲れるのは、一月二〇日のえびす講のころである。犀川の本流だけでなく支流や前川まで上がってきた。犀川に並行して段丘の下を北に流れる川を前川と呼ぶ。イクラも取って、醤油をかけて食べた。春先になると、稚魚が五センチくらいになる。それを「メセキ」という目が細かい投網で抑えて獲った。一晩酢につけておくとシコシコして大変美味かったという。



カジカ漁の仕掛け



清流に棲むカジカ



前川でとれたドジョウ
たくさんとれると夕飯のおかずなどになった



ツケバ漁でとれたウグイ

また、『犀川鮭繁盛記』の筆者、青木梅生によれば、鮭は煮て食べるのが一般的だったが、青木は料理に興味があつて、ある時切り身を照り焼きにしたら「これが大変うまくて」多くの人に喜ばれたという。

現在のわれわれにとっての鮭は、年取りの際に贈られる新巻鮭が一般的なものとなっている。一方、日常的にスーパーで売っている塩鮭の切り身も食べているが、安曇野の鮭の歴史や捕獲方法に意識を向けることはほとんどない。いずれにしても、秋に犀川をさかのぼってきた鮭が、私たちの食卓に上ることは、もうない。

タバコ栽培で潤った明科

①明科のタバコの歴史

江戸時代のはじめ、慶安年間（一六四八―五二）の検地帳を見ると、明科の潮沢や上生野から現在の生坂村を含む犀川右岸の山間部では、麻の栽培が盛んな様子がうかがえる。当時、麻は衣服をはじめ、麻縄や麻袋など暮らしの多方面で利用され、換金作物としても重要であった。しかし、江戸中期、元禄年間（一六六八―一七〇四）になると麻の記録はしだいになくなり、変わって木綿が進出してくる。麻の値段は次第に下がり、麻畑はタバコ畑に変わっていった。

松本地方でのタバコ栽培は上生坂村（現生坂村）照明寺住職良憲が諸国修行の際、長崎から種を持ち帰り、寺の雪隠（便所）の畑へ撒いたところ、よく育ったので村人に種を分け、栽培を教えたのが始まりだと伝えられている。明科ではまだ麻が栽培されていた慶安年間に、すで上下生坂村ではタバコが作られていた。それからおよそ五十年後の元禄年間には筑摩・安曇・更科・上水内の広範囲でタバコが栽培されるようになっており、「生坂・莫・平のし苺・苺」と記された荷物だけでも二〇〇〇駄以上が中馬によって運ばれている。

タバコは年貢として物納はせず、換金した金で納めた。

名古屋方面や上田・上州・甲州・糸魚川方面など多方面への販路があった。寛政年間（一七八九―一八〇二）から江戸へも刻みタバコを出すようになった。江戸へは保福寺峠、青木峠を越えて上田を経て北国街道・中山道を上州倉賀野まで行き、倉賀野からは船で利根川を下り、関宿から江戸川を下って江戸へ入った。



タバコ包丁とあて木

②明科最後のタバコ畑

明科で最後までタバコが栽培されていたのは、東川手名九鬼^{なぐき}である。平成二四年（二〇一二）、大正一〇年（一九二一）生まれのFさんの耕作するタバコ畑が最後に残った。Fさんの畑は明治時代中頃にFさんの父親が拓いたものである。名九鬼ではタバコ以外の生業は養蚕だけだった。野菜畑を作るにはシカやイノシシが多く、何を植えても食べられてしまう。現在、松林になっているところはほとんどが桑畑だったが、養蚕が衰退したので、カラマツを植林した。当時は、カラマツが電柱用の建材としてよく利用されていたからである。売れるのを見込んで一番いい桑畑にカラマツを植えたが、電柱はコンクリート製のものが利用されるようになり、加えて建築材料としての需要もなくなり、結局木材として売ることがなかった。

Fさんの家の南側にかつては六軒の家があったが、皆、移住してしまい、Fさんも長野市の子どもの家で暮らすようになった。しかし、タバコ栽培が好きなFさんは、タバコ栽培の季節だけ名九鬼に戻って暮らしていた。そして、その後Fさんも亡くなり、明科のタバコ栽培の歴史も幕を閉じた。



畝が立てられた名九鬼のタバコ畑（平成24年4月）



タバコ苗の植え付け

③タバコを栽培する

タバコを栽培するには日本たばこ産業（ＪＴ）との契約が必要である。Ｆさんが申請している畑は一反三畝で、西向き斜面が一反、南向き斜面が三畝である。ただし、西向き斜面の一反は畦も含めてなので、実際には九畝六歩くらいと見込んで、西斜面に三畝の畑を作って収穫量を調整する。タバコの栽培面積については抜き打ちの検査があり、申請よりも少ない面積の時は良いが、多ければその場で苗を抜かれてしまう。苗は四月末から五月三日までに植え付ける。畑に苗を植え終わったら、畑の入り口に何本の苗が植えてあるかという看板を立てる。

タバコの植え方はいくつか方法があるが、Ｆさんの畑は普通植えという方法だ。マルチと呼ぶビニールシートを掛け、七、八センチほどの穴を開け、金属製の移植器を使って植える。タバコ畑は南向きが良く、日当たりが良いほうが良いタバコが育つ。農薬はアブラムシ対策で使うこともあるが、Ｆさんの畑ではアブラムシは飛んでこないで使う必要がない。除草剤は畑の周りにのみ使う。

タバコは霜に弱く、植えた翌日にでも霜が降ればほとんどだめになってしまう。しかし、植えてから三日ほど経てば霜が降っても一番大きい葉が裏返り、他の葉を覆うようになってしまうので耐えることができる。根がしっかりと張って芽が出ればもう問題ない。また、霜があたっても急激に乾燥し



収穫したタバコの葉
(平成20年代 撮影者:宮下幸光)



収穫され、屋内に干されたタバコの葉
(平成20年代 撮影者:宮下幸光)



乾燥した葉を束にする
(平成20年代 撮影者:宮下幸光)

なければ大丈夫。植えた後の手入れとして梅雨明けに茎についている地面に近い下葉二、三枚をとって棄てる。その作業を枝止めといい七月二〇日前後に行う。

七月二〇日頃から早い葉は収穫を始めるが、目安は葉が黄色味を帯びるころで、八月初めころからが本格的な収穫期となる。葉の色を見ながら三、四段階に分けて行い、葉を一枚一枚かきとっていく。かきとった葉は物置などに縄を張って縄の間に刺しこみ、しっかりと乾燥させる。乾燥は荒水切りが大事で、まず、三八度の室温にしたハウスに三

〜四日入れる。そうするとタバコの葉は真つ黄色になるので、その後は自然乾燥させる。乾燥した葉も一〇月くらいまではまた水分を吸い込んだりして、一月くらいになると落ち着く。一月半ばくらいに長野市若里にある葉たばこ取扱所に売りに行く。運送料(旅費)や、宿泊費、日当まで全部出してくれる。ただし、それは鑑定されて売れたらの話で、売れなかったら経費は何も出ない。鑑定は一五〜二〇分で終わる。

④タバコで潤った暮らし

弘化年間（一八四四—一八四七）には明科町域のほとんどの村がタバコ栽培を行っていた。農作業の合間に女はタバコの葉をのして、男はその葉を刻んでいた。上生野村では五六軒のうちタバコ商が六軒、刻む家が三四軒あった。明科地域でもタバコは貴重な現金収入源であり、タバコの売買で得た金で江戸へ出て学問をし、村に帰って寺子屋の師匠となった人もいた。暮らしにもゆとりがで、それまで土座敷だった家が板敷きになり、畳を敷き、天井を張り、床の間なども造られるようになった。床の間ができれば掛け軸なども掛けたくなる。江戸や名古屋の文化も入り、高価な書画・骨董・刀剣などを買う人も出始めた。茅葺などの屋根が瓦葺きになり、土蔵も造られるようになった。家だ



狂言や能などに興味をもって狂言師になった方が町民の中にいらっしゃるということも、豊かな文化がはぐくまれた証であろう



明科座の舞台

働く日々の合間に生活の中に楽しみを入れることも忘れない

けではない、村の神社などの祭りで狂言なども楽しむようになり、善行寺参りや伊勢参りなどのほか、江戸や京・大坂見物にも仲間で出かけるようになった。明科の寺社や堂などに立派なものが多いのはタバコによるところが大きいといわれている。明科の人々がはぐくんだ文化は豊かで、今も明科に生き続けている。（倉石あつ子・宮本尚子）

3 自然とともにあつた暮らし

明科の人々の多くは野良仕事や山仕事に従事しながら生計を立てていたので、その暮らしは常に自然とともにあつた。自然の中では動物や植物と常に接し、それぞれが折り合いをつけながら互いの領域を冒さないようにして暮らしてきた。そうした暮らしの中から自然や動物とかかわるさまざまな話生まれ、人々はあたかもそれを本当にあつたかのように語り継ぎ、語るることによって互いの領域を冒さない工夫もしてきた。以下の四話は明科の代表的な伝説や世間話である。

山姥と菖蒲

昔、あるところにバカ息子がいて、嫁を求めているが、なかなか見つからないでいた。ようやく山のほうから美しい嫁の候補があらわれ、息子はその娘を嫁にもらった。嫁に何が欲しいか聞いてみると、風呂桶が欲しいという。そこで息子はさっそく風呂桶を新調して与えた。あまり良い桶なので、嫁は息子に「ちよつと入ってみたら」という。息子がさっそくはいってみると、嫁はフタをして桶を担いで山奥へ逃げ出した。



バカ息子を入れた桶を背負った山姥（村上紀子画）

びっくりした息子が蓋の隙間からそっと覗き見ると、なんと嫁が山姥になっているのでびっくり。嫁が山姥だったことに初めて気づいたが、どうすることもできず、機会をうかがっている、そのうちに山姥は疲れて、石の上に桶を下ろして一休みした。息子が上を見ると、ちょうどよい枝が垂れているので、その枝につかまって、息子は、何とか山姥が背負っている桶から抜け出した。山姥は「うん？ 休んだらなんだか軽くなったなあ」といいつつ、歩き続けたが、山姥ははつと息子が抜け出したことに気づき、休んだところまで戻ってみた。しかし、息子の姿は見えない。「どこへ行ったずら」と探し回るけれど、みつからない。

息子は桶から抜け出すと、必死で近くにあった菖蒲と蓬の藪の中に隠れた。山姥は一生懸命探したけれども、菖蒲と蓬のにおいが強く（眼をついたという説もある）、息子を探し出すことができないままあきらめて山に帰っていった。こうして、息子は、山姥の魔の手から逃れることができたのであった。

ちょうどその日が六月四日の晩だったので、今でも六月四日には菖蒲や蓬を家の軒にさして、魔除けにするのだという。

（『明科町史下巻』より）

お風呂だと思つたら・・・

昔は、夜道を歩いていてキツネやタヌキに化かされた話をよく聞くことができた。

河原に細い一本道が通っていた。塔の原から穂高へ行くときには、その道を通らないと行き来ができない。ある人が穂高へ買い物に行つて二日も帰つてこないの、近所の人が河原へ探しに行くと、泥水につかつて「いい湯だ、一緒に入らねえか」と手足をばちゃばちゃさせて、本当にお風呂に入っているような顔をして、探しに行った人を誘っていた。また、ある人は道端の「どつぼ」にはまって「いい湯だなあ」といつていた。どつぼは、田畑の肥料にするために下肥を発酵させておく場所で、そこにおちると命がないとか、助かると長者になるなどといわれていた場所である。どこの家でも畑の隅などにどつぼを埋けておき、春先の蒔きものなどに先立って、さくり上げた畝などに撒いて肥料とした。その匂いは強烈で、こどもたちはその匂いを「田舎の香水」などとはやし立てた。

別のお話。久保の坂を下りて潮に行く途中にケヤキの大木が何本もあって、暗く寂しいところがある。ある男が明科のお祭りに呼ばれて行き、ご馳走をもらって帰る途中、その寂しい場所で美しい女の人に出会った。女はしきりに愛嬌を振りまくので、男はすっかりうきうきした気持ちに

明科の地藏堂に「ずいといん」というお坊さんが住んでいた。このお坊さん、お経を読むことが嫌いで、朝から晩まで遊んでいる。ある夜、遊び疲れたお坊さんがぐっすり眠っていると「ずいといん」「ずいといん」と呼ぶ声がある。「誰だ 俺を呼ぶのは」と大声で尋ねても返事がない。また、しばらく眠っていると「ずいといん」「ずいといん」と呼ばれる。次の日も、また次の日もこんなことが繰り返されるので、とうとう四日目の夜、ずいといんは今夜こそ正体を突き止めてやろうと、珍しくお経をあげてずっと座って待っていた。すると案の定「ずいといん」と呼ばれる。念仏を唱えつつ落ち着いて声のするほうを見ると、月明かりに照らされた節穴に、ムジナの尾が出たり入ったりしている。そっと近づいて尾をつかんでグイッと引っ張ると驚いたムジナは何か逃げようとするが、節穴の尻尾が抜けずになかなか逃げられない。あわてたムジナは尻尾を引きちぎって、血を流しながら逃げていった。ずいといんはムジナを探しに行ったが、河原に向かう坂で血の跡が消えそこからのゆくえがどうしても分からない。可哀そうなことをした、とそれからのずいといんははじめにお経を読むようになったという。

いずれも、昭和の初めごろに伝わっていたお話。「ずいといん」の話などは、年寄りが孫を子守しながら話してあげたもので、明科だけでなく広い地域で語られていた話である。



ムジナとされてきたニホンアナグマ（岩洲公園にて）

カッパのいたずら

川が淀んで流れがゆったりしているところを、淵という。淵と呼ばれる場所は各所にあるが、そこでは不思議なことが起こったり、カッパがいたずらをするという話が伝わっている。

下押野のちような淵は、高瀬川が切れ込んでいる場所で、昔、大工がこの淵でチョウナを磨いていて川に落としてしまった。いくら探しても見つからなかったので、この名前が付いたといわれている。

会田川が城山の裾をめぐるって流れるあたりをカッパ淵といい、そこにはカッパが住んでいるといわれていた。カッパは子どもを淵に引きずり込むと信じられていたので、ムラの人々はみんな、そこへ子どもたちを泳ぎに行かせることを恐れていた。近くに住むある人が畑仕事をしていて、芋の煮ところがしのコビルを食べようとしたところ、何者かに取られてしまった。腹が立ったので、そこにワナを仕掛けておいたところ、犬とも人間ともわからない生き物がかかった。殺そうかとも思ったが、かわいそうなので放してやることにし、一つだけ約束をさせた。それは、カッパで水遊びをしていて溺れそうになったら、必ず助けてくれるというものだった。しばらくの間その約束は守られていたが、洪水で流れが変わってしまったら、助けてくれない



カッパ駒引き話 (村上紀子画)

くなってしまった。きっとカッパもどこかへ行ってしまったのだらうと噂しあった。

塩川原のある人が犀川端に馬をつないで草刈りをしてた。するとカッパが馬のしっぽに食らいつき、川へ引きずり込もうとしているではないか。驚いた馬は、しっぽにカッパをつけたまま家に逃げ帰ってしまった。困ったのはカッパで「どうかもとの川へ帰してください。その代わり、これから塩川原の人にだけはいたずらしたりいじめたりしませんから」といって命乞いをした。かわいそうに思った塩川原の人たちは、カッパを川に放してやった。それから塩川原の人だけは、カッパの水難を逃れるといわれている。

こうした話はちょっとした川があればどこでも聞ける話で、小泉では仏様に供えたご飯を食べるとカッパにひかれなといわれていた。

龍門淵の枕貸し

龍門淵は明科の人にとってはよく耳にする場所である。現在は「あやめ公園」という呼び名の方が通りがよくなっているようだが、この淵にはいろいろな話が伝わっている。

たとえば、ここで七夕の日に水浴びをすると、七夕様が

機を織っている音や、美しい歌が聞こえるといわれている。そして、この淵は四賀村五常の法音寺の龍宮淵へ通じているともいわれている。

また、この淵で枕を貸してくださいとお願いすると、貸してくれたものだという。昔は冠婚葬祭やムラの寄り合いなどがあると、それぞれの家に集まって行われた。各家ではそんなに多くのお膳やお枕をもっていない。ムラでかたりの数を準備している場合もあるが、それでも足りない場合は、必要な膳腕の数を紙に書いて龍門淵に浮かべておくと、翌朝にはその数の膳腕がそろえられて淵に置かれていた。みんなは、こうして必要な時に、その数を書いては淵の主から膳腕を借りて重宝していた。

が、あるとき、某所に膳腕を貸し出したところ、一個をごまかして返さなかった。そのことがあって以降、どんなにお願いしても膳腕を貸してもらうことはできなくなってしまった。淵には主である龍神が住むといわれていたので、不届きものに腹を立てた龍神様の人々の願いを聞いてくれなくなってしまったのだと、みんなは噂しあった。

龍神様の正体は白蛇だともいわれ、水の神様としてあがめられていた。今でも龍門淵には龍神様の祠がまつられ、年に一度お祭りが行われている。

池や川にまつわる話

萩原にある池ノ戸池は、底なしの池といわれ日照りの時も底の水が枯れることはない池だった。陸郷のでいらぼっちがこの池の主になり、仔馬の牝馬を池に引っぱり込もうとしたり、美しい娘に化けて泉福寺の和尚さんを引っぱり込んでしまったりもした。寂しい夕方などにこの池の端を通ると美しい女に会って、肝をつぶして逃げ帰ったなどという話がいくつか残っている。

また、川の近くでは水死人を発見することがあり、どこかの村でも人々は死体を拾い上げると面倒なので、お互いに死体を棒で向こう岸へと押しやったものだという。時々、亡霊を見たという人もいたり、盆になると亡霊たちが川の上をさっさっさと渡って家に帰っていく音が聞こえたものだという。

明治三年（一八七〇）、信心深い人が水死者の霊を慰めるために、土手にお題目塔を立てて供養したら、亡霊は出なくなったという。

そのほか、川はよく氾濫して洪水が起こる。そんなとき、自分のほうへ水が来ないように「水ひき」といって、瀬を向こう岸へ追いやることをした。対岸のものに見つかるとどんなことになるかわからない命がけの仕事である。まづ、戸隠からお水をいただき桶に詰めて地面におろさない



龍門淵の龍神様祠付近（大正末ごろか）



水ひきの若者たち (村上紀子画)

ように運んでくる。そして河原へ着けば酒盛りをして氣勢を上げ、若者が大勢で川の中へ飛び込む。持っていた水を川向こうの岸めがけてまいていくと、瀬がその通りに変わるのだという。

ずっと昔、水ひきをしたことがあり、犀川の向こう岸まで水ひきをしていった。向こう岸にたどり着くかつかないかで引き返さないと見つかる大変な目に合う。ところが、そのとき、のろまな二〇歳ぐらいの若者が見えなくなってしまった。みんなは流されてしまったんだろうかと心配していたが、水ひきのときには、人を一人踏み込まなければいけないという掟があったから、若者は踏み込まれてしまったんだろうともいわれた。

水の神様に願いを聞いてもらうための生贄ということだったのだろうか。なんとも残酷な話である。

農事の目安としての自然

多くの家が第一種産業である農業に従事していた時代、自然の移ろいは人々が常に関心を払っていることだった。現在のように天気予報が発達している時代とは違い、雪形や雲の流れ、花の咲き具合、鳥の鳴き声など自然の中にある様々なもので、農作業の時期を判断していたからである。かつこうが鳴いたら（鳴く間というところもある）、豆をまけという言い伝えはいたるところにあるが、雨が来る、風が来るなど天候の変化にはとても敏感であった伝承が、明科の各所に伝わっている。

雨が降る前に済ませてしまいたい仕事もある。逆に雨を期待して蒔きものをすることもある。ツバメが低く飛ぶと雨、蜂が高いところに巣をつくるとその年は雨が多い、ミツバチが夕方遅くまで働くと雨になる、長峰山や光城山が晴れば雨、犀川のせなりがすれば雨、お月さんが笠をかぶれば雨、家の中に煙が詰まって抜けぬ時は雨、飯を炊くときに釜肌に水が回る時は雨などなど、いろいろなものを使って雨が来る予報をしたものであった。こうした現象が目につくと、「蜂が遅くまで働いているから明日は雨だから、今日のうちにこの仕事を片付けてしまおうぞ」などといって、仕事をせかせかしたものである。

秋は南があくと天気、春は北があくと天気などともい

い、雲の出ている方角でも天気を占い、その様子によって仕事の段取りを立てた。いくら曇っていても栗尾山が晴れていれば降らないともいい、曇っていても必ずしも雨や雪が降るわけではないことを人々は経験的に知っていた。また、雨が降る前には独特のにおいがする、という人もいて、自分の五感で天気の変わり目を予測することはままあった。今でも年寄りが、腰が痛い、膝が痛いなど体調で天気の変わり目を予測するのと同じである。

雪の多い少ないで、その年の作物の出来を予測したりすることもあった。池桜の御嶽山のくぼに雪が残っていること、その年は作物が当たりだといわれていた。雪がたくさん降ると、毎日の生活には不便をきたしたし、家の周囲や道路の雪かきもしなくてはならない。現在の私たちが考えると、雪は迷惑なものではないように思ってしまうが、下伊那郡阿南町新野の雪祭りのように、雪を降らせる真似をしてまで豊作を祈るところもあって、雪は豊作のしるしと考えるところが多い。雪は水になつて恵みをもたらしてくれることにもつながるし、あまりにも降る量が少ないと水不足の心配をしなくてはならなかった。

そのほかに鳥の鳴き声やこぶしの花や桜の花の咲く時期、咲き方でも作物の豊凶を予測したりもした。農業に携わる人々は、毎年同じ時期に同じように来る雪や風、花の咲き具合にはきわめて敏感で、多少の違いは容認できても



春を告げるコブシの花、作物の豊凶を占う花でもある



山菜なども季節を感じる大きな目安となる

大きな違いは作物の豊凶や天変地異につながる知らせと受け止めていた。自然のサイクルに対して農業従事者や山仕事をする人々は常に敏感だったが、その敏感さは両親・祖母・曾祖父母と伝承によって受け継がれ、しらすしらすのうちに自分の体を使って体得し、経験を積んで体感できるものへと育んだものだったのである。
(倉石あつ子)

4 暮らしの中にある祭り

神をまつる日

私たちの暮らしは労働の日々と仕事を休んで神をまつる日とから成り立っている。代表的なものとしては正月・節分・彼岸・節供・盆などのように家ごとに行う祭りと、オ

フネ祭りや講のように集団で、あ

るいは地域ごとになまつるものがある。こうした祭りの日を年中行事ともいうが、かつては神をまつる日は仕事を休むものとされ、この日働いているものは「怠け者の節供働き」などといわれた。

特に正月と盆は各家で一年を代表する大きな祭りとしており、正月も盆も特別のご馳走をした。

また、仕事が一段落すると「農休み」を村ごとに相談して決めて、二日間とか三日間とかを休む日と定めることもあった。とくに田植えが終わった時の農休みは、餅を



新盆のお膳

萩の葉で水をかけるよう萩の枝も見える(七貴)



仏さまを墓から迎えてきて、盆棚に案内し
線香を立てておまつりする(大足)

ついたり牡丹餅をつくったりして、神棚に供えたり自分たちも食べたり、馬や牛などにも与えた。新夫婦は妻の生家に里帰りをして骨休めをしてきたりして、日ごろ疲れた体を休め、次の労働の日々への備えをした。農休みが終わると、麦刈り・養蚕の繁忙期が待っていた。

オフネまつり

① オフネ祭り

安曇野市内では穂高神社のオフネ祭りをはじめ、各地でフネ型の山車を曳きだす祭りが行われる。山車は船の形をして



和泉神社の柴舟（平成26年（2014））

いるので、祭り自体もオフネ祭りと呼ぶところが多い。

明科のオフネの特徴は何といっても宵祭りの際、船の縁に数百本のローソクがともされることである。ローソクブネと呼ばれる所以である。潮神明宮・萩原神社・大足諏訪社・上生野正八幡宮のオフネがそれにあたる。オフ

ネの上には蚊帳などで作った山に松の木などが飾られ、木偶を何体か並べて歴史上の出来事や物語の一場面が再現される。ローソクの明かりで照らし出された木偶の飾り物に乗せたオフネが、集落をゆらゆら揺れながら曳き回される光景は幻想的ともいえる。普段は人通りの少ない通りも、宵祭りの夜ばかりはオフネを見ようという人々が集まり、賑やかになる。



犀宮社の柴舟 (平成28年 (2016))



境内を三周する光五社神社の舞台 (平成27年 (2015))

② 荻原神社

秋も深くなる一〇月初めの週末に、明科七貴の押野山中腹の荻原神社で祭りが行われる。荻原神社のオフネは市内屈指の大ききで、二〇畝を超えていたこともあり、オフネ作りや曳行は、男子で結成された若貴連がとりしきっていた。しかし、昭和の終わりから平成はじめにかけて若貴連の人員も減少し続け、平成一二年（二〇〇〇）には若貴連は解散し、祭りは秋祭り実行委員会による運営となった。荻原では、高度経済成長期に若者が集落からいなくなつた時など、祭りの危機に住民が協力し合って乗り切ったことがある。現在でも祭りの日は大勢の人たちで境内は賑やかに盛り上がる。



神事が終わって余興の始まりが告げられるのを待つ（平成30年（2018））



荻原神社のお船（平成27年（2015））

③潮神明宮

春の盛り、ゴールデンウィークに行われるのが潮神明宮の祭りである。江戸時代中頃から続くといわれている潮神明宮の祭りは、宵祭り・本祭りともに二艘の巨大なオフネが曳き出される。曳行ルートは宵祭り・本祭りともに同じで、国道一九号線の木戸橋付近を出発し、国道を通って神社まで向かう。オフネの曳行には、子どもたちが乗ってお囃子を演奏する山車も出て賑やかになる。沿道の家では、家族総出で祭りを楽しむ人も多い。宵祭りでは、祭りのために作られたみかん灯籠の鳥居が出現する。この鳥居を勢いよく通り抜けてオフネが境内へと入っていくのが、宵祭りのクライマックスとなる。オフネが境内に曳き入れられ、神事が行われた後、人々が楽しみにしているマジックショーなどの演芸が始まり、人々は日ごろの憂さも忘れて楽しむ。



ムラの人々が賑やかにフネを曳く（撮影年不明）



オフネを作るのも引くのもムラの人々の務めである（撮影年不明）



潮神明宮の柴舟（平成24年（2012））



舞台（山車）に乗る子どもたち。お囃子に参加して祭りを盛り上げる（平成24年（2012））



宵祭りにローソクを灯した柴舟 (平成29年 (2017))

④ 大足平

大足平諏訪社は平集落を見下ろす山の中腹にあり、晴れた日には雷山^{かんだちやま}や長峰山の向こうに安曇平や北アルプスを望むことができる。大足の場合、公民館からお宮までの急な坂道は、オフネを曳くというよりは、押し上げると言ったほうが正しいだろう。かつては宵祭り・本祭りともにオフネを諏訪社まで押し上げていたが、若者が減り、宵祭りにはお囃子の一行が神社まで行くのみで、オフネの曳行は本祭りのみとなった。本祭りの日には、富くじが引かれる。富くじの景品には洗濯物干しや毛布など生活用品のほか、景気の良い時代にはテレビなども景品にあがったことがあった。今も各家で購入した富くじを手にした人々で境内に列ができるほどである。



諏訪社への坂道を押し上げられる柴舟 (平成29年 (2017))



ローソクの火を絶やさないのは一苦労
(平成26年(2014))

⑤上生野正八幡宮
犀川沿いの上生野正八幡宮では祭りは一〇月はじめに行われる。オフネの中心となる櫓部分が老朽化したことや人口の減少に伴い、一時オフネをつくることができなくなった。軽トラックに飾りつけをして、オフネに見立てた時期もあったが、平成二三年(二〇一〇)、新たに櫓を作ったことを契機にオフネだけでなく、親友団という祭りの組織も復活させた。集落の人口が少なくなるなか、自分たちで何とかして祭りを続けていこうという強い意志のようなものを感じる。



上生野正八幡宮の柴舟(平成29年(2017))

豊繭を祈った繭玉額

明科の各地区では、春と秋の二回、氏神様の祭りが行われた。とくに秋祭りは盛大に行われ、その華麗さ・にぎやかさを誇ったものである。境内には屋台店が並び、地方回りの劇団を呼んだりして芝居も行われた。各家では、お祭りといえはお客呼びをしてご馳走をし、オフネを見たり芝居を楽しんだりしたものであった。お祭りのご馳走といえ、赤飯に鯉こくなどで、客呼びをするのが当たり前だったので、お祭りの前には客用の布団干しをしたり、ご馳走



和泉神社境内蚕神社祠とモロブタに入れられた
米粉の繭団子 (平成31年 (2019))

の準備をしたりして女衆は忙しい思いをしたものであった。現在も多くの神社ではオフネを作って曳行をしているが、地域全体が高齢化し、フネを引くことが難しくなっている地区も出てきている。そうした地区でも神社の拝殿前にオフネをつくって飾ることだけは、何とか続けようと工夫をしている。

小泉の和泉神社は明科町保存林に指定された社叢に囲まれ、社殿・拝殿・社務所・神楽殿・宝蔵などの建物が配置されている。境内には蚕玉社こだまじやなどの小祠もまつられている。かつて、養蚕が盛んに行われていたころは、祭りの折



供えられた繭額



祭日にまかれる繭団子をきそって拾う参拝客（平成31年（2019年））

にはその年取れた繭で「養蚕神社」の蚕額をつくって奉納したものであった。

養蚕が廃れてしまった現在は、それでも習俗だけは維持しようと、米の粉で作った繭玉で代用している。最初は、それを各組長の奥さんたちが出て作っていたが、現在は菓子屋さんにお願いして作ってもらうようになっていた。祈願する内容も豊蚕^{ほうさん}ではなく、五穀豊穰・家内安全・交通安全などに変化した。一〇月初めに養蚕が一段落するので、今年の繭の出来に一喜一憂しながらも、来る年の豊蚕を願って繭で作った額を奉納したものが、養蚕衰退とともに祈願対象も作るものも変化しているのである。

拾った繭玉は各自家に持ち帰って、あぶって砂糖醤油などを付けて家族でいただくという。昔はこの日、ヒキ拾いや繭かきの手伝いに来てくれた人を招いて、餅をついてご馳走した。シンノウ呼びなどといった。

災いをよける風の神祭り

春の中日に風の神を追い出すための風祭りをする。風除けの風祭りは二百十日が近づく^{にひゃくとおか}と鎌を竿の先につけて風を切る、などといった風除けをするところは多いが、明科地域では春の彼岸に藁人形を作って、神送りをするという特色を持っている。

各戸で五寸から二尺ぐらいの藁人形をつくって、風の神とする。人形には和紙の着物を着せて帯をしめるが、着物の袖は長くして各家の家紋を入れる。「風の神」と書く場合もある。着物を合わせた上に帯を締めるが、帯にも模様をかいいたりする家もある。顔の部分も藁を丸めて作り、そ



様々な表情の風の神（清水）



清水の風の神（平成25年（2013））

の上に紙を貼って顔をかく。髭を描いている家もあり、頭にちよんまげを結っている家もあり、その表情や姿は家ごとに違いがみられる。

陸郷では、この人形で家族の頭の上、両足、寝床などを祓うところもみられる。作った人形には、自分たちの災厄をすべてしよい込んでいってもらう。柏尾の風の神は、神社の裏手の崖っぷちに刺してくると、陸郷では山へもっていった捨ててきた。「風の神」に家族一人一人の災厄や病氣をつけて村境などに送ることにより、人々の平穏を祈ったとみることができる。祭りの行われる時期からいえば、春の農作業の始まりに先立つ「祓」の儀礼ともみることができる。



柏尾の大日堂わきの崖にたてられた風の神 (平成24年 (2012))



柏尾の風の神 (平成26年 (2014))

山の神をまつる日

山仕事に従事する人の多かった明科地域は、山の神をまつっている地域も多い。山仕事は、「板子一枚下は地獄」といわれている海の仕事同様、枝打ちや木材の伐採にもさまざまな危険を伴うので、神様にお参りしてから山に入る。山仕事に従事する人々は身を慎み、事故や怪我のないように務めたし、無事を祈って山の神も大切にまつっていたのである。明科地域の山の神は、他地域のムラごとにあるような小さな祠の中にまつられている山の神とは異なり、いくつかの集落が集まって氏神様の祭りに匹敵する大きな祭りを行っている。

祭日は七月一七日や八月一八日が多く、祭神は大山祇命おおよまづのみことがまつられている。矢ノ沢、切久保、高登屋たかとや、天田、木下した、小日向こひなた、峰方、中ノ郷、鶴山、上押野、塩川原などそれぞれが山の神の社を備え、祭りはかつてたいそう賑やかに行われた。

それぞれ鳥居・社殿・石灯籠などをそなえ、大山祇命をまつる祭祀が行われたのち、芝居、素人演芸、映画などが行われ、村の人々は一夜を楽しんだ。高登屋などでは獅子舞も行われ、氏子の範囲も矢越やこせ・池桜・矢下沢の三集落が所属していた。高登屋は戦国時代の見張りの城跡といわれ、浮州うきすが森ともよばれて、社叢には檜・松・櫟の古木が



切久保の山の神の鳥居



高登屋の山の神の拝殿

茂り、筑北方面からもよく見えたという。
また、峰方の山の神は高い所にあるので、別名「ふぐりひやし」金玉ひやし」といわれるほど、夏でも涼しい風が吹き上げてきた場所であった。



ふぐりひやし 峰方の山の神の拝殿

ムラ人を守る道祖神

安曇野市域各所で道祖神の姿を目にする。明科地区もその例にもれず、ムラの入り口や辻などに道祖神が祭られている。ドウソジン・ドウロクジンなどと呼ばれ、文字としては道祖神・道陸神などという場合もあるし、男女二体を刻んだ双体道祖神もある。池桜のような接吻道祖神もあり、その形態はいろいろである。また、木戸の道祖神のように文字碑の裏に安

政四年（一八五七）と刻まれている建立年代の明確なものもみられる。建てたのは「喜登中」の人々であることも明記されており、部落の入り口で悪魔や悪疫が入らないように、守っているのだといわれている。ドウソジンの役割としては、道行く人を守る神でドーロクジン祭りの時には、新婚



小芹の道祖神。双体道祖神は安永4年（1775）の造立



下押野の双体道祖神（天明2年（1782））



矢の沢の道祖神（嘉永2年（1849））

の婿は感謝を込めて人一倍働くものだといわれている。また、前年葺いたドーロクジンの屋根を人知れず前夜のうちに燃やしてしまうと早く結婚できるともいわれていた。燃やす行為を「古家を焼く」などといったものである。

道祖神の祭りは一月一四日・一五日と考えられており、オンベ焼きあるいはオンベ笑いなどといった。犀川西の地域や明科でも現在はこの行事を三九郎と呼んでいるが、かつては「オンベ笑い」と呼んでいた。まず、正月の飾り物のうち外飾りを一月七日に、内飾りを一五日に外して、松・注連・オヤスをオンベの場所に集める。集めるのは子どもたちの仕事で、少年たちの最年長でまとめ役をする者をオ



三九郎の準備を行う

ヤカタと呼んだ。オンベの場所は道祖神の近くにあり、キド（組）ごとに分かれていた。オンベを建てるのは若い衆の仕事であり、たとえば七貴では地面を少し掘って、五、六間のクヌギの木を建てる。この頂上には子どもたちの書初めを張り付け、三、四尺離れた下へ麦からを巻き付ける。下部には青竹で骨組みをした上に半球形の小屋をつくる。この小屋をムロといったが、現在、オンベは立てずにムロだけをつくるようになっていた。オンベを立てていたのは、明治三〇年ごろまでのことであった。キドによっては書初めとともに扇子や麻・三日月の作り物などを飾るところもあった。オンベが燃えて倒れるや否やこれらの飾り



池桜の接吻道祖神

物を奪い合い、頂上についていたものを取りと縁起がいいといわれた。また、オンベの火で焼いた餅を食べると、歯を病まないといったし、書初めが高く上がると、手が上がるといわれた。

オンベに火をかけるのはそれぞれの日の夕食が済んだころであるが、子どもは火をかけさせまいとし、若い衆は火をかけようとして争った。子どもも若い衆も楽しみな行事の一つであった。

陸郷ではオンベについて次のような話を伝えている。疫病神が道陸神に今年一年間の病人にさせる候補者の名前を書いておくように命じた。疫病神は、一五日にそれを調べに来るが、道陸神は一四日に家を焼かれてしまったので「昨夜の火事で焼いてしまったてわかなくなりました」という。疫病神はあきらめて次の集落へ行くのだとい

う。

小正月の火祭りをこうした伝承と結び付けて語るところは、あちこちに見られ、一年間各地を回って稼いできた金を焼かれてしまったので、道祖神はまた翌日から稼ぐための旅に出ると伝えているところもある。



町一の道祖神といわれている双体道祖神（万延元年（1860））

お堂に集まる日（信仰を伝えるお堂）

各集落にはお堂とよぶ施設がある。江戸期から、明治初年にかけては明科には六〇余のお堂があったといわれており、これらの中には有力者が死後の安楽を祈願するための後生堂として建立したものもあるというし、山間集落のまとまりを維持し、心のよりどころを保つための目的をもったものも多かったという。それぞれの集落の堂は、中にまつられている仏像などによって、観音堂、阿弥陀堂、大日堂、十王堂などの呼び名がある。たとえば竹の花のお堂に

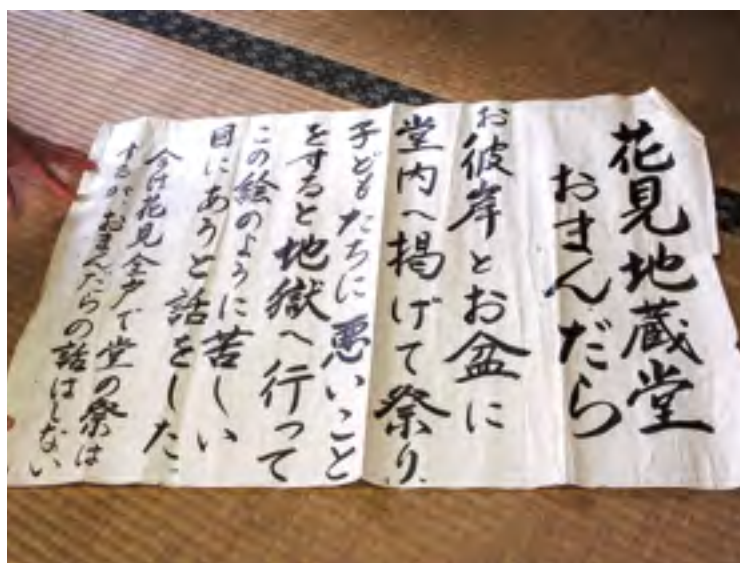


地藏堂の近くにはくぬぎ林の遊歩道が続き、
念仏講のころは下にフクジュソウが真っ盛りである



竹の花花見の地藏堂

は観音様がまつられているので、観音堂と呼ばれている。観音様の高さは三七センチと小さなもので、もとは十一面観音だったという。



堂内には地獄絵図が飾られている。地獄絵図をお曼荼羅と呼んでいるお曼荼羅をどう使うかを書いた紙も残されている

同じく竹の花の花見の地蔵堂のお祭りは、お堂の中央で集まった人が輪になり、大きな数珠を回しながらお念仏「南無阿弥陀仏」を唱える。お念仏は、一〇回お数珠を回して終わりにする。この日は嫁に行った人がお墓参りなどにきていたりすると、その人も参加して行われる。昔は子どもたちも大勢いたというが、現在は数人だけになっている。お堂の中の本尊の左右にはお曼荼羅が飾られており、そこ



花見の念仏講 大きな数珠を回す



毘沙門堂内の毘沙門天像

には地獄絵図が描かれている。大人たちは子どもたちに、その地獄絵図を指して「おまえたち 悪いことをすると地獄へ行つてこの絵のように苦しい目にあうぞ」と諭したものだという。現在は、堂の祭りはするが、子どもたちが怖がるのでお曼荼羅の話はしなくなった。お念仏が終わると、持ち寄った茶菓子を広げてお茶会をし、頃合いをみて解散する。

大足の平集落では、毘沙門堂でオコシン（庚申講）が行われる。現在は一月か二月に行われるハツドと一月末に行われるシマイド、四月二〇日に行われる毘沙門堂での講の三回だけになっている。ハツドとシマイドはたいてい温泉などに出かけるので、ムラの中でのオコシンは四月二〇日に毘沙門堂の中で行われるものだけになっている。平にはおよそ四〇戸の家があるが、毘沙門堂の講が最も大きく、二〇軒の家が加入している大所帯の講である。朝、毘沙門堂の掃除をして、お茶を飲みさまざまな話をしてすごし、一時間ぐらいで解散となる。夕方再び改めて集まって宴会をする。



大足の毘沙門堂

現在はお堂に集まって行うが、昔は各家を当番で回って行っていたという。参加者は男性が多く、掛け軸をかけ、ろうそくや線香を供えてお参りし、その後飲食して過ごす。お堂ができたのは平成元年（一九八九）ごろで、それ以降現在のようなやり方が続いている。

戦後すぐのころは、この夜、外に幕を張って映画の上映などをした時期もあり、大人も子どももなかなか楽しみな日だった。庚申講に加入しているメンバーは、葬式ができると互いに手伝いあつて葬式を執り行ったものだが、現在は葬祭センターなどを利用するので講の役割もだんだんに薄れつつある。

さまざまな講と人々の絆

『明科町史 下巻』に記載されている講は、庚申・二十三夜・念仏・山の神・太子・観音・蚕玉・伊勢・戸隠・えびす・石尊・豊川稻荷・秋葉・八幡・三峰・金山・成田・東福寺荒神・金毘羅・有明・富蔵・甲子などがあげられる。信仰を同じくする者や、仕事仲間や集落単位で行うものなど、講の組織のされ方はさまざまである。そのうち、ほとんど全戸が加入していた講は庚申講、伊勢講、戸隠講、三峰講などである。

特に庚申講はこの集落でも、一年に六回あつまって青面金剛の掛け軸をかけ、お灯明をあげ経文を唱えてお参りした。加入者の家を当番で回って歩き、箱などに入った掛け軸など道具一式が回されてきた。この夜は遅くまで起きているものといわれ、ムラの相談事をしたりしながら飲食をして過ごした。戦後、サラリーマンが多くなるにしたがって、この回数を維持することはできなくなり、一年の初めのハツドと終わりのシメドだけを行うようになったり、どちらかは料理屋などで行うようになった。庚申講はムラの連絡事項を伝えたり、様々な情報交換をする機会でもあったが、何よりも葬式ができたときに協力し合う組織として大きな役割を果たしていた。葬式ができると庚申講の仲間や同姓にまず知らせが行き、葬式の段取りが整えられた。また、庚申講の仲間の重要な仕事として、葬家の親

戚へ葬式の日取りを伝えに行く告げ人の仕事と墓穴を掘る仕事があり、この仕事にあたった人々には特別な待遇がなされた。告げ人には訪れた先で酒が出されたとし、穴掘りにはお膳を整えて慰労がなされた。

このように葬式と結びついて存在した庚申講は、昭和の終わりごろまで続いていた集落もあるが、たとえば蚕玉講あるいはヒキメ講のように生業と結びついた講は、その仕事で衰退するにしたがって講も衰退し、現在は行われなくなっている。ヒキメ講は養蚕をする女性たちが更埴市八幡の武水別神社にお参りに行く講で、神社にお参りして豊蚕（繭）を祈願してお礼をもらったり、神社近くの旅館うづらやに宿泊したりして、農繁期前のひと時を楽しむときともなっていた。

戸隠講や伊勢講のように代参でお参りに行き、お礼をもらってきて各戸に配布していた講も、次第に講の加入者が減少し、現在は細々と続いているだけとなっている。

小芹の七名庚申講しちめいこうしんこうのように、組合の規約が定められ、共同で使用する什器などを所有していたところもあり、講は救済事業を目的とすると規約にうたわれているように、互いの助け合いが目的であったものが多い。しかし、山間部の集落では家自体が他地域に移住してしまったりして、講が維持できなくなっている例もみられる。

（宮本尚子・倉石あつ子）

小芹の規約

- 一 本組合は古瀬里七名庚申貯金組合と称す
 - 一 本組合は救済事業を目的とす
 - 一 一回一人に付き金参拾銭宛、
庚申当日に貯金するものとす
- (中略)
- 一 組合に葬儀ある場合は組合に於て
墓地奉仕をなすこと。但香典は他部落並とし、
香典返しはなさざること。
 - 一 七日の供養には列席すること



町区で所有していたガン（蓮台）
(平成30年(2018) 豊科郷土博物館「どうする葬式?どうなる葬式?」展より)

1 明科町そして安曇野市へ

明治六年（一八七三）一二月大蔵卿大隈重信からの布達により江戸時代、幕府領や池田組に属していた村々が合併し、明治八年（一八七五）一月二〇日、中川手村・東川手・七貴村・陸郷村が誕生した。その後中川手村・東川手村・上川手村による明治一三年から二二年まで四年間の聯合村を経て、昭和の大合併を迎える。昭和三〇年代に書かれた「明科町町村合併史資料（合併町村ごとの沿革）」に各村の沿革が記されている。

○中川手村

幕末当時、中川手は明科村・塔ノ原村・大足村の三ヶ村に分かれている。松本藩預所の所管で川手組に属すが、明治元年二月名古屋藩取締所の所轄、同年十一月に藩籍奉還により伊那県の所管となる。明治四年十二月筑摩県の所管となる。明治五年二月区制に伴い、明科村は第二十三区、塔ノ原村・大足村は第二十四区に属した。明治六年三月の大小区制に伴い、明科村・塔ノ原村は第三大区第九小区、大足村は第三大区第十小区に属した。明治八年に三ヶ村は合併し、中川手村となる。明治九年、長野県の所管となる。



明科町と七貴村の合併調印式（昭和31年（1956）9月19日）

○東川手村

東川手は戦国時代に小笠原氏に代わり武田・石川氏が領している。江戸時代初期、麻績組に属し、潮村・潮沢村・上生野村に分かれている。寛永年間に潮村より潮山中村が分村して四ヶ村となり、幕府領から松本藩戸田氏の預り所となる。明治元年名古屋藩

塩尻陣屋、明治二年伊那県、明治四年筑摩県の所管となる。明治八年一月、四ヶ村は合併し、東川手村となる。明治九年、長野県の所管となる。

○七貴村

七貴は松本藩池田組に属し、中之郷・鶴山・上押野・下押野・塩川原・荻原・荻原新田の七ヶ村を一区とした。明治五年第十一大区第三小区に属した。明治八年二月、七ヶ村は合併し、七貴村となる。明治九年、長野県の所管となる。

○陸郷村

仁科郷矢原庄封建時代、池田組に属する。享保十一年以降、松



明科町と南陸郷の合併調印式（昭和32年（1957）3月8日）

本藩戸田氏の預り所となる。元は大穴・日岐の二村であったが、（年歴不詳）大穴村は寺村・中村・小泉村に日岐村は日岐村・草尾村・嶺方新田村（白駒ともいう）に分村する。明治四年七月に松本県、同年十一月に筑摩県の所管となる。明治八年合併により陸郷村となる。明治九年、長野

県の所管となる。

昭和三〇年一月一日、上川手北部の北村・中条・白牧・矢ノ沢が中川手村へ編入合併する。

昭和三〇年（一九五五）四月一日、中川手村と東川手村が合併し明科町が発足する。昭和三一年九月三〇日、明科町と七貴村が合併し、新明科町が発足する。そして昭和三二年三月一日、七貴区の鶴山・中之郷が住民投票により池田町へ分町する。昭和三二年四月一日、陸郷村の南陸郷地区、小泉・中村・金井沢が明科町へ編入合併し、平成一七年（二〇〇五）一〇月一日誕生の安曇野市につながる面積四二・二三平方メートル、世帯数二二六二戸、人口一一五三九人の明科町が誕生する。

安曇野明科あやめまつり

昭和六〇年（一九八五）六月二日・二三日、明科町制三〇周年記念としてスタートしたアヤメフェスティバルも令和元年（二〇一九）には三五回を数える。龍門淵前川でのカヌースラローム大会は第一二回大会から始まっている。カヌー『にじますカップ』として、フェスティバルを盛り上げた。二〇一六年リオデジャネイロオリンピックにおいて銅メダルを獲得した羽根田卓也選手もこのコースで技を磨いた一人であり、同年九月に凱旋し、三〇〇人を超す観客の中、記録会に参加した。名称も平成一年（一九九九）より水郷明科あやめまつり、同一八年（二〇〇六）から信州安曇野あやめまつり、そして令和元年より安曇野明科あやめまつりと変えている。



アヤメフェスティバルのようす

信州安曇野能楽鑑賞会

能楽師として国の無形文化財（総合指定）の認定を受け、明科町名誉町民である青木祥二郎（二二〇頁参照）が発起人の「水郷明科薪能」は、龍門淵公園に特設舞台を設け、平成三年（一九九一）から始められた。平成一八年（二〇〇六）、新市安曇野市の誕生に合わせて名称が「信州安曇野薪能」、平成二八年度から「信州安曇野能楽鑑賞会」に変わり、令和元年に二九回目を数える。

アルプススカイグランプリ

昭和六三年（一九八八）一〇月から長峰山山頂特別飛行台で行われたアルプススカイグランプリも平成五年（一九九三）よりパラグライダー大会となり令和元年で二六回を数える。昭和四五年（一九七〇）五月、川端康成・井上靖・東山魁夷の三氏が眺め、川端が「残したい 静けさ 美しさ」と評した、北アルプスと安曇平の雄大な景色を楽しみながら競い合う歴史ある大会である。

住所表記

新市安曇野市の住所表記について平成一六年（二〇〇四）



アルプススカイグランプリ (平成2年 (1990))



にアンケート調査が行われた。その調査結果が旧町村別にまとめられている。旧町村名を残したいという割合が一番高いのが明科であったことがわかる。全市集計の五三%が旧町村名を残すことに賛同し、現在の表記となった。明科住民の思いが反映された結果である。

明科いいまちつくろうかい

平成二五年（二〇一三）四月二〇日、明科地域の活性化と楽しく、安心・安全なまちづくりを目的に「明科いいまちつくろうかい!!」が発足。イベント協力やいいまちサロンの開催・ふれあいウォーキング・いいまち通信の発行など、市民と行政の協働により運営されている市民組織であり、この取組は他地区のモデルとなっている。

（平沢重人）

2 町歌「わが町」

昭和五七年（一九八二）三月、町制施行二十五周年記念事業の一つとして、町民憲章とともに町歌が制定された。作詞・作曲は、東筑摩郡朝日村出身の上條恒彦氏が手がけた。町から依頼を受けた上條氏は、二日間かけて町内各地を歩いて取材し、明科にふさわしい曲と詞を作り上げたという。

町歌「わが町」は、明科町の躍進を象徴し、明るく和やかなふるさとづくりを進めるためにつくられた。同年一月三日に開催された町制二十五周年記念式典でお披露目がなされ、以後、地域の行事などで盛んに歌われてきた。安曇野市への合併から一〇年余りを経た今でも地域の方々に愛唱され、親しまれている。（逸見大悟）

町歌 わが町

一、雄々しき山に向かい 二、ふるき歴史を刻む

息づくわが町

みずずかる信濃の

明け染める明科

かなめなる明科

なつかしきふるさと

なつかしきふるさと

水面はしる虹鱒

われを生みし父祖の地

ゆれるわさびの花

母なる山よ河よ

わきいずる山の水よ

あたらしき明日をになう

限りなくはぐくめ

若き心見つめよ

三、町を抱く長峰

風にざわめく樹々

茜さす明科

なつかしきふるさと

遠く海にそそぐ

犀川の清き水よ

美しき山の姿

とこしえに忘るな

明科 わが町

明科 ふるさと



町歌「わが町」のレコードと町歌制定を報じる「町報あかしな」№115

主な参考文献（五十音・年代順）

- 明科町史自然編編纂委員会 2007『明科町史 自然編』安曇野市教育委員会
- 明科町史編纂会 1984『明科町史 上巻』明科町史刊行会
- 明科町史編纂会 1985『明科町史 下巻』明科町史刊行会
- 明科町史編纂会 1986『写真集 明科の社寺文化財』明科町史編纂会
- 明科町史編さん会 1981『明科の石造文化財』明科町史編さん会
- 明科町教育委員会 1991『ほうろく屋敷遺跡』明科町教育委員会
- 明科町 1954『明科町町村合併資料』
- 安曇野市教育委員会 2019『潮遺跡群潮神明宮前遺跡3』安曇野市教育委員会
- 植木岳雪 2000「糸魚川―静岡構造線活断層系北部の活動開始時期 断層の東に分布する中期更新統の層序・年代に基づいて」『日本地質学会学術大会講演要旨』
- 荻原の昔と今を再発見する会 2013『荻原の昔と今を再発見』荻原の昔と今を再発見する会
- 加藤碩一・佐藤岱生 1983『信濃池田地域の地質 地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』地質調査所
- 小坂共栄 1991「大峰帯の地質とそのフォッサマグナ 発達史における意義」j.FAC.SCI.SHINSHU UNIVERSITY,vol.26,No.2
- 小林一富・熊井秀夫・塩入節雄 1993『木戸部落史（ふるさと木戸昔話）』小林一富・熊井秀夫・塩入節雄
- 小林国夫 1965「長野県明科町吐中針葉樹層の C14 年代 ―日本の第四紀の C14 年代 X X V―」『地球科学』1965 巻 81 号
- Tadao Kamei 1958 Discovery of Megacerid Deer from Totchu, Nagano-Ken Central Japan Department of Geology, Faculty of Liberal Arts and Science, Shinshu University
- 田中武夫編 1969『長野県水産史』長野県漁業協同組合連合会
- 町報あかしな縮刷版刊行委員会 1989『町報あかしな縮刷版』町報あかしな縮刷版刊行委員会
- 長野県埋蔵文化財センター 1993『北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 原山智・大塚勉・酒井潤一・小坂共栄・駒澤正夫 2009『松本地域の地質 地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』産総研地質調査総合センター
- 東川手のあゆみ保存の集い 1980『東川手 その苦闘と誇り』東川手のあゆみ保存の集い
- 東川手の歴史を語る会 2005『うるわしきふるさと東川手 昔日の原風景を懐古』東川手の歴史を語る会
- 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会編 1980 復刊『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 第二巻下』東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会
- 町田洋・松田時彦・梅津正倫・小泉武栄編 2006『日本の地形5 中部』東京大学出版会
- 目で見る明科史発行委員会 1977『目で見る明科史』目で見る明科史発行委員会

協力者一覧（敬称略、五十音順）

板垣綾香、大塚 勉、小椋 緑、寶 喜吉、中村 憲、
早瀬亮介、原口 忍、二木典子、穂高神社、松本市四賀化石館、
松本城管理事務所、宮下幸光、安井邦夫

執筆者（五十音順）

青木 弥保（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館係）
大澤 慶哲（安曇野市文化財保護審議委員）
倉石あつ子（安曇野市豊科郷土博物館職員）
佐藤 明利（安曇野市農林部耕地林務課長）
土屋 和章（安曇野市教育委員会教育部文化課文化財保護係）
那須野雅好（安曇野市教育委員会教育部文化課長）
原 明芳（安曇野市豊科郷土博物館長）
平沢 重人（安曇野市文書館長）
逸見 大悟（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館係）
松田 貴子（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）
三澤 新弥（安曇野市教育委員会教育部文化課文化振興担当係長）
宮本 尚子（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）
横山 幸子（安曇野市教育委員会教育部文化課文化財保護係）

『明科の宝』

令和2年（2020）3月31日 発行

編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

発行 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会
（中核館：安曇野市豊科郷土博物館）

〒399-8205 長野県安曇野市豊科 4289 番地 8 TEL 0263-72-5672

印刷 株式会社プラルト